

茨城県教育財団文化財調査報告第115集

国営常陸海浜公園整備事業に伴う  
埋蔵文化財調査報告書

沢田 遺跡

平成8年9月

建 設 省  
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第115集

# 国営常陸海浜公園整備事業に伴う 埋蔵文化財調査報告書

さわだ  
沢田遺跡

平成8年9月

建設省  
財団法人 茨城県教育財団

## 序

国及び茨城県は、ひたちなか市（旧那珂湊市、勝田市）と東海村にまたがって位置する水戸対地射爆撃場跡地内に、「常陸那珂国際港湾公園都市」の建設を進めております。この建設予定地域内の海岸砂丘地帯には、埋蔵文化財包蔵地である沢田遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、運輸省及び茨城県から埋蔵文化財発掘調査事業についての委託を受け、昭和62年7月から平成5年3月まで五次にわたる発掘調査を実施し、その成果を3部の報告書にまとめて刊行いたしました。さらに、平成6年度には建設省関東地方建設局からの委託を受け、平成6年10月から平成7年3月にかけて沢田遺跡の第六次発掘調査を実施しました。

本報告書は、沢田遺跡の第六次発掘調査における調査成果を取録したものです。本書が、研究の資料としてはもとより、郷土の歴史の理解を深めると共に、教育、文化の向上の一助として広く活用されることを希望いたします。

なお、発掘調査及び整理を進めるにあたり、委託者である建設省関東地方建設局からいただきました多大な御協力に対し、心から御礼申し上げます。また、茨城県教育委員会、ひたちなか市教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただきましたことに、衷心より感謝の意を表します。

平成8年9月

財団法人 茨城県教育財団  
理事長 橋本 昌

# 例 言

- 1 本書は、建設省関東地方建設局の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成6年10月から平成7年3月まで発掘調査を実施した茨城県ひたちなか市阿字ヶ浦町千駄切に所在する沢田遺跡の調査報告書である。
- 2 沢田遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理 事 長	磯 田 男 橋 本 昌	昭和63年6月～平成7年3月 平成7年4月～		
副 理 事 長	小 林 秀 文 中 島 弘 光 齋 藤 佳 郎	平成6年4月～平成8年3月 平成7年4月～ 平成8年4月～		
専 務 理 事	中 島 弘 光	平成5年4月～平成7年3月		
常 務 理 事	一 木 邦 彦 徳 澤 秀 夫	平成7年4月～平成8年3月 平成8年4月～		
事 務 局 長	藤 枝 宣 一 齋 藤 紀 彦 小 林 隆 郎	平成4年4月～平成7年3月 平成7年4月～平成8年3月 平成8年4月～		
埋 藏 文 化 財 部 長	安 藏 幸 重 沼 田 文 夫	平成5年4月～平成8年3月 平成8年4月～		
埋 藏 文 化 財 部 長 代 理	河 野 佑 司	平成6年4月～		
企 画 管 理 課	課 長	水 飼 敏 夫 小 幡 弘 明	平成4年4月～平成8年3月 平成8年4月～	
	課 長 代 理	根 本 達 夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月係長)	
	係 長	清 水 薫	平成8年4月～	
	主 任 調 査 員	海 老 澤 稔 小 高 五 十 二	平成6年4月～平成8年3月 平成8年4月～	
	経 理 課	課 長	小 幡 弘 明 河 崎 孝 典	平成5年4月～平成8年3月 平成8年4月～
主 査		鈴 木 三 郎 田 所 多 佳 男	平成7年4月～平成8年3月(平成5年4月～平成7年3月課長代理) 平成8年4月～	
課 長 代 理		大 高 春 夫	平成7年4月～(平成6年4月～平成7年3月係長)	
主 任		小 池 孝 孝	平成7年4月～	
主 事		軍 司 浩 作 柳 澤 松 雄	平成5年4月～平成8年3月 平成8年4月～	
調 査 第 一 課		課長(部長兼務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～平成8年3月
		調査第三班長	根 本 康 弘	平成6年4月～平成7年3月
	主 任 調 査 員	荒 井 保 雄	平成6年10月～平成7年3月調査	
		川 又 清 明	平成6年10月～平成7年3月調査	
整 理 課	課 長 主 任 調 査 員	山 本 静 男 川 又 清 明	平成7年4月～ 平成8年7月～平成8年9月整理・執筆・編集	

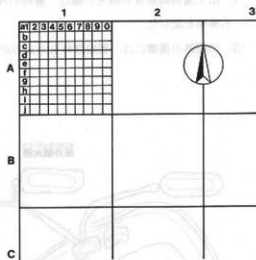
- 3 本書に使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成にあたり、陶器類の時期・産地分類については出光美術館学芸員の荒川正明氏に、石製品の材質については見澤理恵氏にご指導をいただいた。白色物質の自然科学分析は、パリオ・サーヴェイ株式会社  
に依頼した。
- 5 発掘調査及び出土遺物の整理に際して御指導・御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 6 遺跡の概略

ふりがな	こくえいのみたちかひのりんこうえんぞいび とちを まいぞうふんかざいちようさむこうしょ						
書名	国営常陸海浜公園整備に伴う埋蔵文化財調査報告書						
副書名	沢田遺跡						
巻次	Ⅳ						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第115集						
著者名	川又清明						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL. 029-225-6587						
発行年月日	1996(平成8)年9月30日						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 番地	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
沢田遺跡	茨城県ひたちなか市阿字ヶ浦町 字千駄切	08209-070	36° 23' 48"	140° 36' 45"	19941001~ 19950331	11,865㎡	国営常陸海浜公園整備事業に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項	
沢田遺跡	製塩跡	中世	鹹水槽	49基	土製品(円筒埴輪片)、 土師質土器、陶磁器、 石製品、金属製品、 古銭	過去5回の調査では 確認できなかった遺 構として井戸状遺構 及び利用目的ははっきり しない石積み遺 構等が確認されている。	
		近世	粘土貼土坑	72基			
		近代	炉跡	21基			
			土坑	119基			
			井戸状遺構	1基			
			貝集積地	1か所			
			不明遺構	4基 (含石積み遺構2基)			

## 凡 例

- 1 沢田遺跡の地区設定は、前回（第5次）の調査同様日本平面直角座標第Ⅸ系の原点から、X軸（南北）方向に+44,480.00m、Y軸（東西）方向に+69,800.00m移動した交点を基準点(A1a)とした。

発掘調査エリア内にこの基準点から東西・南北各々40mずつ平行移動して、40m四方の大調査区を設定し、さらに大調査区の中に4m四方の小調査区を設定した。調査区の名称は、アルファベットと算用数字を組み合わせた記号で表現した。大調査区は、基準点から南へ40mごとにA～J、東へ40mごとに1～6とし、「A1区」、「B2区」のように呼称した。小調査区は、各大調査区の北西角を基点とし、南へ4mごとにa～j、東へ4mごとに1～0とし、大調査区名の後につけて「A1c区」、「B2f区」のように呼称した。



第1図 調査区呼称方法概念図

なお、これらの調査区を区画する杭の呼称については、それぞれの区の北西角の杭に表示して調査を進めた。

- 2 遺構・遺物・土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 鹹水槽－粘土貼土坑－SN 土坑・炉跡－SK 井戸状遺構－SE 貝集積地－SM  
不明遺構－SX

※遺構番号は、前回（第5次）の調査で使用した遺構番号を継続した。

（SN-221～，SK-176～，SX-5～）

遺物 土器・陶磁器－P 土製品－DP 石器・石製品－Q 金属製品・古銭－M

土層 土層の観察記述については、前回（第5次）の報告書と同じく土層断面中に含有物のみを表記することとし、次のような記号を使用した。

砂－s 煤を含む黒土－e 粘土－n 貝殻片－h 礫・小石－g 灰－a

焼砂・焼土－b 炭化材・炭化物－c ローム－l 攪乱－K

- 3 遺構・遺物の実測中の表示は、つぎのとおりである。

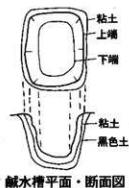
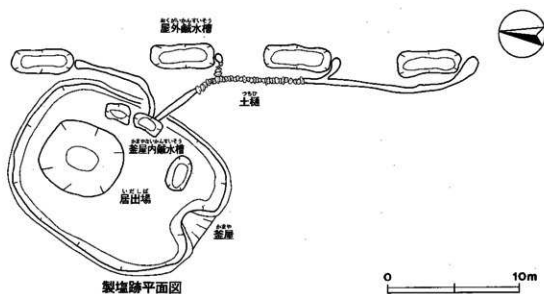


- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

- 5 遺構・遺物の実測図作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺構実測図は、原則として縮尺60分の1で掲載した。

- (2) 遺物実測図は、原則として縮尺3分の1で掲載した。種類や大きさ等により異なる場合は、個々にS=1/〇と表示した。
- (3) 土器の計測値のAは口径、Bは器高、Cは底径、Dは高台径、Eは高台高を示し、単位は、cmである。また、( ) 現存値、[ ] 推定値を示した。
- (4) 出土遺物観察表の備考の欄は、遺物の残存率、実測番号(P・Q・M)、出土位置及びその他必要と思われる事項を記した。
- (5) 当遺跡の遺構には、製塩跡特有のものがあるので、下記の用語を使用して表記した。



# 目 次

序	
例言	
凡例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 沢田遺跡	10
第1節 遺跡の概要	10
第2節 基本層序	10
第3節 遺構と遺物	10
1 製塩跡の遺構と遺物	10
2 その他の遺構と遺物	12
(1) 鹹水槽	12
(2) 粘土貼土坑	22
(3) 炉跡	31
(4) 土坑	33
(5) 井戸状遺構	46
(6) 貝集積地	47
(7) 不明遺構	47
(8) 墓域	54
(9) 遺構外出土遺物	57
第4節 まとめ	76
附章 沢田遺跡から出土した白色物質の分析	79



## 插图 目 次

第1图 調査区呼称方法概念图	第31图 土坑出土遺物実測図	42
第2图 沢田遺跡周辺遺跡分布図	第32图 井戸状遺構実測図	46
第3图 沢田遺跡調査区	第33图 井戸状遺構出土遺物実測図	46
第4图 基本土層図	第34图 貝集積地実測図	47
第5图 第10号製塩跡屋外鹹水槽配置・実測図	第35图 第1号不明遺構(第1号石積み遺構) 実測図	48
第6图 鹹水槽実測図(1)	第36图 第2号不明遺構(第2号石積み遺構) 実測図	49
第7图 鹹水槽実測図(2)	第37图 第3号不明遺構(粘土床状遺構) 実測図	50
第8图 鹹水槽実測図(3)	第38图 第4号不明遺構(版築状遺構) 実測図	51・52
第9图 鹹水槽実測図(4)	第39图 第1・2号不明遺構(第1・2号石積み 遺構)出土遺物実測・拓影図	53
第10图 鹹水槽実測図(5)	第40图 人骨出土位置図	55
第11图 鹹水槽実測図(6)	第41图 墓域出土遺物拓影図	56
第12图 鹹水槽出土遺物実測図	第42图 遺構外出土遺物実測図(1)	58
第13图 粘土貼土坑実測図(1)	第43图 遺構外出土遺物実測図(2)	59
第14图 粘土貼土坑実測図(2)	第44图 遺構外出土遺物実測図(3)	60
第15图 粘土貼土坑実測図(3)	第45图 遺構外出土遺物実測図(4)	61
第16图 粘土貼土坑実測図(4)	第46图 遺構外出土遺物実測図(5)	62
第17图 粘土貼土坑実測図(5)	第47图 遺構外出土遺物実測図(6)	63
第18图 粘土貼土坑出土遺物実測図	第48图 遺構外出土遺物実測図(7)	64
第19图 炉跡実測図(1)	第49图 遺構外出土遺物実測図(8)	65
第20图 炉跡実測図(2)	第50图 遺構外出土遺物実測図(9)	66
第21图 炉跡出土遺物拓影図	第51图 遺構外出土遺物実測図(10)	67
第22图 土坑実測図(1)	第52图 遺構外出土遺物実測図(11)	68
第23图 土坑実測図(2)	第53图 遺構外出土遺物実測図(12)	69
第24图 土坑実測図(3)	第54图 遺構外出土遺物拓影図	75
第25图 土坑実測図(4)		
第26图 土坑実測図(5)		
第27图 土坑実測図(6)		
第28图 土坑実測図(7)		
第29图 土坑実測図(8)		
第30图 土坑実測図(9)		

## 表 目 次

表1 沢田遺跡周辺遺跡一覧表	6・7	表6 土坑一覧表	43~45
表2 第10号製塩跡屋外鹹水槽一覧表	12	表7 貝及び魚骨量	47
表3 鹹水槽一覧表	20・21	表8 井戸状遺構・貝集積地・不明遺構一覧表	53
表4 粘土貼土坑一覧表	22~24	表9 主軸が東を向いている鹹水槽	76
表5 炉跡一覧表	33	表10 主軸が西を向いている鹹水槽	76

## 付 図 目 次

付図1 沢田遺跡遺構配置図

## 写 真 目 次

PL1 調査前風景, 第10号製塩跡屋外鹹水槽	PL5 井戸状遺構確認状況, 井戸状遺構, 貝集積地確認状況, 第1号不明遺構(第1号石積み遺構)確認状況, 第1号不明遺構(第1号石積み遺構), 第2号不明遺構(第2号石積み遺構), 第4号不明遺構(版築状遺構), 第4号不明遺構(版築状遺構)土層断面
PL2 H4・5区完掘全景, 第17号トレンチ試掘(北から), 第10号トレンチ試掘(西から), 第105号鹹水槽, 第118号鹹水槽	PL6 鹹水槽・粘土貼土坑・第2号不明遺構(第2号石積み遺構)・遺構外出土遺物
PL3 第116号鹹水槽土層断面, 第106号鹹水槽断割状況, 第130号粘土貼土坑, 第131号粘土貼土坑断割状況, 第133号粘土貼土坑遺物出土状況, 第122・123号粘土貼土坑白色塊出土状況, 第157号粘土貼土坑遺物出土状況, 第182号土坑土層断面	PL7 土坑・遺構外出土遺物
PL4 第155号土坑, 第209・210号土坑, 第71号炉跡, H5f区遺物出土状況, 第1号トレンチ内遺物出土状況, 人骨出土状況(伸展葬), 人骨出土状況(屈葬), 獸骨(馬)出土状況	PL8 鹹水槽・炉跡・第1号不明遺構(第1号石積み遺構)・遺構外出土遺物
	PL9 鹹水槽・土坑・貝集積地・墓域・遺構外出土遺物



圖 2-17 圖 2-18

圖 2-19 圖 2-20



作業風景

# 第1章 調査経緯

## 第1節 調査に至る経過

昭和21年以降、米空軍により使用されてきた「水戸対地射撃場」は、昭和48年(1973年)に日本政府に返還された。返還後の跡地利用について、茨城県は昭和56年(1981年)に大規模流通港湾と国営公園建設を主な用途とする跡地利用計画を決定した。その計画に基づき、国営常陸海浜公園の整備事業が進められてきた。

平成5年3月、事業主体である建設省関東地方建設局から茨城県教育委員会に、整備事業区域内における埋蔵文化財の所在の有無及び取り扱いについて照会があり、茨城県教育委員会が工事区域内の現地踏査を行い、埋蔵文化財の存在を確認した。平成6年1月、建設省関東地方建設局は、茨城県教育委員会と工事区域内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、沢田遺跡の一部と考えられる11,865㎡について、発掘調査による記録保存の措置を講ずることとなった。そして、その調査機関として茨城県教育財団が紹介された。

財団法人茨城県教育財団は、平成6年4月1日付で建設省関東地方建設局と埋蔵文化財発掘調査の業務委託契約を締結し、平成6年10月1日から平成7年3月31日まで沢田遺跡の第六次発掘調査を実施することとなった。

## 第2節 調査経過

沢田遺跡の第六次発掘調査は、平成6年10月1日から平成7年3月31日までの6か月にわたって実施された。以下、調査の経過について、月ごとにその概要を記述する。

- 10月 3日に現地踏査を行い、遺跡の環境を確認し、現場倉庫等の設置場所を決め、13日に現場事務所を開設した。そして、発掘調査を開始するための事務処理や調査器材の搬入準備を行った。また、国営常陸海浜公園工事事務所の担当者立ち会いのもと調査エリアの確認を行った。危険物調査は、事前に済んでいたため、17日から現場作業を開始した。調査区11,865㎡のうち北側の約3,000㎡の調査エリアをⅠ区、残りの長方形を呈する8,000㎡の調査エリアのⅡ区とし、まずⅠ区に試掘のためのトレンチを4本設定して試掘を行い、Ⅱ区にも15本のトレンチを設け、Ⅰ区同様の調査を進めた。
- 11月 前月に引き続きトレンチ試掘を行い、それに基づいて7日から重機による表砂除去及び遺構確認作業を開始した。また、F4・E4区の比較的表砂の薄いところを人力で除去し、遺構確認作業を行い、粘土貼り遺構等を確認した。15～17日に方眼杭打ちを行い、17日から遺構調査を開始した。
- 12月 二台の重機でG4・H4・H5・I5区とA4・B4区を中心に表砂除去及び遺構確認作業と並行して遺構調査を進めた。H4区2基の石積み状の遺構が見つかり、調査を行った。一方Ⅰ区南半分と東半分とⅡ区のD3・4区、E3・4区、G4区は、遺構が確認される前兆である黒色土があまり認められないので、重機による試掘を行った。3～4m掘り下げたが、遺構は確認できなかった。その後、重機を比較的黒色土が見られるB5・G5・H5・I5区等に重点的に投入し、掘り下げていった。
- 1月 11～13日にかけて、調査に入って第1回目の危険物調査をB4・B5・G4・G5・H4・H5区で行った。19日には、A3・4区でも行った。それにより危険物発見を発見した。30日に前回(第五

次)の調査区に接するJ6区から大型の鹹水槽が2基並んで確認され、調査に入った。今回の調査で初めての塩の製作跡の屋外鹹水槽のならびとして捉えられるものである。

- 2 月 8・16の両日現場作業を中止して第2回目の危険物調査を行った。再び石で組まれた遺構(後日井戸状遺構と判明)が見つかり、調査に入った。I区のエリア北境から比較的大きな鹹水槽(SN322～SN325)が見つかり、壁崩れに注意しながら調査を行った。24日からI5区から埋め戻し作業に入った。
- 3 月 井戸状遺構の調査を進めるとともに、湧きでた水の水質検査を保健所に依頼した。後日飲料に適する旨の通知を受けた。8日に井戸状遺構調査終了後、周辺の埋め戻しを行い、8日にはI・II区すべての埋め戻し作業が終了した。撤収準備を行い、13～14日に現場の倉庫・休憩所を解体し、現場の撤収を終了した。調査中に出土した人骨をひたちなか市東警察署の許可後火葬し、15日に浄妙寺に埋葬した。17日に報告会を行い、23日までに事務所の撤収を完了した。さらに、25日に自衛隊、委託者と危険物処理の打ち合わせを行い、すべての調査を終了した。

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

沢田遺跡は、茨城県ひたちなか市阿字ヶ浦町大字千駄切に所在している。ひたちなか市は、平成6年11月1日に、旧勝田市と旧那珂湊市が合併して誕生した新しい市である。市全体を東西に分けて見てみると、東部は黒潮と親潮の交錯する太平洋に面し、特に那珂湊地区の那珂川河口左岸地域は、14世紀以降港として発展し、現在は多くの水産業関連施設を有している。西部（勝田地区）は、JR常磐線と国道六号線が並行して市を縦断して走っている。勝田駅周辺と国道六号線に沿った地域は、機械・電子機器等を製造する工場が多く立地している。また、市域を南北に分割して見てみると、主に北部は畑作地帯、南部は水田地帯となっている。そして、北は那珂郡東海村、西は那珂郡那珂町、南は那珂川を隔てて水戸市、東茨城郡大洗町と境を接している。

地形的には、沢田遺跡は阿字ヶ浦海水浴場から北の久慈川河口まで広がる太平洋岸の砂丘地帯「東海・阿字ヶ浦砂丘」の中に位置している。この海岸砂丘は、海岸の狭い低地に留まらず、久慈川と那珂川の間に広がる「那珂台地」の東端に這い上がり、数kmほどの内陸部にまで及んでいる。これは、この海岸に吹く北ないし北々東の卓越風によって砂が内陸へ運ばれたためである。この砂は、風による分級作用によってふるい分けられた粒揃いの中粒砂で形成されている。この砂からなる小砂丘群が、北東から南西方向に稜線をもち、雁行状に配列されている。遺跡の標高は9～12mで、径10m前後の非常に小さな砂丘が点在し、比高差2～3mの起伏を作り出している。この砂丘の地層は、最上部に厚さ10m近い砂丘砂の堆積が見られ、その下に厚さ3～4mの関東ローム層があり、その中間に鹿沼軽石層を挟んでいる。

植生については、遺跡のある汀線近くの微小砂丘地帯では、微小砂丘の頂上部を中心にハマヒルガオ、ハマエンドウなどの海浜植物が自生しており、その部分を掘ると、下に黒色土混じりの砂層が確認できる。これは、海浜植物の高植堆積によるものと思われる。汀線から300m以上内陸に入ると、小砂丘群となり、その部分は標高差に関係なくマツ類の群生や乾燥性の丈の低い草木類が見られ、内陸部に行くほど松の樹高が高くなる傾向がある。この一帯は、冬場強い風が吹くために砂の移動が非常に大きいので、海岸線の植物は防砂の役目も果たしている。また、長砂地区から阿字ヶ浦地区にかけては、乾いた風を利用して乾燥イモの生産が盛んである。

#### 参考文献

- ・ 茨城県史編さん総合部会 『茨城県史 市町村編1』 1972年3月
- ・ 茨城県 『土地分類基本調査 那珂湊』 1991年3月
- ・ 茨城県教育財団 「一般県道水戸那珂湊線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 沢田遺跡」  
『茨城県教育財団文化財調査報告第95集』 1996年3月

### 第2節 歴史的環境

沢田遺跡の存在するひたちなか市は、自然に恵まれ、東は太平洋に面し、南は那珂川に接しているので、原始・古代から中世・近世にかけての遺跡が多数確認されている。『茨城県遺跡地図』に報告されている遺跡を

中心に沢田遺跡周辺の主な遺跡を時代別に概述する。

旧石器時代の遺跡は、本郷川左岸の部田野台地上に西原遺跡(58)があり、削器やナイフ型石器等が出土している。また、後期旧石器文化の代表的な遺跡として、細石刃核や細石刃が出土した後野遺跡(66)があげられる。

縄文時代になると遺跡の数も増加する。創早期・早期の遺跡として部田野遺跡Ⅰ・Ⅱ(8)、向野A遺跡(24)、原の寺遺跡(86)、後野遺跡等が知られている。早期後半頃から前期初頭にかけての大海進と後期の小海進は、小支谷まで海岸線が迫ったので、遺跡の立地や貝塚形成に影響をあたえた。前期から後期にかけての遺跡として小谷金遺跡(4)、上ノ内貝塚(5)、笠谷遺跡(13)、君ヶ台遺跡(15)、深谷津遺跡(22)、館A遺跡(29)、原山遺跡(32)、船出遺跡(38)、宮前貝塚(39)、前原A遺跡(68)等がある。晩期の遺跡として、足崎遺跡(88)等があげられる。

弥生時代の遺跡は、那珂川と中丸川の沖地に面した台地の縁辺部や那珂川河口の周辺に分布している。まず、中期中葉の格式土器を出土する遺跡として、標式遺跡の部田野遺跡Ⅰ・Ⅱをはじめ、大和田遺跡(42)、小谷金遺跡等があげられるが、いずれもそれほど広くない範囲に少量の土器片が散布している。中期後半の足洗式土器を出土している遺跡として、指洗遺跡(37)、差洗遺跡(7)等があげられる。平成5年(1994)に調査された差洗遺跡では、足洗式土器やその時期の墓墳が多数確認されている。後期になると遺跡数が増加するとともに、遺跡の規模そのものが大きくなる。東中根遺跡群の一つである大和田遺跡は、東中根の小台地に形成された中期から後期初頭の遺跡で、那珂川流域における後期初頭に位置付けられる東中根式土器の標式遺跡として、また多量の炭化米が出土した遺跡として有名である。東中根清水遺跡(14)、東中根堂山遺跡(23)、高野寺畑遺跡(3)等でも東中根式土器が出土している。高野寺畑遺跡出土のものが一番新しい。後期後半の遺跡として、鷹ノ巣遺跡(6)、原山遺跡、高野寺畑遺跡、山崎遺跡(61)、部田野山崎遺跡Ⅱ(62)、前原A遺跡、釜神上遺跡(64)等があげられ、十王台式土器が出土している。当遺跡からも十王台式土器と思われる土器片が1片出土している。

古墳時代になると、台地上に大小さまざまな集落が営まれ、多くの古墳がつくられるようになる。部田野山崎Ⅱ遺跡、山崎遺跡、鷹ノ巣遺跡、尼ヶ称遺跡(59)、馬渡中宿西遺跡(76)、東中根清水遺跡、大和田遺跡等で集落群が確認されている。また、当沢田遺跡の存する阿字ヶ浦地区から磯崎地区に至る太平洋に沿った台地上には、川子塚西古墳群(49)、川子塚前方後円墳(50)、磯崎東古墳群(52)、三ヶ塚第一古墳群(55)、三ヶ塚第二古墳群(56)等が造られ、那珂川支流の本郷川右岸の東中根台地上には、虎塚古墳群(18)等が造られている。古墳群の盟主的な虎塚古墳は、7世紀前半に造られた彩色壁画で有名な前方後円墳である。さらに、国指定の馬渡埴輪製作遺跡(20)も近くに存在する。沢田遺跡から埴輪片も出土している。これは、鹹水槽等を造るとき、黒色土を使うために台地上から運び込まれた土に含まれていたものと思われる。

奈良時代になると、那珂湊地方の地名が史料にあらわれてくる。平城京から出土した天平18年(746)頃の木簡に「常陸国那珂郡酒烈場所生若海藻」とあり、「酒烈埜」からワカメが都へ貢納されたことが記されている。この「酒烈埜」という地名が、磯崎酒烈埜神社周辺であることが想定される。平安時代の「文徳実録」によれば、酒烈磯崎神社が天安元年(857)に薬師菩薩明神の号を送られている。さらに延喜の制では、明神大社となっている。そして、この地方は「和名抄」によると、那珂郡幡田郷に属すと記されている。

奈良・平安時代の集落は、那珂川やその支流の台地上や新川を望む台地上に形成され、君ヶ台遺跡、長砂遺跡(31)、原山遺跡、長砂高遺跡(41)、指洗遺跡、後谷津遺跡(69)等がある。また、瓦の生産遺構である原の寺瓦窯跡(47)や部田野横穴(12)、十五郎横穴(17)等の横穴墓が確認されている。

中世になると、幡田郷が戸田野郷と名称が変わり、吉田郡に属した。鎌倉時代は、公領として大掾職の馬場

氏が代々支配していたが、鎌倉時代末期から南北朝時代には、戸田野郷は鹿島神宮の神領だったと思われる<sup>(12)</sup>。応永3年(1426)には、水戸に本拠をおき吉田郡一帯を支配していた大塚氏(馬場氏)が江戸氏に館を占拠され、江戸氏の支配下に入った<sup>(14)</sup>。ところで、沢田遺跡から西へ2.8Kmのところの一辺が15m、高さが1.5mの大沼<sup>おほのぬま</sup>跡<sup>あと</sup>(93)があり、そこから天文10年(1542)という年号の入った経筒が出土している。沢田遺跡との関連が考えられる。このころの豪族の館として、真崎城跡<sup>(21)</sup>、多良崎城跡<sup>(28)</sup>、小山城跡<sup>(43)</sup>等がある。

近世に入ると、江戸氏は天正28年(1590)に常陸太田に本拠をおく佐竹氏に水戸を追われた<sup>(15)</sup>。佐竹氏は本拠を水戸に移し、常陸国全体の支配にのりだしたが、その支配は長くは続かなかった。関ヶ原の戦い後の慶長7年(1602)に秋田へ移封された。領主の幾度かの変遷をへて慶長14年(1609)に家康の11男頼房が封じられ、水戸藩が成立した<sup>(16)</sup>。そして、明治4年(1870)の廃藩置縣まで当地域は水戸藩領に属した。この間の那珂湊は幕藩体制確立とともに東回り航路の寄港地として、また那珂川を下ってくる物資の江戸への中継地として大いに栄えた。水戸藩政時代には、沢田遺跡周辺に関する記述が見られるようになる。その例として、元和年間(1615～24)に強風が吹き、「大塚・青塚・二赤」などの集落が埋まり、「前浜・馬渡・長砂」などの内陸部の集落へ移住したと言われている。いわゆる「千々乱風」<sup>(17)</sup>の話である。また、天保13年(1842)に描かれた「前浜村田島反別園・前浜村田方園」があり、その園には沢田海岸に塩蔵9軒、沢田川に沿って水車1軒と水田の地割りが記されている。移住後も製塩や耕作等が行われていたことが伺い知れる。

明治に入っても製塩は細々と継続されており、古老の話では、昭和13年に沢田遺跡周辺が大日本帝国陸軍に接収されるまで沢田川流域には数軒の家があり、水田耕作を行うかたわら塩づくりをしていたようである<sup>(18)</sup>。

※ 文中の〈 〉内の番号は、表1、第1図中の該当番号と同じである。

## 註

- (1) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1990年3月
- (2) 勝田市教育委員会 『後野遺跡』 1976年2月
- (3) 勝田市教育委員会 君ヶ台遺跡調査団編 『君ヶ台遺跡調査報告書』 1980年3月
- (4) 勝田市教育委員会 『指次遺跡群発掘調査報告書』 1990年3月
- (5) 茨城県教育財団 『差込遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告書第103集』 1995年9月
- (6) 勝田市史編さん委員会 『勝田市史 別編Ⅲ 東中根遺跡』 1982年3月
- (7) 勝田市教育委員会 『高野寺畑遺跡発掘調査報告書』 1979年3月
- (8) 那珂湊市藤ノ鼻遺跡発掘調査会 『那珂湊市藤ノ鼻遺跡』 1994年3月
- (9) 那珂湊市部田野山崎遺跡発掘調査会 『部田野山崎遺跡』 1990年3月
- (10) 茨城県教育財団 『山崎遺跡』 『茨城県教育財団文化財調査報告書第105集』 1995年9月
- (11) 那珂湊市教育委員会 『那珂湊市磯崎東古墳群』 1990年3月
- (12) 中山信名・栗田寛 『巻第三那珂郡幡田郷の条』 『新編常陸国誌』 宮崎報恩会版 1979年12月
- (13) 茨城県史編さん中世史部 『鹿嶋神宮領田数注文』 『茨城県史料中世編Ⅰ』 1970年3月
- (14・15) 中山信名・栗田寛 『巻第一 建置沿革の条』 『新編常陸国誌』 宮崎報恩会版 1979年12月
- (16) 茨城県史編さん委員会 『茨城県史近世編』 1985年3月
- (17) 佐藤次男 『伝説千々乱風』 『茨城県史研究32』 茨城県史編さん委員会 1975年8月
- (18) 小池信親 『前浜村史』 『那珂湊市史料第一集』 那珂湊市史編さん委員会 1975年3月
- (19) 鯉沼和彦 『文正草子と常陸国沿岸の塩づくり』 『中世の風景を読むー2』 新人物往来社 1994年12月



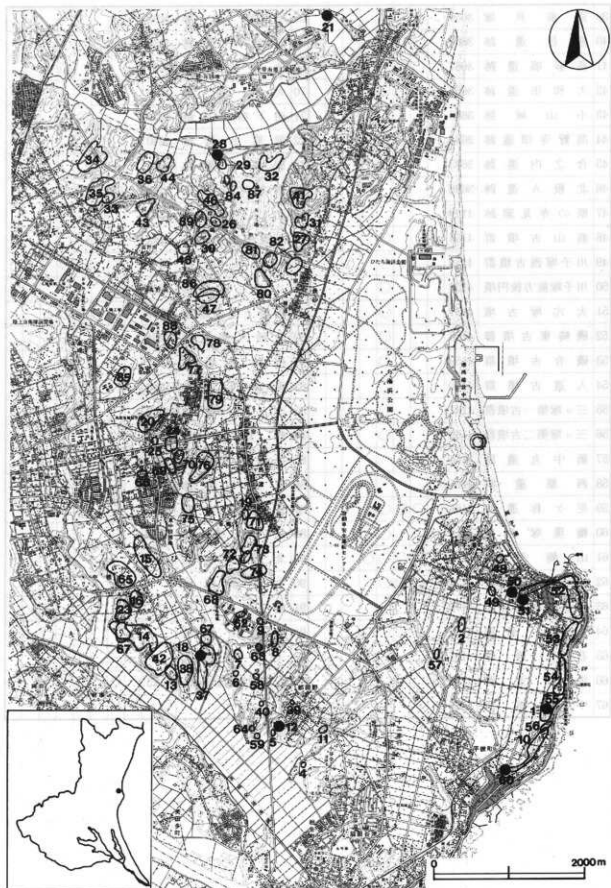
参考文献

- ・茨城県 『茨城県史料 考古資料編 先土器・縄文時代』 1979年3月
- ・茨城県 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 1991年3月
- ・茨城県 『茨城県史料 考古資料編 古墳時代』 1974年2月
- ・茨城県 『茨城県史料 考古資料編 奈良・平安時代』 1995年3月
- ・茨城県教育財団 「常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書1 沢田遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告書52集』 1989年3月
- ・茨城県教育財団 「常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書2 沢田遺跡」(上・下) 『茨城県教育財団文化財調査報告書77集』 1992年3月
- ・茨城県教育財団 「一般県道水戸那珂湊線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 沢田遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告書96集』 1995年3月
- ・勝田市史編さん委員会 『勝田市史 別編Ⅱ 考古資料編』 1979年12月
- ・那珂湊市教育委員会 『那珂湊市遺跡分布調査報告書』 1988年10月

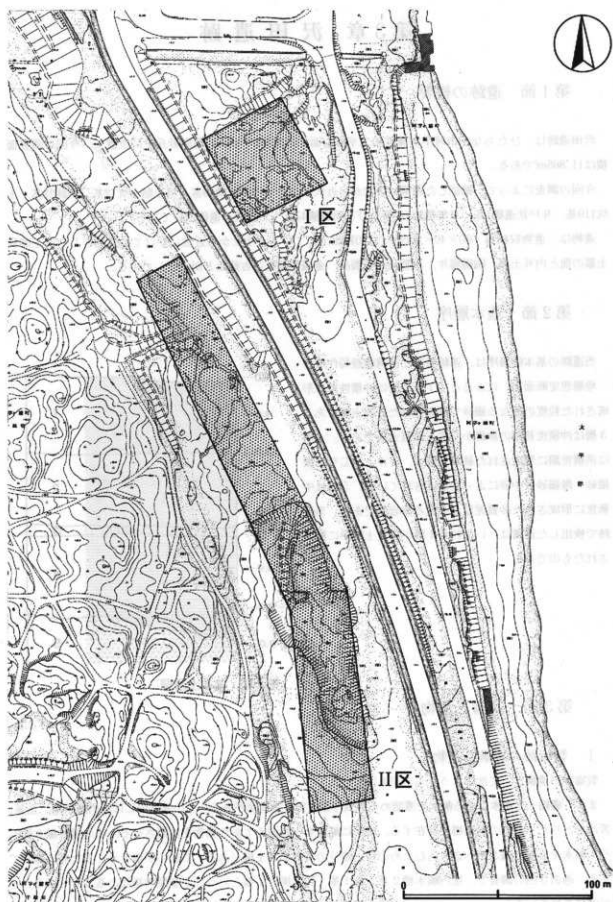
表1 沢田遺跡周辺遺跡一覧表

図中番号	遺跡名	県遺跡番号	遺跡の時代						図中番号	遺跡名	県遺跡番号	遺跡の時代						
			旧	縄	弥	古	奈平	中世				近世	近代以降	旧	縄	弥	古	奈平
1	磯崎遺跡	437	○	○	○				20	馬渡埴輪製作遺跡	507	○	○	○				
2	泉上遺跡	438	○	○					21	真崎城跡	534					○		
3	清水町遺跡	439			○	○			22	深谷津遺跡	2691	○						
4	小谷金遺跡	451	○	○	○				23	東中根堂山遺跡	2693			○				
5	上ノ内貝塚	452	○						24	向野A遺跡	2703	○	○					
6	蘆ノ巣遺跡	453			○	○	○		25	向野B遺跡	2704	○	○					
7	差洪遺跡	454	○	○		○	○		26	奥山館跡	3172						○	
8	部田野路遺跡I・II	455	○	○					27	佐和中宿遺跡	3173			○	○			
9	山崎遺跡	456	○						28	多良崎城跡	3181						○	
10	磯崎古墳群	464				○			29	館A遺跡	3182	○	○	○	○			
11	部田野古墳群	470				○			30	足崎天神山遺跡	3183						○	
12	部田野横穴	471				○	○		31	長砂遺跡	3184	○				○		
13	笠谷遺跡	484	○	○					32	原山遺跡	3185	○	○	○	○			
14	東中根清水遺跡	485			○	○	○		33	清水館跡	3187						○	
15	君ヶ台遺跡	486	○	○	○	○	○		34	東原遺跡	3188	○		○	○			
16	野沢前遺跡	487			○				35	高野富士山遺跡	3189	○		○	○			
17	十五郎穴横穴群	497				○	○		36	神田遺跡	3190	○		○	○			
18	虎塚古墳群	498				○			37	指洪遺跡	3201	○	○	○	○			
19	馬渡古墳群	503				○			38	館出遺跡	3202	○	○	○	○			

39	宮前貝塚	3659	○							67	下原遺跡	4191	○						
40	宮後遺跡	3660	○	○	○					68	前原A遺跡	4235	○	○					
41	長砂埴遺跡	3667	○	○	○					69	後谷津遺跡	4237				○			
42	大和田遺跡	3668	○	○	○	○				70	大山館跡	4238						○	
43	小山城跡	3683					○			71	西下宿南遺跡	4239			○	○			
44	高野寺畑遺跡	3684	○	○	○	○				72	前原B遺跡	4240		○	○	○			
45	合之内遺跡	3685				○	○			73	前原C遺跡	4241			○	○			
46	北根A遺跡	3686					○			74	西並木下遺跡	4242	○		○	○			
47	原の寺瓦窯跡	4129					○			75	北之内遺跡	4243		○					
48	前山古墳群	4154				○				76	馬渡中宿西遺跡	4244		○	○	○			
49	川子塚西古墳群	4155				○				77	向野C遺跡	4245			○	○			
50	川子塚前方後円墳	4156				○				78	コボシ道遺跡	4246	○						
51	大穴塚古墳	4157				○				79	馬渡上宿西遺跡	4247			○	○			
52	磯崎東古墳群	4158				○				80	長砂久保遺跡	4264				○			
53	磯合古墳群	4159				○				81	打越B遺跡	4265				○			
54	入道古墳群	4160				○				82	南宿後遺跡	4266			○	○			
55	三ッ塚第一古墳群	4161				○				83	市ノ山遺跡	4267				○			
56	三ッ塚第二古墳群	4162				○				84	館B遺跡	4268	○						
57	新中丸遺跡	4164	○							85	足崎西原遺跡	4269	○	○					
58	西原遺跡	4165	○							86	原の寺遺跡	4270	○		○				
59	尼ヶ称遺跡	4166	○	○	○					87	猪之前遺跡	4273	○						
60	権現塚古墳	4171				○				88	足崎遺跡	4274	○						
61	山崎遺跡	4173	○	○	○	○				89	北根B遺跡	4276				○			
62	部田野山崎遺跡II	4174	○	○	○					90	古屋敷館跡							○	
63	部田野竊遺跡III	4176	○	○						91	館山館跡							○	
64	釜神上遺跡	4177			○	○				92	道理山館跡							○	
65	石光遺跡	4181	○		○	○				93	大沼経塚群							○	
66	後野遺跡	4182	○	○						◎	沢田遺跡(当遺跡)	4175	○	○	○	○	○	○	○
67	中根城跡	4186					○												



第2図 沢田遺跡周辺遺跡分布図



第3図 沢田遺跡調査区



## 第3章 沢田遺跡

### 第1節 遺跡の概要

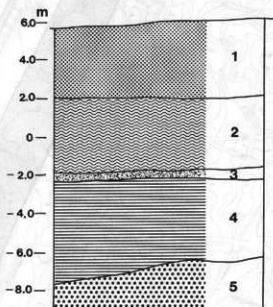
沢田遺跡は、ひたちなか市阿字ヶ浦町の太平洋に面する標高9～12mの海岸砂丘上に位置し、今回の調査面積は11,865㎡である。

今回の調査によって、確認した遺構は中世から近代にかけての鹹水槽49基、粘土貼土坑72基、炉跡21基、土坑119基、井戸状遺構1基、貝集積地1か所及び不明遺構4基(うち石積み遺構2基)である。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に10箱出土している。中世から近世にかけての遺物として、土師質土器の皿と内耳土鍋、陶磁器片、土製品、石製品、金属製品及び古銭などが出土している。

### 第2節 基本層序

当遺跡の基本的層序は、運輸省第二港湾建設局作成の「地層想定断面図」によると、1、2層は沖積世期に形成された粒度の異なる細砂で構成された砂質土層である。3層は沖積世初期の砂礫から成る礫質土層である。4層は洪積世期に形成された砂質土層で、シルト混じりの微細砂・微細砂・中砂によって構成されている。5層は中新世に形成された砂質泥岩から成る軟岩層である。当遺跡で検出した遺構は、いずれも1層の砂質土層中に構築されたものである。



第4図 基本土層図

### 第3節 遺構と遺物

#### 1 製塩跡の遺構と遺物

製塩跡の遺構として次のようなものがあげられる。

まず、濃縮した海水である鹹水を煮詰める煎熬作業を行う釜屋跡がある。その釜屋内には屋内鹹水槽、土釜、苦汁をとりだすための居出場が存在する。ほかに鹹水を一時溜めておき異物を沈殿させるための屋外鹹水槽、その鹹水を釜屋内鹹水槽へ送り込むための粘土貼りの溝である土樋がある。これらが塩をつくるための施設である。過去5回の調査で、屋内鹹水槽2基、竈1基、居出場が1基というのが釜屋内施設の基本形であることが確認されている。

今回の調査では、このようにはっきりとしたセットになっているものは確認されなかったが、屋外鹹水槽の

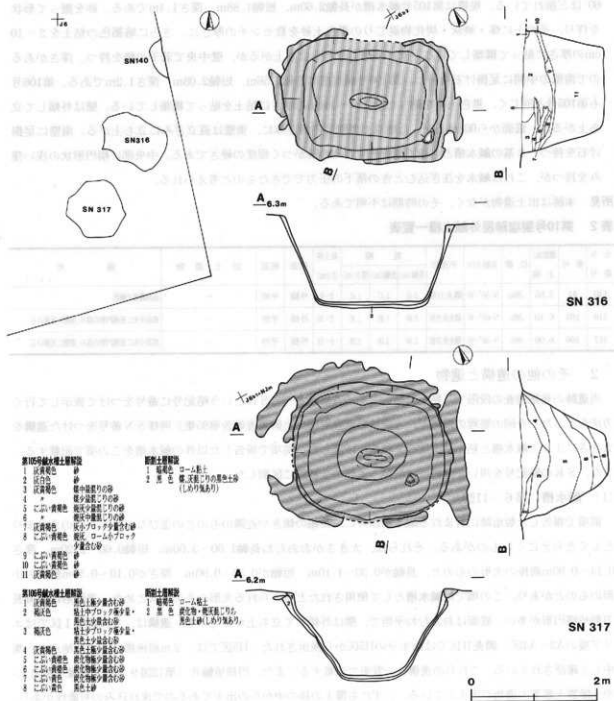
セットが確認された。これを製塩跡の一部ととらえ、遺構番号を前回（第5次）の調査及び整理で使用した番号の継続とした。

### 第10号製塩跡（第5図）

位置 調査II区の敷南端部J6b区を中心に検出された。

遺構構成 3基の屋外鹹水槽（1基は前回検出の第44号(SN140)）からなる。

差屋 確認面の高さなどから当屋外鹹水槽群の北東方向に位置する前回の調査で検出されたものであると思われる。報告書によると、それは南北約7m、東西約6mの不定形なもので、灰と破砕貝を混ぜた黒色土を砂



第5図 第10号製塩跡屋外鹹水槽配置・実測図

の上に厚さ5～60cm貼りつけて構築されているが、釜屋の規模と形状は明確でない。

竈 前回の調査で検出された第3号竈(SK99)が該当し、楕円形である。

居出場 前回の調査で検出された第49号鹹水槽(SN147)である。

釜屋内鹹水槽 前回の調査で検出された第47号鹹水槽(SN143)と第48号鹹水槽(SN144)である。

屋外鹹水槽 前回の調査で釜屋に伴う第40号鹹水槽(SN136)と第45号鹹水槽(SN141)の2基の屋外鹹水槽が検出されていたが、今回の調査で確認した屋外鹹水槽は、第105号鹹水槽(SN316)と第106号鹹水槽(SN317)である。釜屋の南西方向に位置し、前回の調査でJ6a区から検出された第44号鹹水槽(SN140)と並んだ状態にある。標高は断面レベルで5.94～6.10m、平面形はどちらも隅丸長方形を呈し、長軸方向は西に60°ほど振れている。規模は第105号鹹水槽が長軸2.60m、短軸1.88m、深さ1.4mである。砂を掘って形状を作り、その上に煤・焼灰・炭化物じりの黒色土砂を数センチの厚さに、さらに暗褐色の粘土を2～10cmの厚さに貼って構築している。壁は外傾しながら立ち上がるが、壁中央で若干の稜を持つ。深さがあるので南壁の中間に足掛け石を持つ。第106号鹹水槽は長軸2.56m、短軸2.08m、深さ1.2mである。第106号も第105号と同じく、黒色土砂を貼った上に6～14cmの厚さに粘土を貼って構築している。壁は外傾して立ち上がるが、底面から90cm上がった地点で西壁は内湾ぎみに、東壁は直立ぎみに立ち上がる。南壁に足掛け石を持つ。2基の鹹水槽とも指で壁を押すとその跡がつく程度の硬さである。中央部に楕円形状の浅い窪みを持つが、これは鹹水を注ぎ込むときの落下の圧力でできたものと考えられる。

所見 本跡は出土遺物がなく、その時期は不明である。

表2 第10号製塩跡屋外鹹水槽一覧表

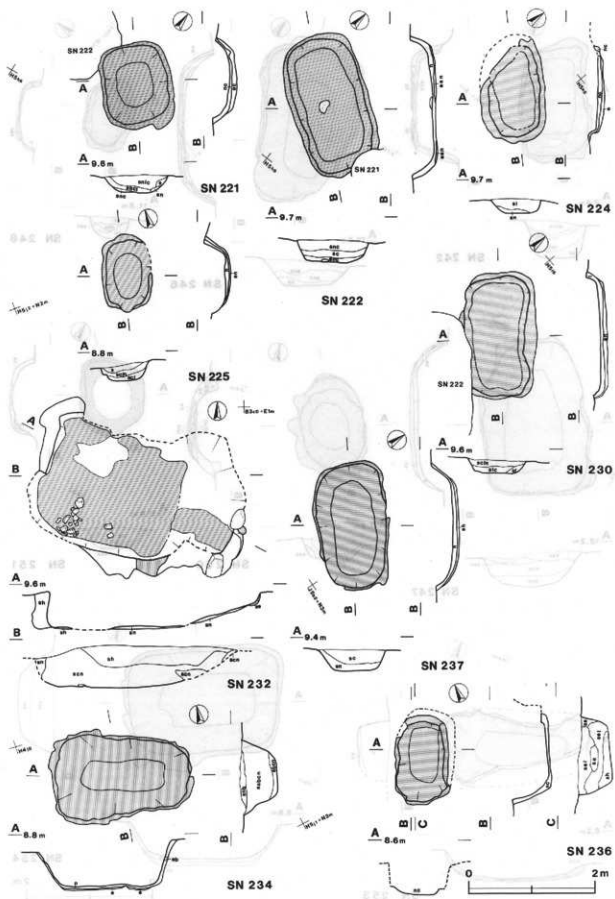
S N 番号	番号	標高(m) 上端	位置	長軸方向	平面形	規模			粘土厚 z(cm)	壁面	底面	出土遺物	備考
						長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
140	44	5.95	J6a	N-60°-W	隅丸長方形	2.6	1.7	1.4	2-9	外傾	平坦	-	前回調査で検出
316	105	6.10	J6a	N-60°-W	隅丸長方形	2.6	1.8	1.4	2-10	外傾	平坦	-	底面中央に長楕円形の窪み、南壁に足掛け石
317	106	6.00	J6a	N-60°-W	隅丸長方形	2.5	2.1	1.2	6-14	外傾	平坦	-	底面中央に長楕円形の窪み、南壁に足掛け石

## 2 その他の遺構と遺物

当遺跡の発掘調査の段階で、粘土を貼ってある遺構をすべてSNという略記号に番号をつけて表示して行く方法をとった。今回の整理の段階で、『茨城県教育財団文化財調査報告第95集』同様SN番号をつけた遺構を大きさによって鹹水槽と粘土貼土坑の2種類に区別した。前項で報告した以外の鹹水槽をこの項で記載する。また、SKの略記号を用いた遺構は、炉跡、土坑の2種類に区別した。

### (1) 鹹水槽(第6～11図)

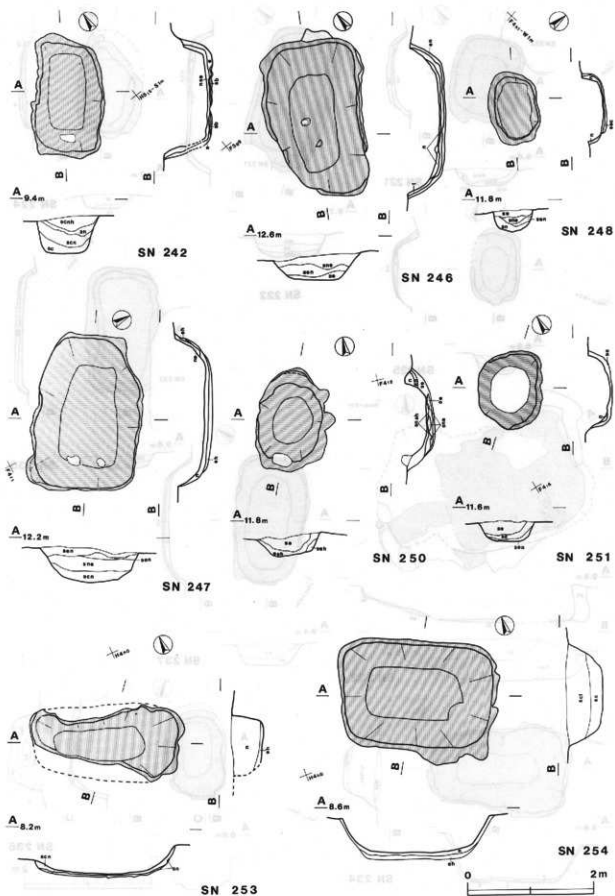
前項で報告した製塩跡に含まれる鹹水槽以外に、長軸の傾きや近隣のものと並びなどから一つのまとまりとしてとらえにくいものがある。それらは、大きさがおおむね長軸1.00～3.00m、短軸0.60～2.20m、深さ0.14～0.90m前後の大型のものと、長軸が0.30～1.10m、短軸が0.30～0.90m、深さが0.10～0.50m前後の小形のものがあり、この項では鹹水槽として使用されたと考えられる大型のものをまとめた。平面形は隅丸長方形や楕円形が多い。底面はおおむね平坦で、壁は外傾して立ち上がっている。遺構は、主に調査Ⅰ区ではエリア境のA3～A4区、調査Ⅱ区では南半分のH5区から検出された。H5区では、2m前後掘り下げた地点から集中して確認されている。これらの遺構は一覧表で記載する。また、円筒埴輪片(第12図9:第135号鹹水槽出土)や土師質土器等の遺物が出土している。いずれも覆土の砂の中からの出土であるので流れ込みの可能性があり、時期決定資料とはなりにくいが、参考資料として掲載する。



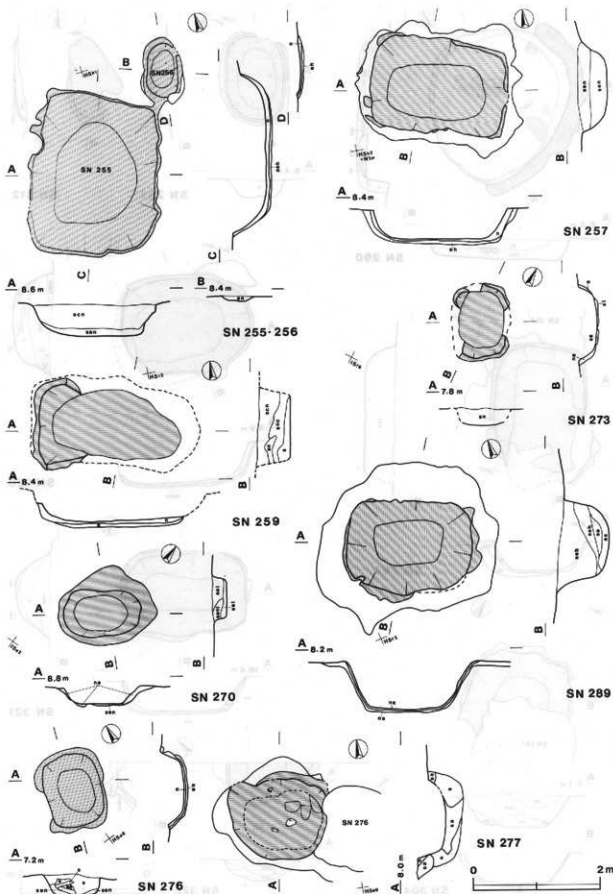
第6図 鹹水槽実測図(1)

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩

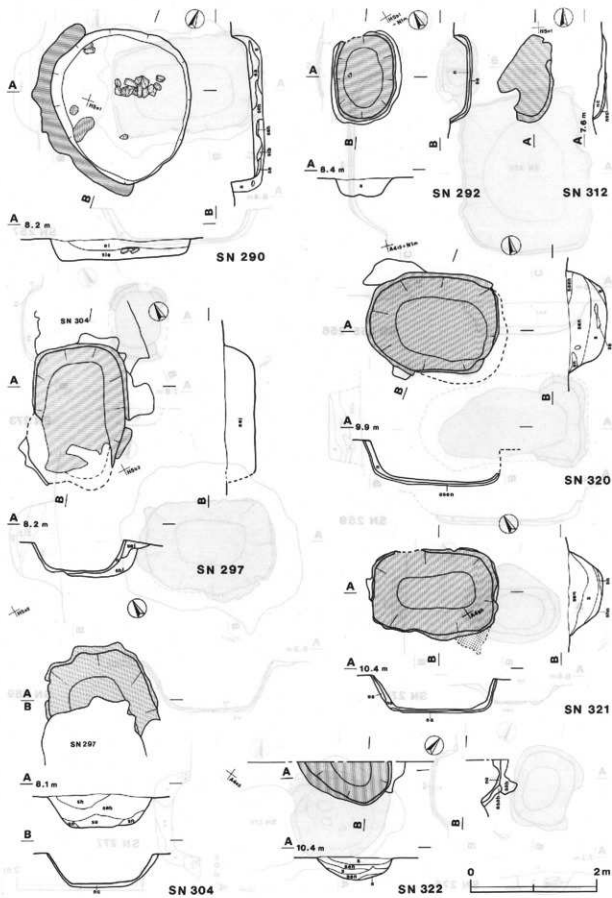




第7図 鹹水槽実測図(2)

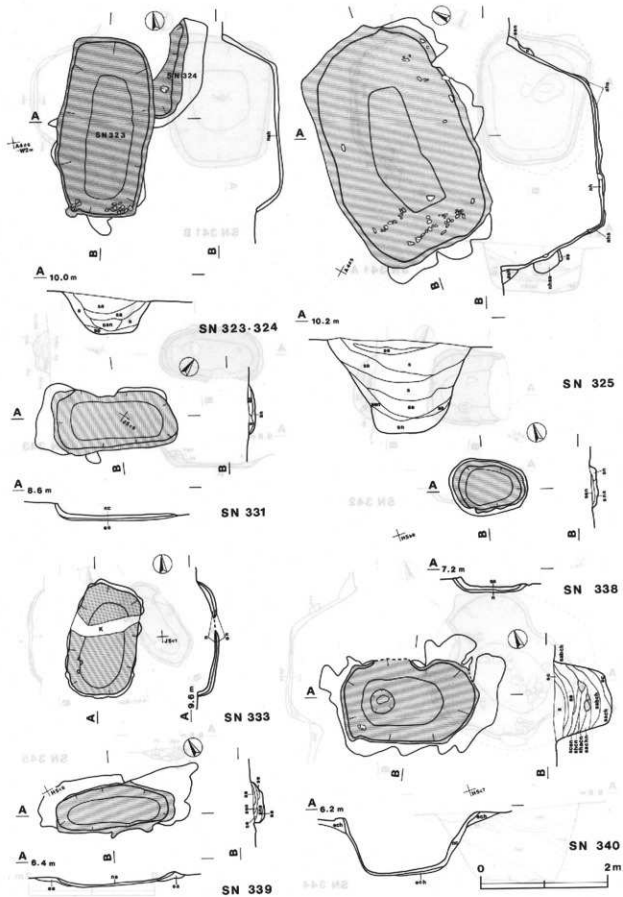


第 8 图 鹹水槽実測图(3)



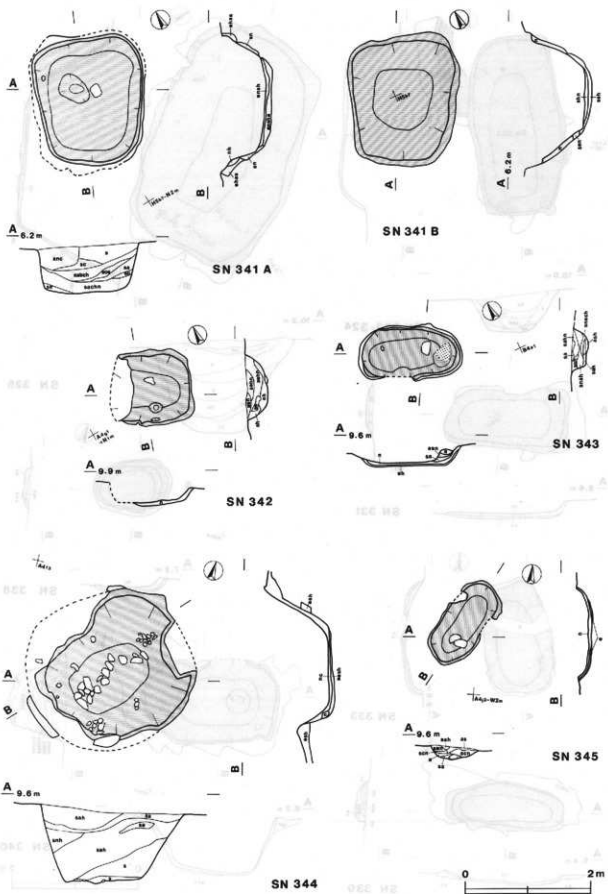
第9図 鹹水槽実測図(4)

10 図院実野大館 図68

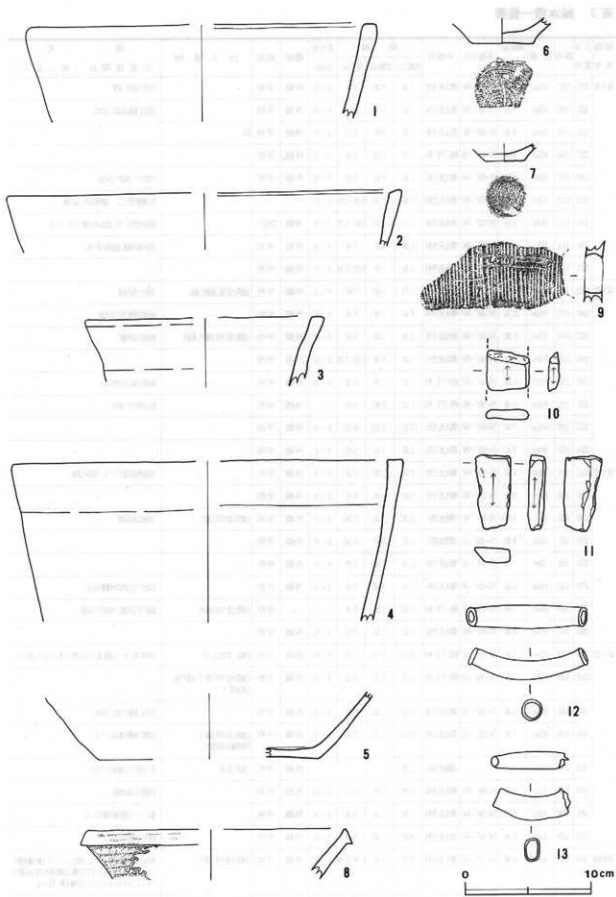


第10图 鹹水槽实测图(5)

中国地质出版社 设计部



第11图 鹹水槽实测图(6)



第12图 鹹水槽出土遺物実測図

表3 鹹水槽一覽表

図版S/N 番号	S/N 番号	位置	面積(m <sup>2</sup> ) (上端)	長軸方向	平面形	規模			粘土厚 z(cm)	側面	底面	出土遺物	備考 ※重複関係(新>旧)		
						規模(m)	規模(m)	厚さ(m)							
第6図	221	107	H6gs	9.40	N-35°-W	隅丸長方形	1.30	0.36	0.30	4~6	外傾	平坦	2000, 2002, 2004		
	222	108	H6gr	9.46	N-55°-W	隅丸長方形	1.30	0.36	0.34	6~10	外傾	平坦		2000と重複(2000>2002)	
	224	109	H6ha	9.40	N-65°-W	隅丸長方形	1.30	0.30	0.14	4~6	外傾	平坦	墓石		
	225	110	H6jp	8.64	N-18°-E	隅丸長方形	1.10	0.70	0.22	2~6	外傾	平坦			
	230	111	H6fc	9.35	N-50°-W	隅丸長方形	1.30	0.33	0.22	4~6	外傾	平坦		2000, 2001, 2002, 2003	
	232	112	H6ka	9.32	N-70°-W	隅丸長方形	[3.00]	[2.10]	0.30~0.64	4~6	-	-		遺物の種類が乏しい。遺物群中に石の存在。	
	234	113	H6jb	8.54	N-72°-W	隅丸長方形	2.10	1.10	0.30~0.75	3~6	外傾	凹凸		遺物の種類が乏しい。遺物群中に石の存在。	
	236	114	H6ji	8.34	N-20°-W	隅丸長方形	[1.30]	0.70	0.24	4~6	外傾	平坦		遺物の種類が乏しい。遺物群中に石の存在。	
	237	115	H6bi	9.14	N-50°-W	隅丸長方形	1.30	1.04	0.25~0.34	4~8	外傾	平坦			
	第7図	243	116	H6jr	9.24	N-30°-W	隅丸長方形	1.30	1.00	0.35	4~8	外傾	平坦	土層上部に土層片、瓦片、石	北東部が傾斜
		246	117	F3gs	12.30	N-22°-W	隅丸長方形	2.40	1.30	0.48	4~6	外傾	平坦		遺物の種類が乏しい。遺物群中に石の存在。
247		118	F3se	11.50	N-61°-W	隅丸長方形	2.30	1.50	0.62	5~8	外傾	平坦	土層上部に土層片、瓦片	遺物の種類が乏しい。	
248		119	F4fa	11.54	N-45°-W	隅丸長方形	1.00	0.38	0.30~0.25	2~6	内傾	平坦			
250		120	F4fb	11.56	N-25°-W	隅丸長方形	1.34	1.00	0.32	2~10	外傾	平坦		遺物の種類が乏しい。遺物群中に石の存在。	
251		121	F4ba	11.36	N-30°-W	隅丸長方形	[1.10]	[0.30]	0.34	-	外傾	平坦		粘土層が厚い。	
253		122	H6ba	7.94	N-64°-W	隅丸長方形	[2.30]	[0.70]	[0.45]	2~8	外傾	平坦			
254		123	H6ga	8.40	N-65°-W	隅丸長方形	2.30	1.70	0.60	4~8	外傾	平坦			
第8図		255	124	H6he	8.40	N-22°-W	隅丸長方形	2.54	1.70	0.50	4~8	外傾	平坦		北東部が傾斜している。2002と重複
		257	125	H6ha	8.30	N-72°-W	隅丸長方形	2.30	1.40	0.45	2~8	外傾	平坦		
	259	126	H6ia	[4.00]	N-68°-W	隅丸長方形	[2.30]	[1.30]	[0.35]	2~8	外傾	平坦	土層上部に土層片	北東部が傾斜	
	270	127	H6ja	8.02	N-49°-E	隅丸長方形	1.34	0.70	[0.35]	2~8	外傾	平坦			
	273	128	H6ea	7.54	N-31°-E	隅丸長方形	[1.00]	[0.30]	0.34	4~6	外傾	平坦			
	276	129	H6de	7.00	N-23°-E	隅丸長方形	1.34	0.32	0.25	1~6	外傾	平坦		2000と重複(2000>2002)重複がある。	
	277	130	H6di	7.76	N-71°-W	隅丸長方形	[1.30]	[1.30]	0.45	-	平坦	-		底面に粘土層片、2002と重複	
	289	131	H6ee	8.00	N-65°-W	隅丸長方形	2.00	1.50	0.70	4~6	外傾	平坦			
第9図	290	132	H6cm	7.94	N-41°-W	隅丸長方形	[2.40]	[2.14]	0.38	2~6	垂直	平坦	有蓋(蓋は2000)	北東部が傾斜、蓋の小段が蓋の厚さの5分の1程度ある。	
	292	133	H6be	8.36	N-32°-E	隅丸長方形	1.30	0.54	0.22	4~10	外傾	平坦	土層上部に土層片、瓦片、石		
	297	134	H6ca	7.86	N-27°-E	隅丸長方形	[2.10]	1.40	0.50	2~6	外傾	平坦		2000と重複(2000>2002)	
	304	135	H6em	7.50	N-21°-E	隅丸長方形	[2.30]	1.70	0.45	4~6	外傾	平坦	土層上部に土層片、瓦片、石	2002と重複(2002>2000)	
	312	136	H6ee	7.40	-	隅丸長方形	[1.30]	-	-	-	外傾	平坦	土層上部に土層片	遺物の種類が乏しい。遺物群中に石の存在。	
	320	137	A4in	9.46	N-60°-W	隅丸長方形	[2.30]	1.40	0.62	2~12	外傾	平坦		遺物の種類が乏しい。	
第10図	321	138	A4fr	10.32	N-68°-W	隅丸長方形	1.30	1.20	0.50	2~6	外傾	平坦		南側の土層が傾斜している。	
	322	139	A4ds	10.36	N-47°-W	隅丸長方形	[0.60]	[1.30]	0.45	2~6	外傾	平坦		南側の土層が傾斜している。	
	323	140	A4de	9.40	N-14°-E	隅丸長方形	2.72	1.34	0.40~0.62	2~10	外傾	平坦	土層上部に土層片	南側の土層が傾斜している。南側のコーナーに土層が傾斜している。遺物の種類が乏しい。遺物群中に石の存在。2002の遺物の種類が乏しい。遺物群中に石の存在。2002の遺物の種類が乏しい。遺物群中に石の存在。	
	324	141	A4cr	10.30	-	隅丸長方形	[1.60]	[0.70]	-	-	外傾	-		2002と重複(2002>2000)	

図版SN 番号	S N	番号	位置	深さ(m) (七端)	長軸方向	平面形状	規 模			粘土厚 δ(cm)	断面	底面	出土遺物	備 考 ※重複関係(新→旧)
							長軸(m)	短軸(m)	厚さ(m)					
325	142	A5m	10.04	N-40°-E	隅丸長方形	3.00	2.22	4.00-1.33	2~10	外傾	平坦	土層上部内裏面	数層の土の間に埋め込まれた状態にあり、	
331	143	A5m	8.40	N-65°-E	隅丸長方形	[1.90]	0.84	0.84	4~8	外傾	平坦		土層の上層に埋め込まれた状態にあり、	
333	144	A4m	8.10	N-18°-E	隅丸長方形	1.72	1.10	0.84	4~8	外傾	平坦		中央部に土層が埋め込まれた状態にあり、	
338	145	B5m	7.00	N-62°-W	隅丸長方形	1.00	0.62	0.14	6~8	外傾	平坦			
339	146	B5m	6.20	N-63°-W	隅丸長方形	1.78	0.66	0.14	4~6	外傾	平坦			
340	147	B5m	6.02	N-71°-W	隅丸長方形	2.04	1.14	0.80-0.86	2~10	外傾	平坦		土層上部に埋め込まれた状態にあり、	
第11図	341A	148	B5m	5.96	N-34°-E	隅丸長方形	1.90	1.46	0.70	2~6	外傾	平坦		土層上部に埋め込まれた状態にあり、
	341B	149	B5m	5.36	N-32°-E	隅丸長方形	1.90	1.30	0.66	4~6	外傾	平坦		土層上部に埋め込まれた状態にあり、
	342	150	A4m	9.00	N-61°-W	隅丸長方形	[3.00]	1.94	0.84	4~8	外傾	平坦	土層	土層の上層に埋め込まれた状態にあり、
	343	151	B3m	9.46	N-65°-W	隅丸長方形	1.48	0.66	0.14	1~4	外傾	平坦		土層上部に埋め込まれた状態にあり、
	344	152	A4m	9.38	N-48°-E	隅丸長方形	[3.00]	[3.00]	1.00	6~10	外傾	平坦		土層上部に埋め込まれた状態にあり、
	345	153	A4m	9.30	N-31°-E	隅丸長方形	1.40	0.66	0.14	2~6	外傾	平坦		土層上部に埋め込まれた状態にあり、

### 鹹水槽出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第12図 1	内耳土鍋 土師質土器	A[27.2] B (7.6)	口縁部片。口縁部は外傾して内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 内:黄灰色、外:黒色 良好	P2 5% SN247 1区覆土 外面横ナデ
	内耳土鍋 土師質土器	A(31.3) B (4.5)	口縁部片。体部は直線的に立ち上がり、口縁部はやや外へ膨らむ。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・長石・石英 内:内・黒色 普通	P3 5% SN259 2区覆土 外面横ナデ
3	内耳土鍋 土師質土器	A(19.0) B (4.9)	体部から口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は外へ膨らむ。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 内:内・ぶい・褐色 普通	P8 5% SN277 覆土
4	内耳土鍋 土師質土器	A(31.0) B (15.0)	体部から口縁部片。体部は直線的に外傾して立ち上がり、口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 体部外面指正痕。	砂粒・石英・長石 内:ぶい・褐色 外:黒色 普通	P10 5% SN304 1区覆土 外面横ナデ
5	内耳土鍋 土師質土器	B (5.0) C(17.6)	底部から体部片。底部は平底。体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。	底部内面及び体部内・外面横ナデ。底部ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 内:ぶい・褐色 普通	P16 PL6 5% SN233 1区覆土
6	皿 土師質土器	B(17.1) C 5.0	底部から体部片。底部は平底で、や突出気味である。体部は外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。回転系切り。	砂粒・長石・雲母 灰褐色 普通	P1 30% SN242 2区覆土
7	皿 土師質土器	B (1.0) C 3.0	底部から体部片。底部は平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。回転系切り。	砂粒・長石・石英 灰黄褐色 普通	P15 20% SN312 底面
8	広口壺 陶 器	A(20.5) B (4.0)	体部から口縁部片。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部の断面は三角形を呈する。	ロクロ成形。外面灰釉。	砂粒・長石 暗灰色 良好	P18 PL6 5% SN342 覆土

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第12図10	砥 石	(3.1)	3.4	0.8	(12.3)	凝灰岩	SN224 1区覆土	Q1 PL8
11	砥 石	6.3	2.8	1.2	32.7	凝灰岩	SN242 2区覆土	Q2, 1周のみ使用 PL8



図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第12図12	管状青銅品	9.6	1.6	1.7	31.9	青銅	SN290覆土中	M1,断面形が円形を呈する。用途不明。PL9
13	管状青銅品	(6.1)	1.8	1.2	(14.3)	青銅	SN290覆土中	M70,断面形が楕円形を呈する。用途不明。

## (2) 粘土貼土坑 (第13~17図)

ここで報告する「粘土貼土坑」は、長軸0.30~1.10m、短軸0.30~0.90m、深さ0.10~0.50mのものである。平面形は楕円形や円形が多く、隅丸長方形のものもある。底面は皿状か平坦で、壁は外傾に立ち上がるものがほとんどで、まれに碗状に内湾して立ち上がる。大型の鹹水槽と同じように黒色土砂を貼った上に褐色粘土を貼って構築している。また、補強材として石を埋め込んで壁を硬く構築しているものもある。これらの遺構は、鹹水をためるのには浅いと思われるが、前項の鹹水槽とほぼ同レベルで確認されているので、同時期のものと思われる。なかには水切りや苦汁を出す(居出場)のために使用されたものと考えられるような底に平たい石を置いてあるものがある。

第122・123号粘土貼土坑(SN243A・B)から白色の塊が検出され、科学分析を依頼した。その結果は付章に記してあるが、白色塊は苦汁ではなく方解石(CaCO<sub>3</sub>)、アラレ石という物質で、石灰岩かハマグリ、アサリなどの二枚貝の殻に含まれる物質であると判明した。この点については、第4章のまとめでふれてみたい。

遺物は、土師質土器(内耳土鍋・皿・糠鉢)、瓦質土器や砥石などが出土している。

表4 粘土貼土坑一覧表

図版SN 番号番号	器種	位置	傾斜(上傾)	長軸方向	平面形	規模		粘土厚 z(cm)	壁面	底面	出土遺物	備考 ※重複関係(新>旧)
						長軸(m)	短軸(m)					
第13図	226	H5j	9.02	N-20'-W	楕円形	0.36	0.42	0.34	3~10	外傾	皿状	土師土器
	227	H5a	9.00	N-61'-E	楕円形	1.00	0.32	0.30	2~30	外傾	皿状	
	228	H5j	8.55	N-15'-E	隅丸長方形	1.02	0.46	0.35	3~6	外傾	平坦	
	229	H5ba	8.60	N-20'-E	円形	0.36	0.54	0.30	3~8	垂直	平坦	
	231	A5aa	9.40	N-20'-W	[楕円形]	0.72	-	0.38	2~8	垂直	平坦	部分破壊
	235	H5j	8.30	N-20'-W	楕円形	0.64	0.38	0.38	2~22	垂直	平坦	埋没方解石塊
	236	H5a	8.50	N-7'-W	楕円形	0.42	0.36	0.06	8~14	外傾	皿状	土師土器
	240	H5a	8.46	N-7'-W	[円形]	0.32	0.32	0.16	2~6	外傾	皿状	土師土器/内湾計
	241	J5aa	8.86	N-62'-E	楕円形	0.30	0.40	0.14	4~6	外傾	皿状	
	243A	J5aa	7.76	N-47'-W	楕円形	0.30	0.42	0.30	-	外傾	皿状	台形深淵(埋没)
	243B	J5aa	7.70	N-47'-W	[円形]	0.60	0.42	0.14	-	外傾	皿状	台形深淵(埋没)時期、S002-030A
	244	H5a	8.60	N-34'-E	円形	0.48	0.44	0.14	4~6	外傾	皿状	
	245	H5a	8.12	N-34'-W	円形	0.46	0.44	0.16	4~6	外傾	皿状	土師土器
	252	H5a	11.20	N-30'-W	隅丸長方形	0.56	0.48	0.30	2~4	外傾	皿状	
第8図	256	H5ba	8.26	N-16'-E	楕円形	0.88	0.30	0.08	1~4	外傾	皿状	SSBと壁
第14図	258	J5aa	7.74	N-65'-W	楕円形	0.78	0.46	0.22	6~8	外傾	皿状	粘土塊の多い
	260	H5ba	8.30	N-1'-E	円形	0.34	0.32	0.12	2~4	外傾	皿状	土師土器
	261	H5ba	8.26	N-15'-E	楕円形	1.00	0.70	0.40	4~8	外傾	皿状	粘土塊の多い
	262	H5ba	8.30	N-20'-E	楕円形	1.02	0.62	0.16	10~20	外傾	皿状	土師土器(埋没)
	263	H5ba	8.40	N-20'-W	長楕円形	0.88	0.40	0.14	6~8	外傾	皿状	埋没土器

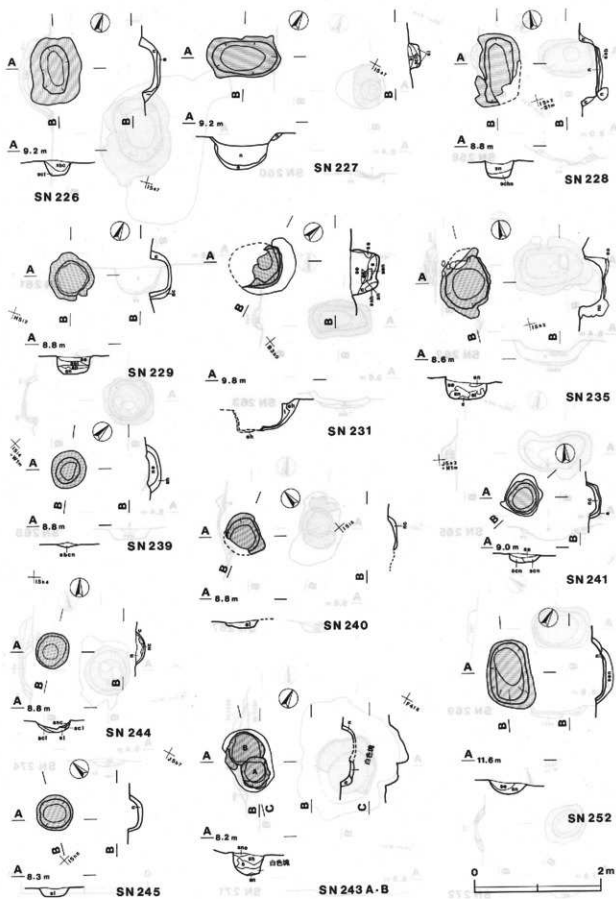
図版SN 番号	N 番号	位置	標高(m) (上端)	長軸方向	平面形	規模			底土厚 土(m)	断面	底面	出土遺物	備考 ※重複関係(新>旧)
						長(m)	短(m)	厚(m)					
265	133	H5f5	8.20	N-3f-W	不定形	[0.90]	[0.40]	[0.10]	6	外傾	皿状	土層土層直	底土の厚さが薄い。
267	134	H5f5	9.38	N-2f-E	楕円形	0.70	[0.30]	0.35	2~8	外傾	皿状		底土の厚さが薄い。
268	135	H5d5	8.18	N-9f-E	円形	0.68	0.64	0.30	1~8	垂直	平坦		底土の厚さ不明
269	136	K5a	8.60	N-3f-E	楕円形	0.82	0.32	0.12	4~8	外傾	皿状		
271	137	E5g	6.30	N-2f-W	楕円形	[1.10]	0.30	0.10	1~2	外傾	皿状		
272	138	E5g	7.56	N-2f-W	楕円形	0.50	0.42	0.14	2~4	外傾	皿状	土層土層直	
274	139	H3aa	9.20	N-6f-E	楕円形	0.62	0.36	0.12	3~6	外傾	皿状		底土直
275	140	F3ag	12.10	N-6f-W	円形	0.58	0.34	0.10	3~6	外傾	皿状		底土直
278	141	H5a5	8.40	N-1f-E	円形	0.48	0.44	0.22	4~8	内傾	平坦		底土直
279	142	H5f5	8.08	N-25f-E	楕円形	0.80	0.70	0.10	4~14	外傾	皿状		底土直
280	143	H5f5	8.16	N-2f-W	楕円形	0.25	0.18	0.04	2~6	外傾	皿状		底土直
281	144	H5f5	8.16	N-2f-E	円形	0.40	0.36	0.20	4~10	外傾	皿状		底土直
282	145	H5f5	8.00	N-3f-W	円形	0.35	0.32	0.40	4~12	内傾	平坦	土層土層直	底土直
284	146	H5ag	8.20	N-15f-E	楕円形	0.80	0.60	0.20~0.22	2~4	外傾	皿状		
285	147	H5ag	8.16	N-3f-E	不定形	[0.80]	[0.40]	0.10	10~20	外傾	皿状		底土直
286	148	H5ag	8.14	-	楕円形	[0.40]	0.30	0.10	1~4	外傾	皿状		底土直
287	149	H5ee	7.96	N-1f-E	楕円形	0.62	0.44	0.08	1~6	外傾	皿状		
288	150	H5f5	8.00	N-14f-W	楕円形	0.78	0.38	0.10	4~12	外傾	皿状		
291A	151	H5ac	8.30	N-17f-W	楕円形	1.10	0.54	0.18	4~8	外傾	平坦		底土直
291B	152	H5ac	8.30	N-17f-W	楕円形	0.30	0.30	0.30	2~10	外傾	平坦		底土直
293	153	H5d5	7.98	N-15f-W	円形	0.44	0.46	0.12~0.22	8~12	外傾	丸底		底土直
294	154	H5d5	8.00	N-50f-E	円形	[0.40]	0.30	0.04	8~18	外傾	皿状		底土直
295	155	H5f5	7.94	N-0f	円形	0.80	0.60	0.20	2~4	外傾	碗状		底土直
296	156	H5f5	7.94	N-15f-W	楕円形	[0.90]	[0.80]	[0.14]	4~6	外傾	皿状		底土直
298	157	H5f5	8.00	N-38f-E	楕円形	[0.40]	[0.30]	0.08	1~5	外傾	皿状	土層土層直	底土直
299	158	H5f5	7.86	N-72f-E	楕円形	[0.70]	[0.60]	0.22	4~8	外傾	皿状		底土直
300	159	H5f5	7.00	N-0f	円形	0.38	0.38	0.08	2~4	外傾	皿状		
301	160	G5j	7.70	N-3f-W	円形	0.32	0.30	0.08	4~10	外傾	皿状		底土直
302	161	H5g5	7.88	N-4f-W	楕円形	[0.30]	0.42	0.14	2~8	外傾	皿状		底土直
303	162	H5ag	7.88	N-2f-W	楕円形	[0.70]	[0.50]	0.18	2~12	外傾	皿状		底土直
305	163	H5f5	7.90	N-4f-W	楕円形	0.56	0.46	0.08	2~6	外傾	皿状		底土直
306	164	G5f5	7.00	N-4f-W	楕円形	0.62	0.44	0.14	4~6	外傾	皿状		底土直
307	165	H5as	7.70	N-32f-E	楕円形	0.64	0.70	0.18	4~8	外傾	皿状	碗状	
308	166	H5ea	7.58	N-25f-W	[円形]	1.00	[0.80]	0.30	3~6	外傾	皿状		底土直
309A	167	H5ba	7.82	N-35f-W	[円形]	0.80	[0.60]	0.24	2~12	外傾	皿状	土層土層直	底土直
309B	168	H5ba	7.82	N-35f-W	[楕円形]	[0.90]	[0.80]	[0.12]	-	外傾	皿状		底土直
310	169	H5aa	7.82	N-12f-E	隅丸長方形	[0.90]	[0.90]	0.36	-	外傾	皿状	底土直	底土直
311A	170	H5ca	7.56	N-30f-W	[隅丸長方形]	[0.80]	0.66	0.16	6~10	外傾	皿状		底土直
311B	171	H5ca	7.56	N-35f-W	楕円形	[0.90]	[0.60]	[0.20]	6~8	外傾	皿状		底土直
313	172	H5f5	7.80	N-25f-W	楕円形	[0.40]	[0.30]	0.10	2~6	外傾	皿状		底土直
314	173	G5f5	7.20	N-4f-W	隅丸長方形	0.54	0.30	0.20	3~6	外傾	皿状		底土直
315	174	H5ba	7.82	N-42f-W	[楕円形]	[0.80]	[0.60]	0.18	1~6	[内傾]	平坦	土層土層直	底土直
318	175	A5j	9.00	N-15f-W	[円形]	0.72	[0.70]	0.28	8~12	外傾	皿状		底土直

図版 番号	S 番号	N 番号	位置	標高(m) (上端)	長軸方向	平面形	規模			底面	出土遺物	備考
							長(m)	幅(m)	高さ(m)			
第18図	176	A3a	9.96	N-47°-W	円形	0.32	0.26	0.02	2~4	外傾	皿状	
	177	J4b	9.46	N-37°-W	円形	0.38	0.32	0.24	2~8	外傾	皿状	
	178	J4c	9.56	N-45°-W	楕円形	0.02	0.04	0.04	5~12	外傾	皿状	
	179	J5c	9.20	N-27°-W	円形	0.42	0.40	0.16	2~10	外傾	皿状	
	180	J5d	8.96	N-27°-W	楕円形	0.32	0.42	0.12	2~6	外傾	皿状	断面は厚く硬石
	181	J5e	8.76	N-27°-W	楕円形	0.46	0.30	0.08	6~8	外傾	皿状	
	182	A3p	9.72	N-45°-W	楕円形	0.42	0.36	0.08	6~8	外傾	皿状	縁が凸出
	183	A4i	9.80	N-47°-W	楕円形	0.40	0.40	0.18	2~8	内傾	平坦	断面は厚く硬石の下に硬石層あり。断面は比較的薄い。平ら
	184	A4h	9.56	N-73°-E	円形	0.46	0.42	0.08	2~4	外傾	皿状	断面は厚く硬石の下に硬石層あり。断面は比較的薄い。平ら

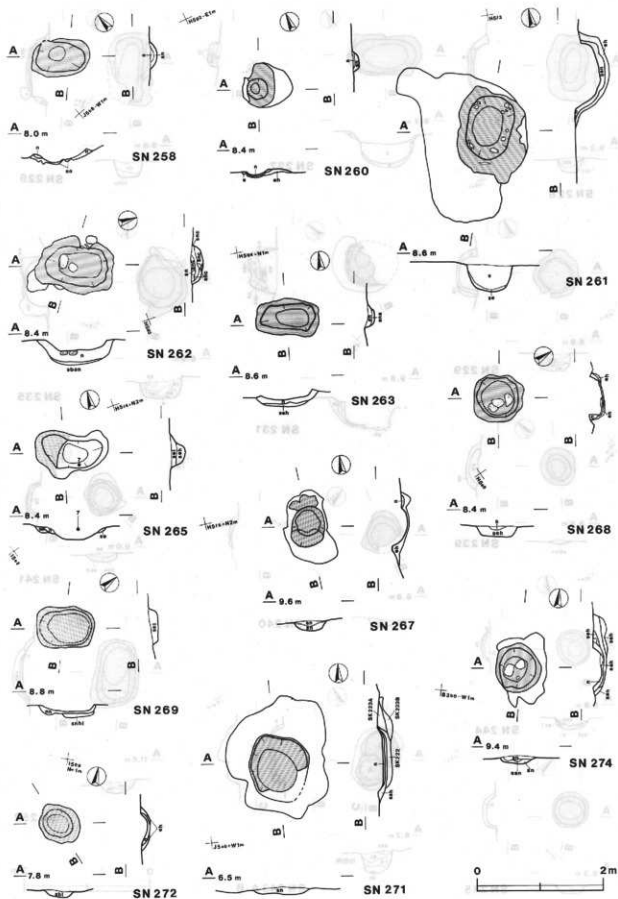
### 粘土貼土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第18図 1	鍔鉢 瓦質土器	A(24.4) B(6.2)	体部から口縁部片。体部及び口縁部は厚みを増しながら、内彎気味に立ち上がる。	体部及び口縁部内・外面横ナデ。口縁部ヘラナデ。底元鋭角成。	砂粒・雲母・長石 黒灰色 良好	P4 SN28 貫土
		A(15.4) B(2.4)	口縁部片。体部は内彎しながら立ち上がり、口縁部は直立気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。 底元鋭角成。	砂粒・長石・石英 灰色 良好	P7 SN72 1区貫土
3	内耳土鍋 土質土器	A(37.2) B(10.8)	体部から口縁部片。体部は外傾して立ち上がり、口縁部は内彎気味に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。外面泡眼圧痕。	砂粒・長石・雲母 内・外面：黒色 普通	P11 SN36 貫土 外面残片層
		A(28.0) B(3.7)	口縁部片。口縁部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 赤褐色 普通	P12 SN33 貫土 外面残片層
5	内耳土鍋 土質土器	B(10.5) C(23.0)	底部から体部片。底部は平底。体部は外傾して直線的に立ち上がる。	体部内・外面横ナデ。底部と体部の境をヘラナデ。	砂粒・長石 黒色 普通	P14 P16 SN39 貫土 体部内面及び底面内面 残片層
		A(24.6) B(3.3)	口縁部片。口縁部は外傾しながら立ち上がり、口唇部は断面三角形を呈する。	口縁部内・外面横ナデ。孔を持つ。	石英・長石・礫 黒色 普通	P17 SN35 2区貫土 内・外面残片層
7	皿 土質土器	A 7.4 B 2.3 C 3.6	底部から口縁部。底部は平底で、やや突出する。体部及び口縁部は内彎しながら立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	砂粒・長石・雲母 明赤褐色 普通	P5 P16 SN35 貫土 底部の内面は黒色を呈する。
		A(10.6) B 3.4 C(4.4)	底部から口縁部片。底部は平底。体部及び口縁部は器内を厚くしながら外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。ヘラナデ。	長石・礫 に濃い褐色 普通	P6 P16 SN35 貫土
		A 10.9 B 3.0 C 4.9	底部から口縁部片。底部は平底で、やや突出する。体部及び口縁部は外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・長石 に濃い黄褐色 普通	P9 P16 SN38 貫土 内・外面一部片層

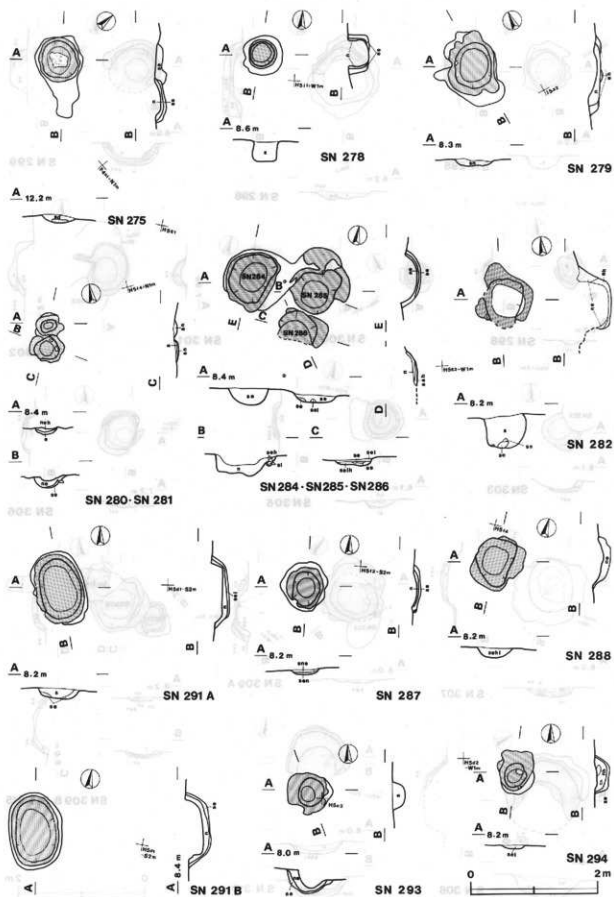
図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第18図10	底石	13.7	4.0	2.9	205.4	凝灰岩	SN329 新製土層の3層中	Q3, 下端部の傾り方が著しい。



第13图 粘土土坑实测图(1)

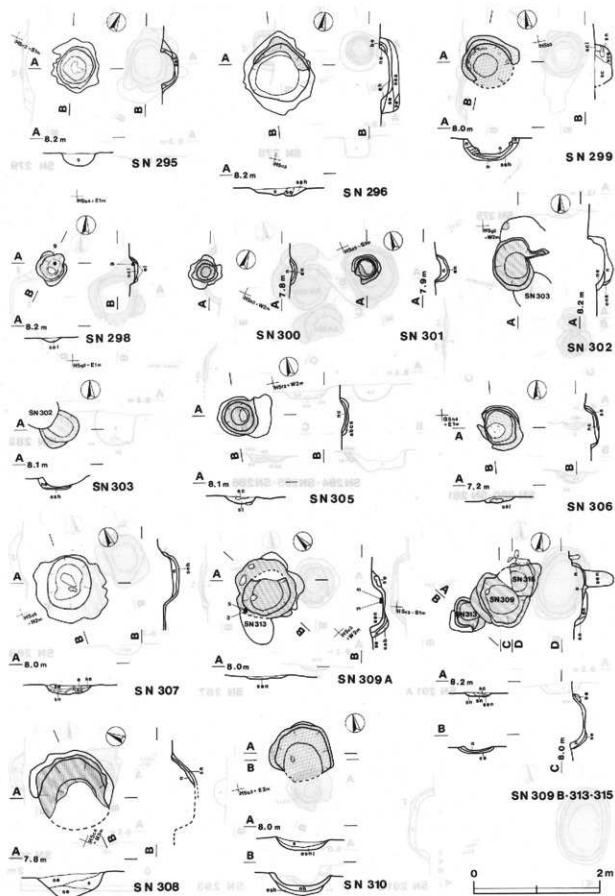


第14图 粘土粘土坑実測图(2)

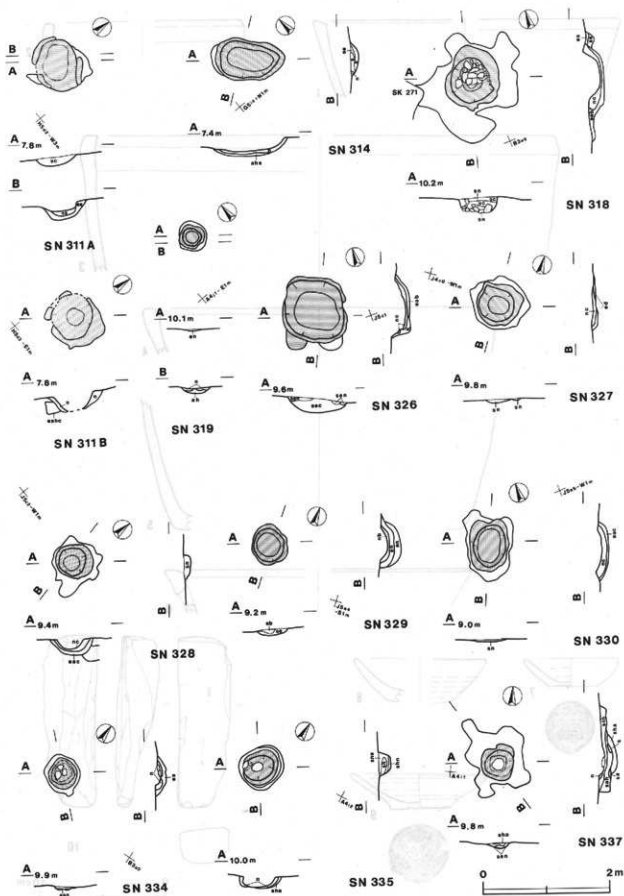


第15图 粘土土坑实测图(3)

(4) 国家地质局地质研究所 编



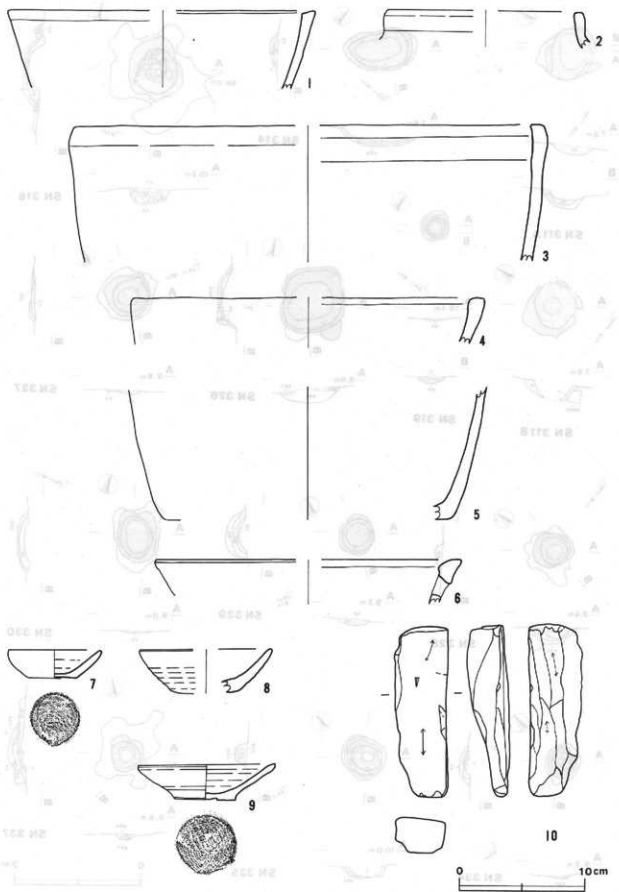
第16图 粘土贴土坑实例图(4)



第17图 粘土贴土坑实测图(5)

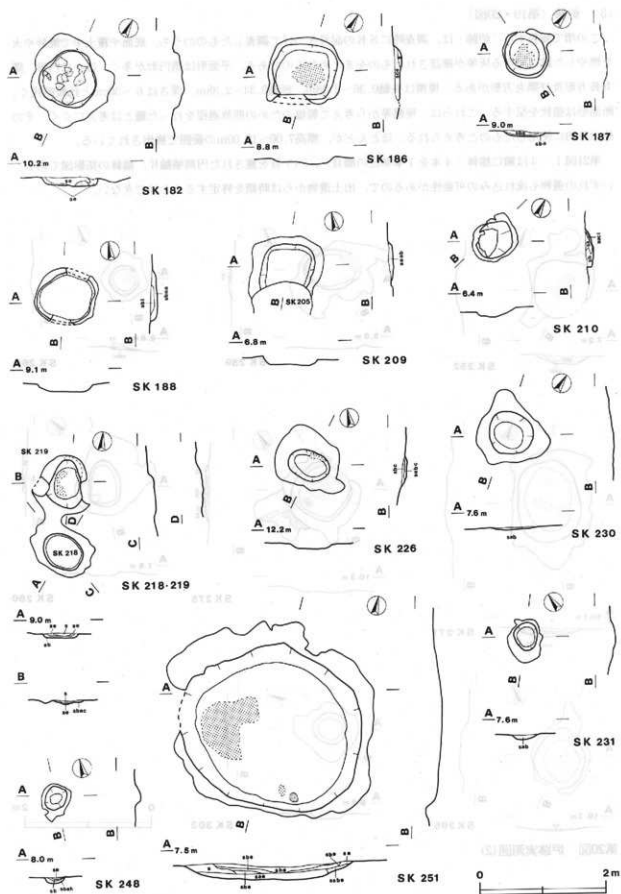
河南灵宝县西坡遗址出土的陶器





第18图 粘土土坑出土物实测图

1:10 比例尺 10cm

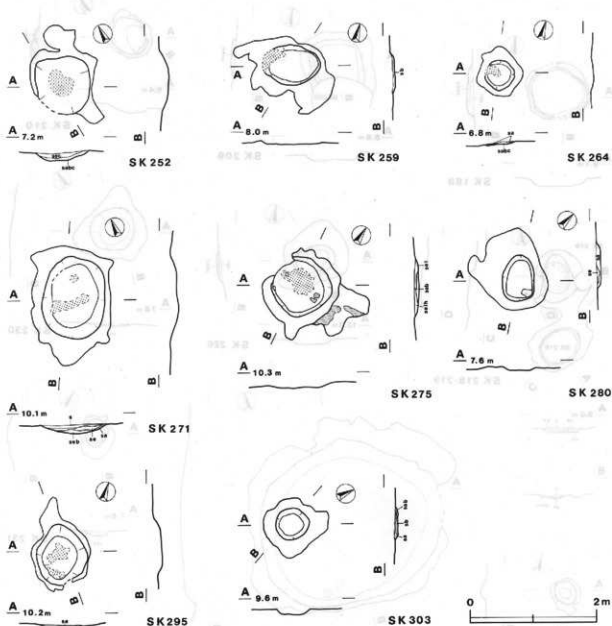


第19图 护跡实测图(1)

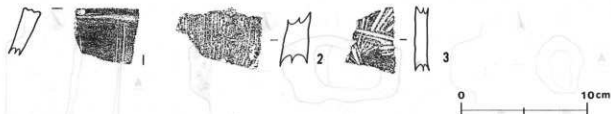
(3) 炉跡 (第19・20図)

この項で報告する「炉跡」は、調査時にSKの記号をつけて調査したもののうち、底面や覆土中で焼砂や火を燃やした跡にできる灰等が確認されたものをまとめたものである。平面形は楕円形が多く、ほかに円形、隅丸長方形及び隅丸方形がある。規模は長軸0.36~2.38m、短軸0.34~2.38m、深さは6~30cmと比較的浅く、断面形は皿状を呈する。これらは、規模等から考えて製塩のための煎煮過程を行った竈とは考えにくく、その他の目的に使用したものと考えられる。ほとんどが、標高7.00~12.00mの範囲で検出されている。

第21図1~3は順に挿鉢(4本を1本単位の欄目)、ハケ目を施された円筒埴輪片、挿鉢の拓影図である。いずれの遺物も流れ込みの可能性があるので、出土遺物からは時期を特定することはできない。



第20図 炉跡実測図(2)



第21図 炉跡出土遺物拓影

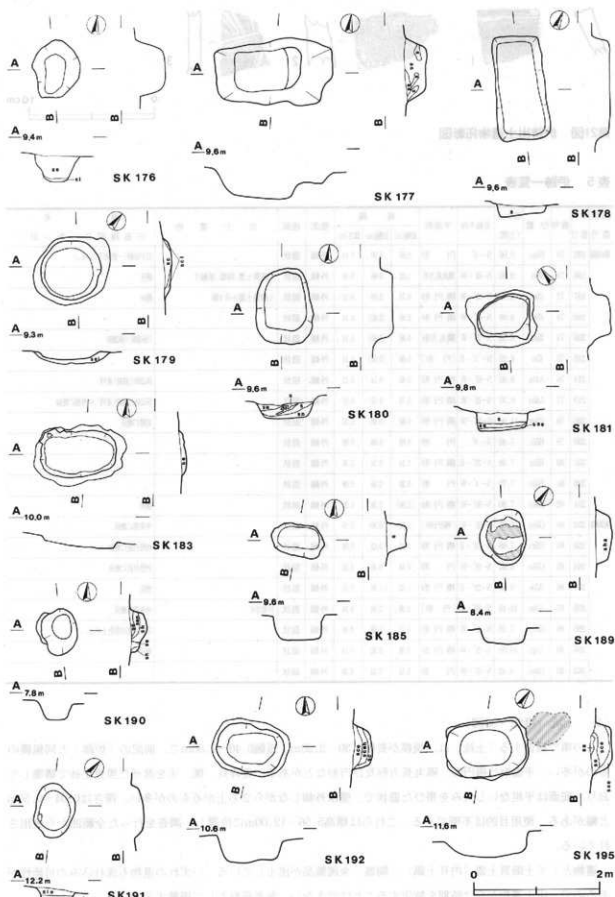
表5 炉跡一覧表

図版 番号	S K 番号	位置 備考	標高(m) (上端)	長軸方向	平面形	規模		断面	底面	出土遺物	備考 ※重複関係(新>旧)	
						長軸(m)	短軸(m)					
第100	182	70 B4a1	9.06	N-0°	円形	0.90	0.90	0.11	外傾	皿状	石が9箇一面散っている。	
	186	71 B5a	8.60	N-61°-W	隅丸長方形	1.02	0.88	0.10	外傾	皿状	土師質土器、陶器、埴輪片 焼灰	
	187	72 J5a1	8.90	N-64°-W	楕円形	0.71	0.65	0.10	外傾	皿状	土師質土器小片1個 焼灰	
	188	73 J5a2	8.88	N-67°-W	楕円形	0.90	[0.80]	0.11	外傾	皿状		
	203	74 B5a	6.56	N-73°-W	隅丸方形	0.86	[0.80]	0.11	外傾	皿状	(SK25>SK28)	
	210	75 B1	6.20	N-5°-E	[円形]	0.68	[0.51]	0.11	外傾	皿状		
	218	76 A4a	8.80	N-62°-W	楕円形	0.68	0.51	0.12	外傾	皿状	SK29と重複(並列)	
	219	77 A4a	8.70	N-12°-W	楕円形	0.76	0.50	0.10	外傾	皿状	SK26と重複(並列)、中央部に焼砂	
	226	78 F3a	11.96	N-35°-W	楕円形	0.68	0.38	0.10	外傾	皿状	北側に焼灰	
	230	79 H5a	7.40	N-0°	円形	0.68	0.68	0.08	外傾	皿状		
	231	80 H5a	7.38	N-33°-E	楕円形	0.41	0.31	0.06	外傾	皿状		
	248	81 H4c	7.70	N-4°-W	円形	0.38	0.35	0.08	外傾	皿状		
	251	82 H5a	7.20	N-40°-W	楕円形	[2.96]	2.38	0.20	外傾	皿状	焼灰	
	第300	252	83 G3a	6.98	N-25°-W	[楕円形]	[1.00]	[0.90]	0.16	外傾	皿状	中央部に焼灰
		259	84 H5a	7.88	N-72°-E	楕円形	0.92	0.82	0.08	外傾	皿状	西壁付近に焼砂
		264	85 G3a	6.64	N-15°-W	円形	0.68	0.61	0.01	外傾	皿状	西壁付近に焼砂
		271	86 A3a	9.90	N-22°-E	楕円形	1.32	1.00	0.10	外傾	皿状	焼灰
		275	87 A3a	10.10	N-35°-E	[円形]	0.98	0.98	0.04	外傾	皿状	貝殻2片 中央部に焼灰
		280	88 B5a	7.48	N-45°-W	楕円形	0.71	0.61	0.06	外傾	皿状	北側の黒色土がない。
		285	89 A4a	10.00	N-21°-W	楕円形	0.98	0.82	0.11	外傾	皿状	焼灰
303		90 B3a	9.42	N-27°-W	円形	0.52	0.32	0.08	外傾	皿状		

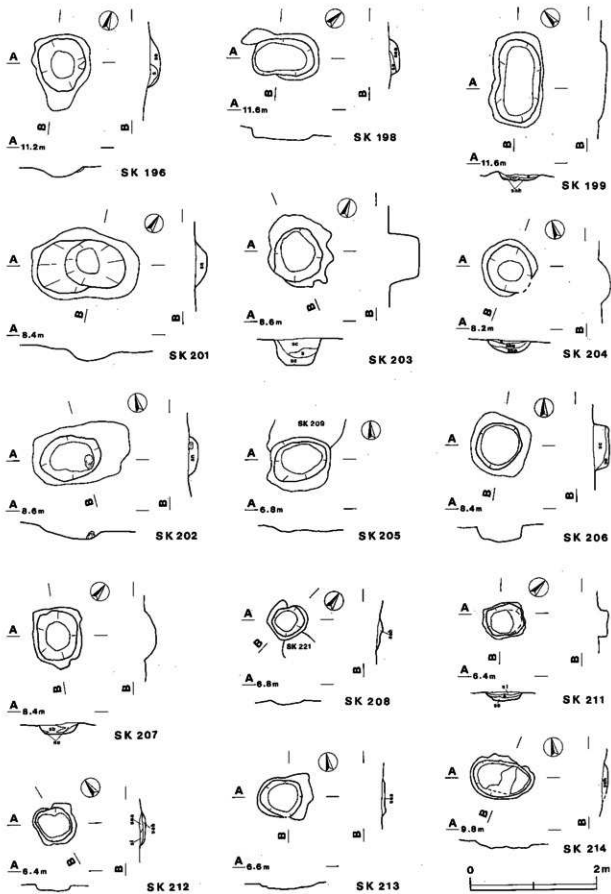
#### (4) 土坑 (第22~30図)

この項で報告する「土坑」は、規模が長軸0.30~2.20m、短軸0.40~1.80mで、前記の「炉跡」と同規模のものが多い。平面形は楕円形、隅丸長方形及び円形などがある。破砕貝、煤、灰を混ぜた黒色土砂で構築しており、底面は平坦ないし丸みを帯びた皿状で、壁は外傾しながら立ち上がるものが多い。深さは0.04~0.50mと幅がある。使用目的は不明である。これらは標高5.56~12.00mに位置し、調査を行った全範囲から検出されている。

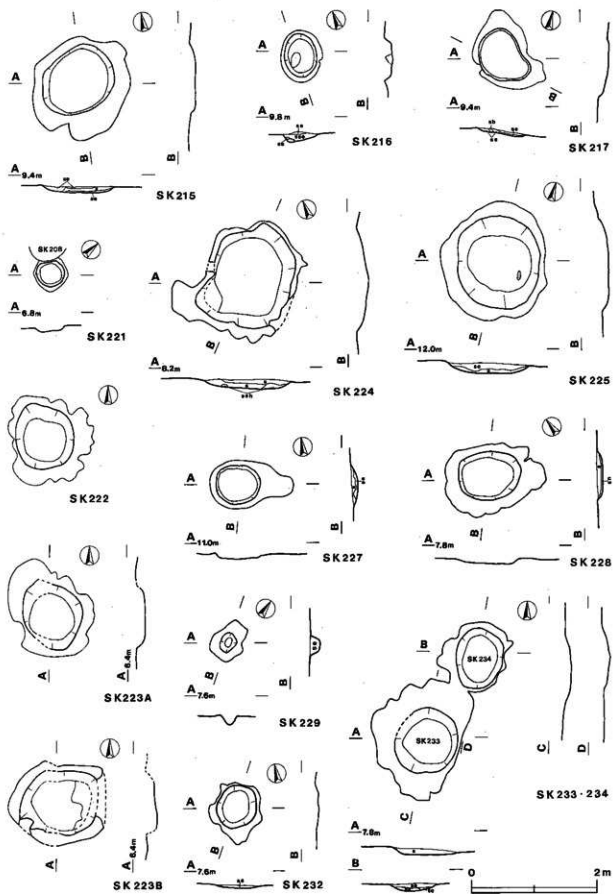
遺物として土師質土器(内耳土鍋)、陶器、金属製品が出土している。いずれの遺物も流れ込みの可能性があるので、出土遺物からは時期を特定することはできない。参考資料として掲載する。



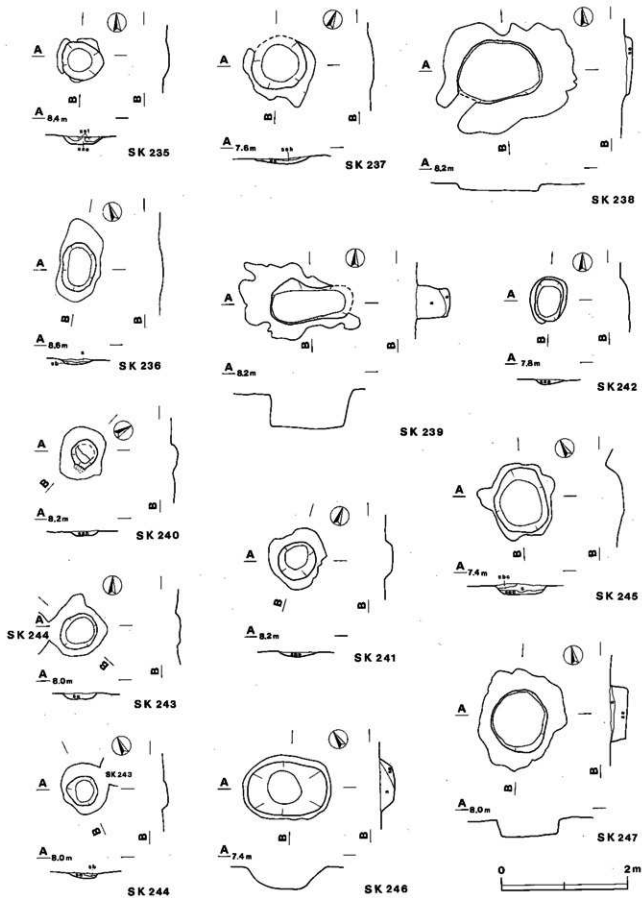
第22图 土坑实测图(1)



第23图 土坑实测图(2)

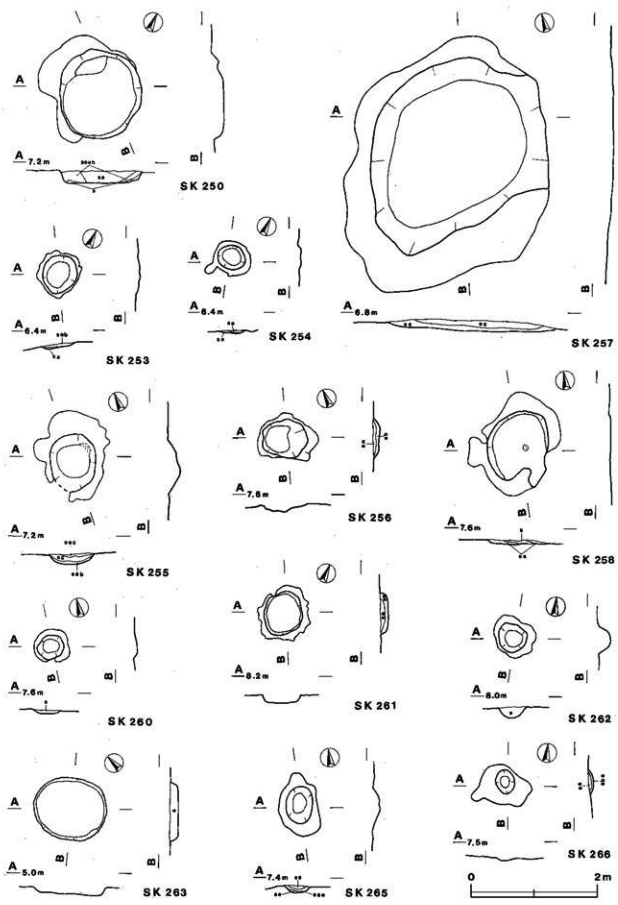


第24图 土坑实测图(3)

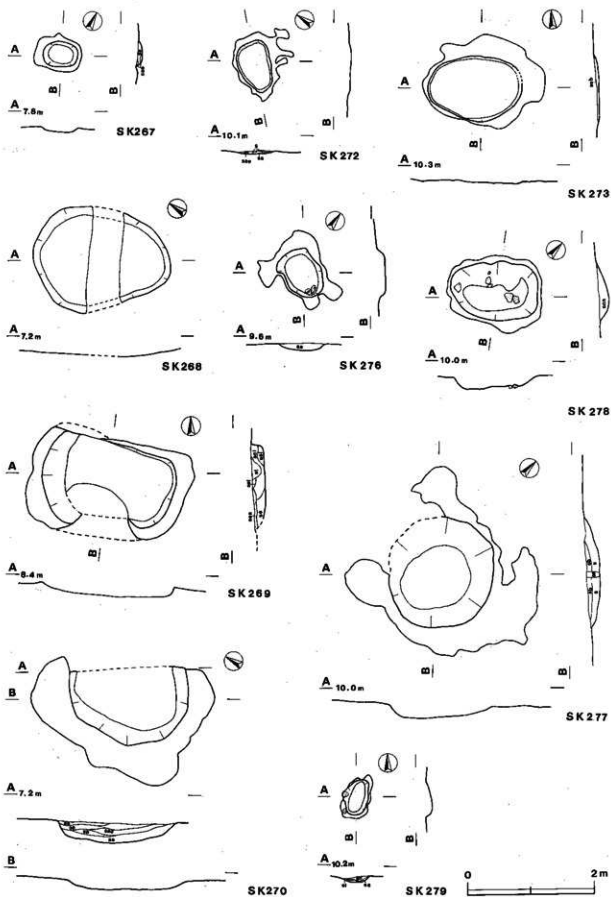


第25图 土坑实测图(4)

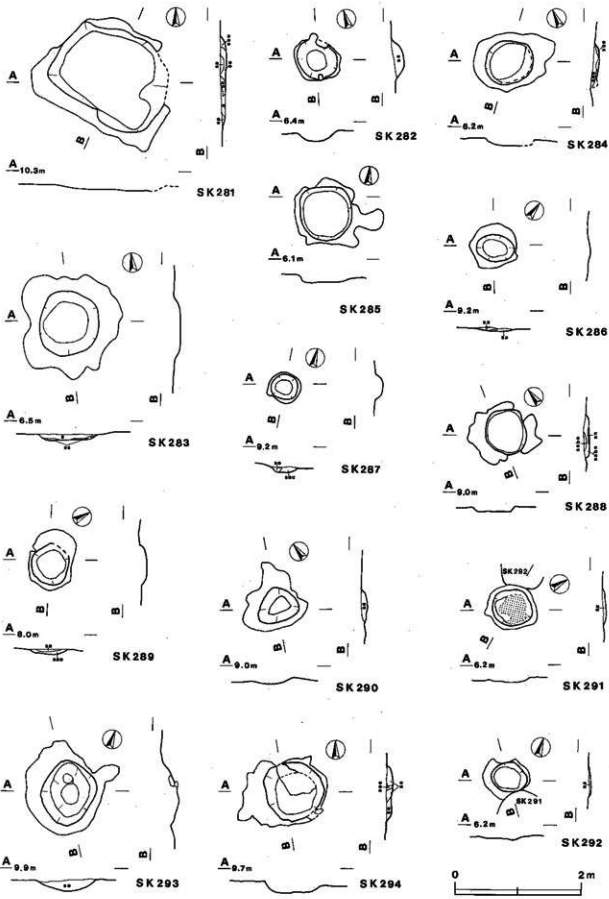




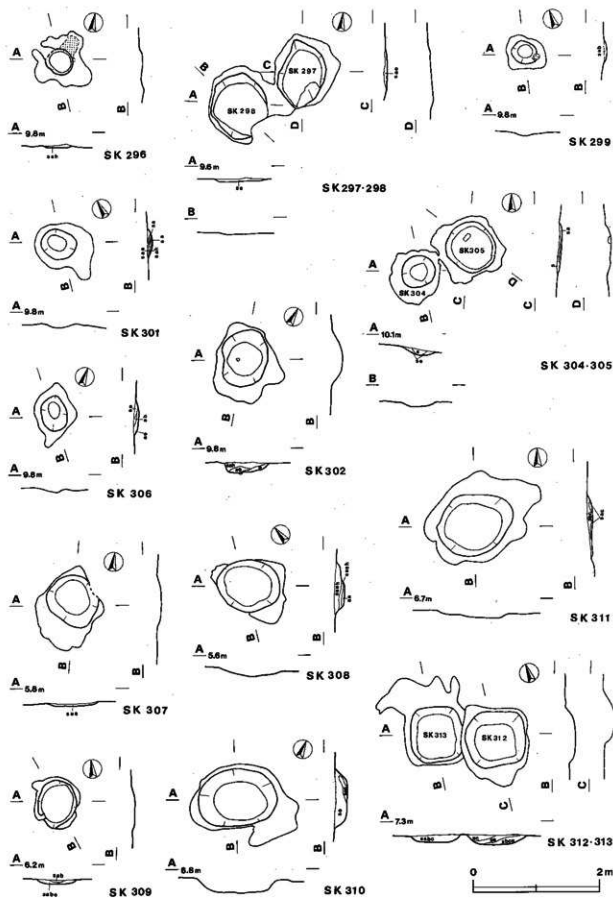
第26图 土坑实测图(5)



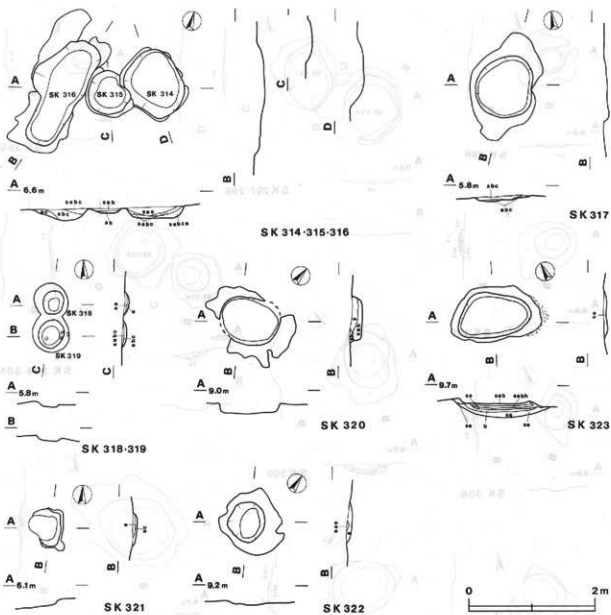
第27图 土坑窠洞图(6)



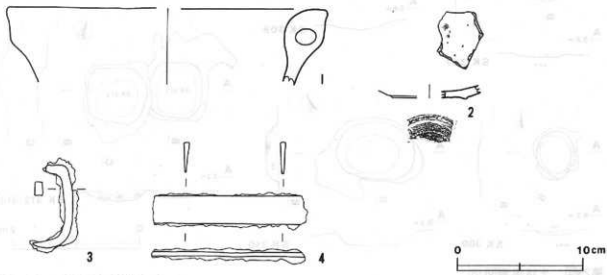
第28图 土坑实测图(7)



第29图 土坑实测图(8)



第30图 土坑实测图(9)



第31图 土坑出土物实测图

表6 土坑一覧表

図版 番号	S K 番号	位置	標高(m) (上端)	長軸方向	平面形	規模			壁面	底面	出土遺物	備 考 ※重複関係(新>旧)	
						長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)					
第22図	176	101	H5a	9.42	N-4-E	円形	0.81	0.78	0.30	外傾	平坦		
	177	102	H5a	9.36	N-77-W	長方形	1.86	0.96	0.46	外傾	平坦	底面平坦にていふ。	
	178	103	H5a	9.34	N-27-W	長方形	1.70	0.80	0.35	外傾	平坦		
	179	104	H5a	9.00	N-61-W	円形	0.96	0.94	0.14	外傾	皿状		
	180	105	H5a	9.40	N-6-W	隅丸長方形	1.22	0.92	0.30-0.34	外傾	平坦		
	181	106	H5a	9.40	N-61-W	隅丸長方形	0.84	0.68	0.30	外傾	平坦	壁面ノートニ泥色の土に磁器片	
	183	107	H4a	9.90	N-85-W	隅丸長方形	1.39	0.64	0.10	外傾	皿状	北端ノートニ壁面に石の遺物及瓦片の類に土が混入してゐる。	
	185	108	A5a	9.40	N-85-W	隅丸長方形	0.85	0.50	0.38	垂直	平坦		
	189	109	J5a7	8.10	N-41-W	楕円形	0.64	0.58	0.38	外傾	平坦	土質土に磁器片	
	190	110	J5f	7.70	N-2-W	楕円形	0.72	0.58	0.35	外傾	平坦		
	191	111	F4a	12.00	N-35-W	楕円形	0.86	0.66	0.30	外傾	皿状	底の磁器土質の砂が少い。	
	192	112	H4a	10.50	N-72-W	隅丸長方形	1.04	0.78	0.44	外傾	平坦		
	195	113	F4g	11.34	N-82-W	隅丸長方形	1.12	0.85	0.32	外傾	平坦	磁器土	
	第23図	196	114	F4e	10.90	N-27-W	楕円形	0.81	0.74	0.30	外傾	皿状	底の磁器土質の砂が少い。
		198	115	F4a	11.34	N-45-E	隅丸長方形	0.95	0.60	0.18	外傾	皿状	底の磁器土質の砂が少い。
199		116	F4j	11.42	N-44-E	隅丸長方形	1.22	0.64	0.10	外傾	皿状		
201		117	J5a	8.20	N-67-E	隅丸長方形	1.40	0.80	0.34	外傾	皿状	中央部に砂が混入。	
202		118	J5a	8.40	N-77-W	楕円形	0.98	0.70	0.13	外傾	皿状	壁面ノートニ磁器片	
203		119	J5a	8.40	N-67-W	円形	0.82	0.78	0.30	外傾	平坦		
204		120	H5j	7.96	N-13-W	楕円形	[0.80]	0.66	0.14	外傾	皿状		
205		121	J5a	6.56	N-76-E	楕円形	0.90	0.82	0.08	外傾	皿状	S202とS209	
206		122	H5a	8.10	N-37-E	楕円形	0.78	0.66	0.32	外傾	平坦	底面の磁器土質の砂が少い。	
207		123	H4a	8.20	N-42-W	隅丸長方形	0.80	0.62	0.18	外傾	皿状		
208		124	J5a	6.50	N-85-W	円形	0.50	0.46	0.08	外傾	皿状	S202と重複(図面S202)	
211		125	J5c	6.10	N-39-W	楕円形	0.56	0.36	0.15	垂直	平坦		
212		126	J5j	6.20	N-07	円形	0.52	0.52	0.10	外傾	皿状	底の磁器土質の砂が少い。	
213		127	J5a	6.34	N-85-W	楕円形	0.68	0.58	0.10	外傾	皿状		
214		128	J5a	9.64	N-67-W	楕円形	0.94	0.78	0.12	外傾	皿状	壁下土質の土に磁器片	
第24図	215	129	H4a	9.30	N-45-W	楕円形	1.22	1.00	0.10	外傾	皿状	磁器土に磁器片を含む。	
	216	130	B6a	9.52	N-15-E	楕円形	0.70	0.52	0.14	外傾	皿状	磁器土質の石	
	217	131	B5a	9.10	N-67-W	不定形	0.92	0.68	0.18	外傾	皿状		
	221	132	H5a	6.54	N-33-E	円形	0.48	0.40	0.10	外傾	皿状	S202とS203	
	222	133	J4j	-	N-39-W	楕円形	1.08	0.94	-	外傾	皿状	S202の南下りS202aと重複	
	223A	134	J4j	6.26	N-35-W	楕円形	1.20	0.96	0.16	外傾	皿状		
	224B	135	J4j	6.18	-	楕円形	[1.04]	1.00	0.20	外傾	皿状		
	224C	136	K5a	8.02	N-22-E	楕円形	1.38	1.38	0.20	外傾	皿状	底面の磁器土質の砂が少い。	
	225	137	F4b1	11.80	N-15-W	楕円形	1.46	1.32	0.12	外傾	皿状	磁器土質の石	
	227	138	F4b	10.96	N-81-W	楕円形	0.72	0.62	0.12	外傾	皿状		
	228	139	H5j	7.60	N-55-W	楕円形	1.02	0.74	0.08	外傾	皿状	磁器土質の砂が少い。	
	229	140	J5j	7.30	N-14-W	楕円形	0.30	0.24	0.10	外傾	丸底	底面の磁器土質の砂が少い。	
	232	141	J5a	7.36	N-25-E	円形	0.70	0.66	0.06	外傾	皿状		
	233	142	J5a	7.56	N-22-E	円形	1.06	0.98	0.10	外傾	皿状	S202と重複(注用)	
	234	143	J5j	7.56	N-4-E	楕円形	1.00	0.76	0.12	外傾	皿状	S202と重複(注用)	
第25図	235	144	A5a1	7.70	N-57-W	円形	0.60	0.60	0.10	外傾	皿状	底面の磁器土質の砂が少い。	
	236	145	F4b	8.38	N-36-E	楕円形	0.78	0.58	0.04	外傾	皿状		
	237	146	J5j	7.42	N-67-E	[円形]	0.80	[0.80]	0.08	外傾	皿状		

図面 番号	S K 番号	番号	位置	標高(m) (上端)	長軸方向	平面形	規模			壁面	底面	出土遺物	備 考  ※重複関係(新>旧)
							長軸(m)	短軸(m)	高さ(m)				
	228	147	H5ca	8.00	N-71°-W	橢円形	1.22	1.02	0.10	外傾	皿状		
	229	148	H5ba	7.90	N-86°-E	隅丸長方形	1.20	0.20	0.22	垂直	平坦		
	240	149	H5ba	8.00	N-20°-W	円形	0.41	0.40	0.11	外傾	皿状		
	211	150	H5aa	7.94	N-5°-W	円形	0.22	0.20	0.12	外傾	皿状		
	242	151	H5ga	7.60	N-8°-E	橢円形	0.72	0.46	0.14	外傾	皿状		遺物付との関係が不明。
	243	152	H4ja	7.72	N-44°-E	橢円形	0.46	0.24	0.08	外傾	皿状		330aと重複関係
	244	153	H4ja	7.82	N-65°-W	円形	0.40	0.46	0.10	外傾	皿状		330aと重複関係
	245	154	H5de	7.10	N-20°-W	橢円形	1.06	0.81	0.20-0.22	外傾	皿状		
	246	155	H5de	7.20	N-62°-W	橢円形	1.28	0.26	0.24	外傾	平坦		
	247	156	G5ja	7.80	N-20°-W	円形	1.00	0.20	0.20	垂直	平坦		
第236回	250	157	G5ha	7.00	N-20°-W	円形	1.28	1.24	0.18	外傾	皿状	土層上段内出土遺物	
	253	158	G5ha	6.20	N-20°-W	橢円形	0.46	0.40	0.04	外傾	皿状		330aと重複関係付との関係が不明。
	254	159	G5ha	6.14	N-7°-W	橢円形	0.60	0.22	0.26	外傾	皿状		遺物付との関係が不明。
	255	160	G5ha	6.90	N-27°-E	橢円形	0.22	0.72	0.20	外傾	皿状		遺物のみの関係
	256	161	H5aa	7.60	N-62°-W	橢円形	0.70	0.28	0.10	外傾	皿状	土層上段内出土遺物	
	257	162	H5ia	6.80	N-27°-E	橢円形	2.28	2.26	0.04	外傾	皿状		
	258	163	H5ea	7.40	N-42°-W	橢円形	1.12	0.22	0.22	外傾	皿状	土層上段内出土遺物	遺物付との関係が不明。
	260	164	H5ea	7.36	N-20°-E	橢円形	0.42	0.26	0.26	外傾	皿状		遺物付との関係が不明。
	261	165	H5ba	7.90	N-5°-E	橢円形	0.74	0.20	0.12	垂直	皿状		
	262	166	H5ba	7.80	N-41°-W	円形	0.46	0.44	0.20	外傾	丸底		遺物付との関係が不明。
	263	167	H5ba	4.80	N-25°-W	橢円形	1.18	1.00	0.14	外傾	皿状		遺物付との関係が不明。
	265	168	G5ia	7.20	N-25°-W	橢円形	0.60	0.42	0.12	外傾	皿状		330aとの関係。
	266	169	G5ja	7.28	N-14°-W	橢円形	0.40	0.20	0.04	外傾	皿状		330aとの関係。
第27回	267	170	H5di	7.50	N-70°-E	橢円形	0.24	0.42	0.06	外傾	皿状		
	268	171	H5ca	6.96	N-24°-W	橢円形	2.20	1.26	0.06	外傾	皿状		
	269	172	H4ga	8.00	N-62°-E	隅丸長方形	2.10	1.20	0.14	外傾	皿状		
	270	173	H5ca	7.06	N-24°-W	[橢円形]	1.20	0.24	0.12	外傾	皿状		遺物付との関係が不明。
	272	174	A3ja	9.86	N-67°-E	橢円形	0.84	0.24	0.06	外傾	皿状		遺物付との関係が不明。
	273	175	A3ia	10.02	N-25°-W	橢円形	1.52	1.08	0.04	外傾	皿状		
	276	176	B5aa	9.48	N-62°-W	橢円形	0.24	0.20	0.14	外傾	皿状		
	277	177	A4ga	9.80	N-0°	円形	1.20	1.24	0.26	外傾	皿状		遺物のみの関係
	278	178	A4ia	9.90	N-67°-E	橢円形	1.20	1.02	0.20	外傾	皿状		遺物付との関係が不明。
	279	179	A3ha	10.02	N-25°-E	橢円形	0.22	0.42	0.10	外傾	皿状		遺物付との関係が不明。
第239回	281	180	H5ca	10.08	N-25°-W	[隅丸長方形]	1.20	1.22	0.08	外傾	皿状		遺物のみの関係
	282	181	G5ja	6.20	N-42°-W	橢円形	0.70	0.26	0.18	外傾	皿状		遺物
	283	182	G5ia	6.30	N-25°-W	円形	1.04	1.02	0.14	外傾	皿状		
	284	183	H5gr	6.02	N-26°-W	[円形]	0.74	0.70	0.12	外傾	皿状		330aとの関係付との関係が不明。
	285	184	H5gr	5.86	N-27°-E	円形	0.22	0.20	0.12	外傾	皿状		遺物のみの関係付との関係が不明。
	286	185	J5da	8.94	N-27°-E	橢円形	0.42	0.44	0.04	外傾	皿状		
	287	186	J5da	8.88	N-25°-W	円形	0.42	0.40	0.10	外傾	皿状		
	288	187	J5ea	8.76	N-45°-E	橢円形	0.72	0.24	0.08	外傾	皿状		
	289	188	J5da	7.60	N-28°-E	橢円形	0.72	0.28	0.12	外傾	皿状		
	290	189	J5ea	8.84	N-26°-E	不定形	0.20	0.24	0.10	外傾	皿状		
	291	190	B5ja	5.96	N-42°-E	円形	0.64	0.20	0.08	外傾	皿状		330aとの関係付との関係が不明。
	292	191	B5ae	6.00	N-22°-E	橢円形	0.60	0.48	0.04	外傾	皿状		
	293	192	A3ga	9.66	N-20°-W	橢円形	1.04	0.28	0.08	外傾	皿状		土層上段内出土遺物
	294	193	A4ia	9.50	N-27°-W	[円形]	0.26	0.24	0.18	外傾	皿状		遺物付との関係が不明。

図版 番号	SK 番号	器種	位置	器高(m) (土高)	長軸方向	平面形	規模			器面	底面	出土遺物	備考 ※重複関係(新>旧)
							口縁(m)	口幅(m)	厚さ(m)				
第31図	286	194	A3a	9.00	N-15°-W	円形	0.42	0.40	0.02	外傾	皿状		
	287	195	A4a	9.36	N-1°-W	楕円形	1.06	0.78	0.04	外傾	皿状		1679の4区
	288	196	A4a	9.36	N-4°-W	楕円形	0.83	0.50	0.41	外傾	皿状		SK262(複製)
	289	197	A4a	9.54	N-6°-W	楕円形	0.42	0.34	0.04	外傾	皿状	残片	SK262(複製)
	301	198	A3a	9.00	N-35°-W	楕円形	0.52	0.46	0.02	外傾	皿状		底に6区
	302	199	A3a	9.54	N-8°-W	楕円形	0.96	0.72	0.14	外傾	皿状		SK262(複製)
	304	200	A3a	9.90	N-41°-W	円形	0.54	0.50	0.08	外傾	皿状		SK262(複製)
	305	201	A3a	9.96	N-7°-W	円形	0.84	0.76	0.06	外傾	皿状		SK262(複製)に6区
	306	202	A3a	9.00	N-35°-W	楕円形	0.54	0.42	0.08	外傾	皿状	北側の2区上り部は7区(複製)	1679の4区
	307	203	B1a	5.56	N-4°-W	楕円形	0.80	0.72	0.08	外傾	皿状	複製土器内径計	
	308	204	Ea	5.42	N-25°-W	楕円形	1.00	0.84	0.14	外傾	皿状	複製土器内径計	
	309	205	Ea	6.00	N-4°-E	楕円形	0.70	0.60	0.04	外傾	皿状		
	310	206	H3a	6.68	N-30°-E	楕円形	1.28	0.96	0.20	外傾	皿状		
	311	207	H3a	6.50	N-40°-E	楕円形	1.24	1.00	0.02	外傾	皿状		
	312	208	H3a	7.06	N-40°-W	楕円形	0.96	0.90	0.12	外傾	皿状		SK262-SK263
	313	209	H3a	7.04	N-35°-W	楕円形	0.90	0.80	0.12	外傾	皿状		
	314	210	H3a	6.36	N-35°-W	楕円形	0.94	0.78	0.10-0.22	外傾	皿状		SK262-SK263
	315	211	H3a	6.32	N-4°-W	楕円形	0.70	0.66	0.08	外傾	皿状		1区
	316	212	H3a	6.30	N-15°-E	楕円形	1.04	0.54	0.10	外傾	皿状	複製土器内径計	
317	213	H3a	5.56	N-35°-E	円形	1.04	0.94	0.08	外傾	皿状	計測		
318	214	H3a	5.70	N-4°-E	楕円形	0.42	0.32	0.10	外傾	皿状		SK262(複製)	
319	215	H3a	5.66	N-15°-E	円形	0.46	0.42	0.10	外傾	皿状		SK262(複製)	
320	216	A3a	8.80	N-45°-E	楕円形	0.96	0.78	0.18	外傾	皿状	複製土器内径計		
321	217	H3a	5.90	N-45°-W	楕円形	0.80	0.78	0.12	外傾	皿状		計測	
322	218	A3a	8.94	N-25°-W	円形	0.54	0.52	0.06	外傾	皿状			
323	219	A4a	9.36	N-35°-W	楕円形	1.10	0.70	0.20	外傾	皿状		複製土器内径計に付し。	

### 土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第31図 1	内耳土鍋 土器質土器	A(25.7) B(6.0)	体部から口縁部片、体部は直線的に外傾し、口縁部は僅かに外へ膨らんで立ち上がる。	口縁部内・外面横ナズ後、黒色地埋。	砂粒・長石・石英に多い赤褐色普通	P19 PL7 5% SK186 2区覆土
2	皿 陶器	B(0.6) D(6.0)	底部片、底部は平底で断面三角形の輪を持つ。	ロクろ成形。削り出し高台。底部に鉄線の一部が存在する。全面施釉。	砂粒 灰白色、長石粒 良好	P20 20% SK186 2区覆土 志野黄緑系

図版番号	器種	計測値				材質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第31図3	耳金	6.6	0.6	1.0	32.4	鉄	SK306底面	M2 PL9
4	刀子	(12.3)	2.3	0.4	(46.2)	鉄	SK217覆土	M3 PL9



(5) 井戸状遺構：SE-1（第32図）

位置 調査II区の南側，I5aからI5e区にかけて標高5.00mの所で  
検出される。

規模と平面形 長径2.42m，短径2.08mの楕円形で，石組みの始  
まりの面までの深さは1.7mである。

長径方向 N-54°-W

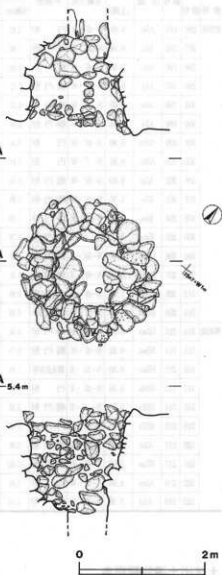
壁面 東側は，やや外傾しながら石が組みあげられている。西側  
は，底面から4m付近まで階段状に，その上は直立ぎみに石が  
組みあげられている。

底面 平坦で水分を多く含んだ砂層である。約20cm砂を掘ると  
水がしみ出る。

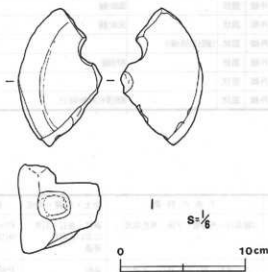
覆土 壁石と思われる崩れた石を若干含んだ砂層である。

出土遺物 壁に横み上げた石組みの中から石臼等が検出されてい  
る。

所見 海岸に見られる窪みのある石等で組み上げられている。当  
遺構の時期は不明である。しみ出た水の分析の結果は，下記の  
とおりである。



第32図 井戸状遺構実測図



第33図 井戸状遺構出土遺物実測図

検 査 項 目	検 査 結 果	水道法水質基準	備 考
硝酸性窒素及び亜硝酸性窒素	0.9 mg/l	10 以下	左記の6項目の検査結果から飲料に 適する。
鉄	0.02mg/l	0.3 以下	
塩素イオン	32.6 mg/l	200 以下	
カルシウム・マグネシウム等（硬度）	150 mg/l	300 以下	
有機物等（KMnO <sub>4</sub> 消費量）	9.6 mg/l	10 以下	
P H 値	8.0 mg/l	5.8以上8.6以下	

井戸状遺構出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第33図1	石臼	(21.7)	13.2	9.1	(3100.0)	硬岩	石組中	Q4, 上白 25%

(6) 貝集積地：SM-1 (第34図)

位置 調査II区南部のH5a区とH5a<sub>1</sub>区の境界を中心に検出された。

高さ 標高7.60m。

規模と平面形 長径1.00m, 短径0.72mの楕円形である。

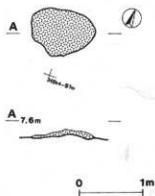
堆積している貝の厚さは4~12cmである。

長径方向 N-71°-E

遺物 検出されたものは、表7に掲載の貝と魚の骨である。

壁・底面 砂地に捨てられたものと思われるので、掘り込みが確認できなかった。

所見 貝殻の中には小さいものも見受けられるが、多くが食用にされたものと思われる。また、鹹水槽や土坑などをつつための黒色土砂の中に砕かれた貝殻が見られるので、2次利用の可能性もある。



第34図 貝集積地実測図

No.	種別	重量	備考
1	クマノコガイ	3.7 Kg	
2	ムラサキインコガイ	3.3 Kg	
3	チョウセンハマグリ	128.2 g	
4	ハマグリ	54.2 g	
5	アカニシ	21.0 g	
6	マガキ	70.9 g	
7	アサリ	4.2 g	
8	バカガイ	195.8 g	
9	ウバガイ	76.8 g	
10	アカガイ	0.7 g	
11	コタマガイ	39.0 g	
12	イボニシ	480.0 g	
13	トコブシ	2.6 g	
14	フジツボ	2.8 g	
15	オオヘビガイ	7.9 g	
16	レイシ	196.8 g	
17	ヘソアキクボガイ	37.1 g	
18	ミガキボラ	30.1 g	
19	ユキノカサガイ	4.6 g	
20	カモガイ	94.5 g	
21	イシダタミ	42.0 g	
22	貝殻小片等	11.1Kg	
23	骨小片(スズキ)	2.7 g	

表7 貝及び魚骨量

(7) 不明遺構 (第35~38図)

第1号不明遺構(第1号石積み遺構) (第35図)

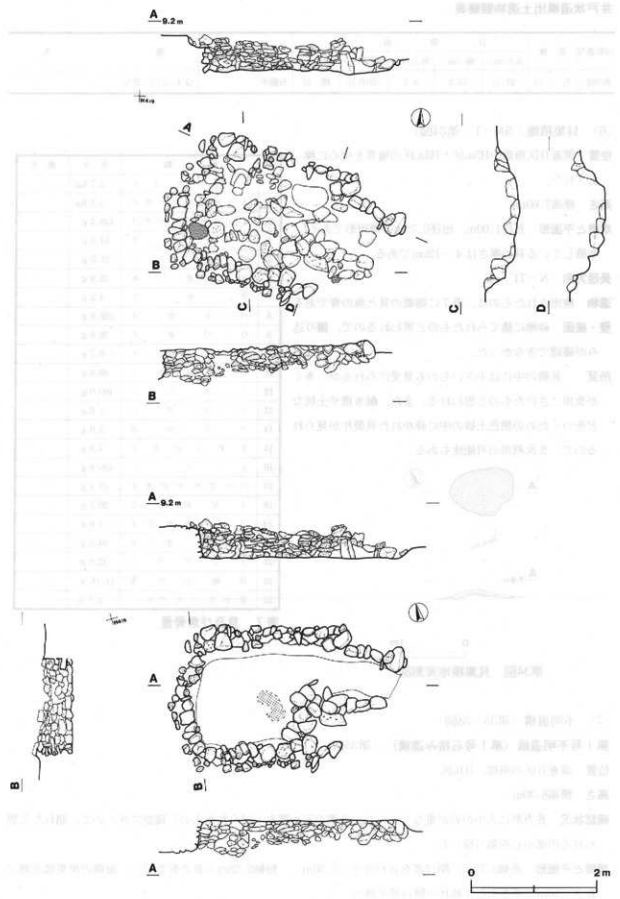
位置 調査II区の南部, H4<sub>1</sub>区。

高さ 標高8.30m。

確認状況 長方形に大小の石が重なっていた。外側の石が積み上げられたものと確認できたので、崩れたと思われる内部の石を取り除いた。

規模と平面形 長軸2.70m (開口部を合わせると3.80m), 短軸2.28mの長方形を呈し、海側の南東部北側に長さ1.10mの突き出た片袖状の開口部を持つ。

長径方向 N-73°-W



第35図 第1号不明遺構(第1号石積み遺構)実測図

壁 砂地を20cmほど掘り込んで、0.34~0.90mの高さに、大きい石の間に小さい石や砂を入れて刷れないように積み上げている。

底面 線の範囲内に煤・灰混じりの黒色土砂が広がっている。また、砂が焼けている部分が確認され、火を燃やした跡と思われる。

遺物 積み上げられた石の中から石皿2点(うち1点は赤く焼けた跡がある)と円筒埴輪片(第39図3)1点、刷れたと思われる石の中からクジラの脊椎骨、覆土である砂中から内耳土鍋の破片等が出土している。  
所見 本跡は、小屋の壁石の部分と考えられる。時期は不明である。

### 第2号不明遺構(第2号石積み遺構)(第36図)

位置 第1号石積み遺構の北側、H4h<sub>1</sub>~H4h<sub>2</sub>区。

高さ 床面で標高8.80mである。

確認状況 第1号石積み遺構より石積みの残り状況は悪かったが、入り口と思われる部分がはっきりしていた。

規模・形状 長軸2.92m(開口部を合わせると3.60m)、短軸2.44mの長方形を呈し、第1号と同様に海側の南東部南側に長さ0.68m、幅0.68mの片袖状の開口部を持つ。

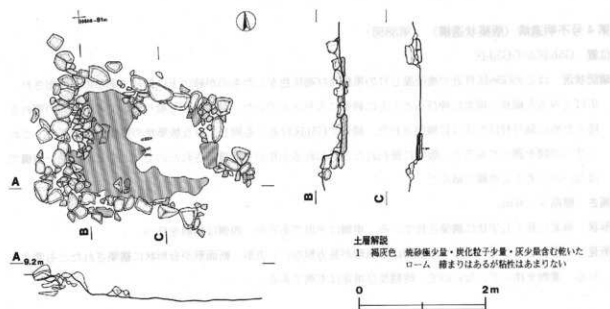
長径方向 N-70°-W

壁 石積みの残りが悪く、ほとんどが崩れている。開口部の付近の小石に煤が付着しているものがあった。

底面 砂地の上に煤混じりの黒色土砂、さらに比較的粘性のあるロームを2~10cmの厚さに貼っている。

遺物 人骨の一部がローム貼りの床面から検出されている。また、覆土である砂中から土師質土器(皿、内耳土鍋)が出土している。

所見 人の部分骨が確認されたが、この付近は高低を問わず墓域となっており、流れ込みの可能性が考えられるので、本跡に伴うものとは断定しがたい。現時点では、第1号同様時期は不明である。



第36図 第2号不明遺構(第2号石積み遺構)

### 第3号不明遺構（粘土床状遺構）（第37図）

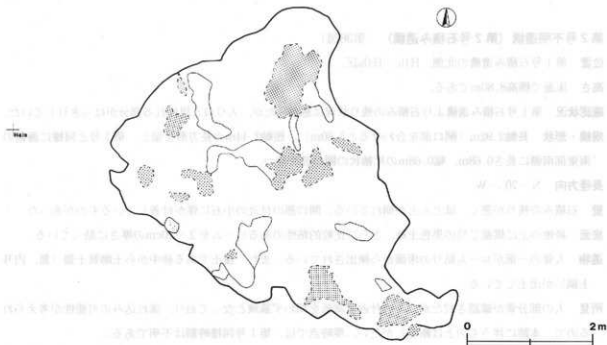
位置 調査II区のH4j区を中心に東西南北に広がって検出される。

高さ 7.80m前後を測る。

確認状況 砂の上に煤、灰混じりの黒色土砂が貼られて構築されている。一部には比較的粘性のあるロームが貼られていた。また、火を燃やしたと思われる赤く焼けた部分が何か所もあった。

規模と形状 最大径で南北4.9m、東西4.3mの不定形で、平坦なものである。

所見 遺物等もないので時期及び遺構の性格は不明である。



第37図 第3号不明遺構（粘土床状遺構）実測図

### 第4号不明遺構（版築状遺構）（第38図）

位置 G5b<sub>j</sub>区からG5J<sub>i</sub>区。

確認状況 はじめG5e<sub>i</sub>区付近で焼灰混じりの黒色及び褐色をしたものが砂の上に貼ってあるのが検出され、広げてみると細長く南北に伸びるとともに砂中に入り込んでいた。付近の砂を取り除いてみると砂の崩れを防ぐために貼り付けたように検出された。続いてG5j<sub>i</sub>区付近でも同じような版築状の遺構が検出され、これら2つの間を調べてみると、版築に使われたと思われる小片が多数確認されたので、この2つは同一遺構ではないかと考えて点線で結んだ。

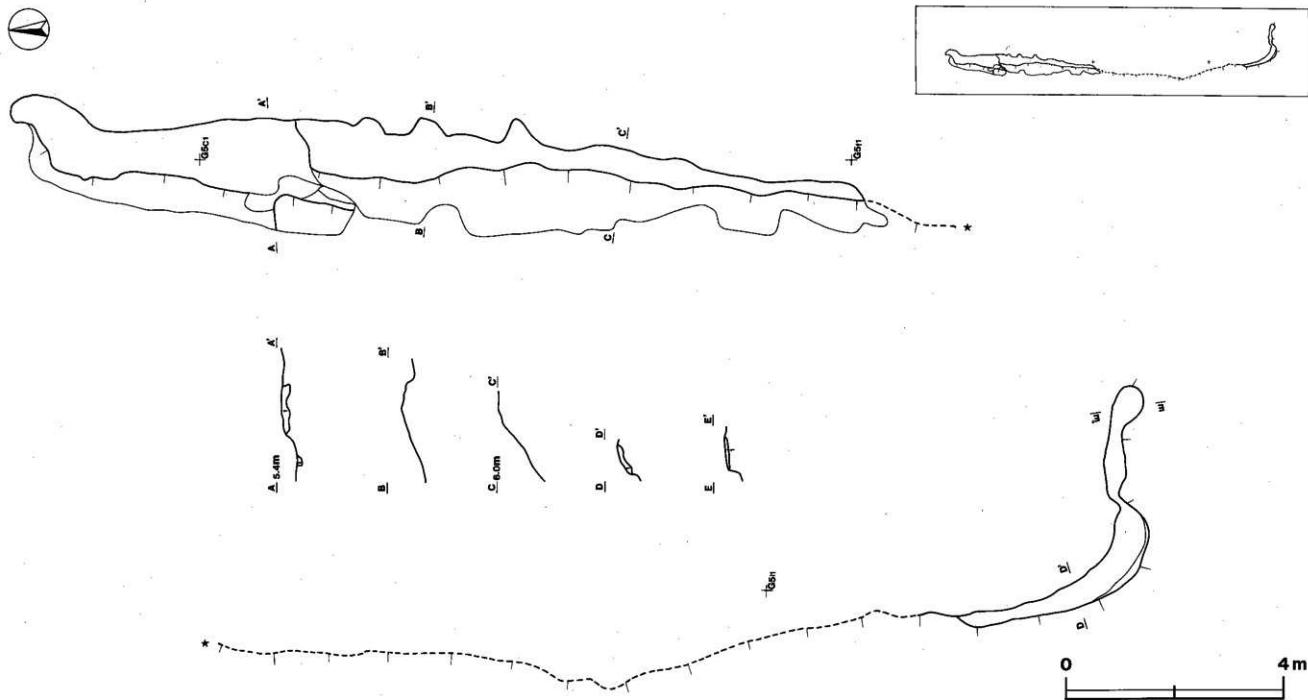
高さ 標高5～6m。

形状 南北に長くL字状に構築されている。東側は平坦であるが、西側は傾斜を持つ。

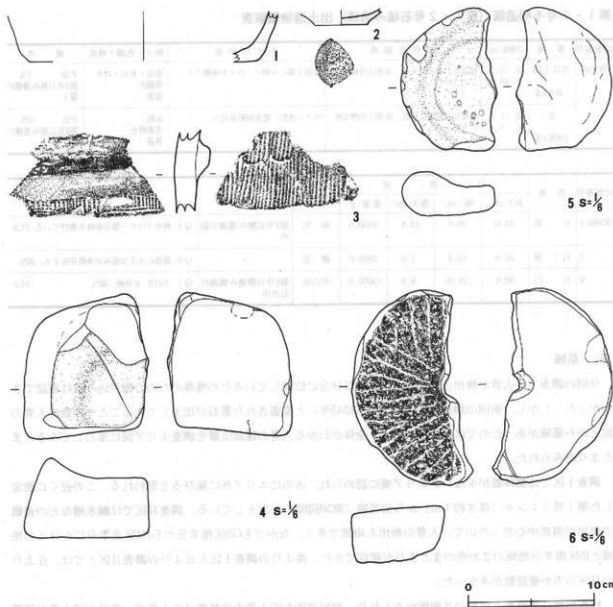
所見 L字状を呈しているのので、最初は平面形が長方形ないし方形、断面形が台形状に構築されたとも考えられる。遺物を伴っていないので、時期及び用途は不明である。

#### 土層解説

1 褐色色 炭砂極少量・炭化粒子少量・灰少量含む乾いた土の層 締まりはあるが粘性はない



第38图 第4号不明遺構実測図 (版築状遺構)



第39図 第1・2号不明遺構（第1・2号石積み遺構）出土遺物実測・拓影図

表8 井戸状遺構・貝集積地・不明遺構一覧表

図版 番号	SX 番号	遺 構 名	位 置	標高(m) 確認面	平面形	規 模		出 土 遺 物	備 考
						長径(m)	短径(m)		
第32図	11	井戸状遺構(SE-1)	E50c-E50r	5.00	楕円形	2.42	2.08	石臼片1点	深さ1.7m
第34図	10	貝集積地(SM-1)	E50a-E50a	7.50	楕円形	1.00	0.72		貝層の厚さ4~12cm
第35図	6	第1号不明遺構(第1号石積み遺構)	H4a	9.00	片袖状	3.80	2.28	石皿2点,石臼点, 鏝の骨槍倉	底面に残った貝層があり, 全体は灰の混じった砂。
第36図	7	第2号不明遺構(第2号石積み遺構)	H4a	9.20	片袖状	3.60	2.44	土層質土器(内耳土器・皿) 土器品(内耳土器)1点	底面は粘土が貼られていた。
第37図	8	第3号不明遺構(粘土束状遺構)	H4b-H4b (南北)	7.80	不定形	5.80	3.20		主軸方向N-40°-W 南北4.3m,東西4.3m
第38図	9	第4号不明遺構(版敷状遺構)	G5b-G5j	5.40-6.00	L字形	-	-		南北に約0.4m,版敷の土に 破砕貝を含む。

第1・2号不明遺構(第1・2号石積み遺構)出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	内耳土鍋 土師質土器	B (3.7) C (18.2)	底部片。底部は平底。体部は外傾して立ち上がる。	体部下端へラ削り。内・外面傾ナデ。	紫母・長石・石英 黒褐色 普通	P22 5% 第2号石積み遺構内 覆土
2	皿 土師質土器	B (1.1) C 3.4	底部片。底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転未切り。	砂粒 浅黄褐色 普通	P21 10% 第2号石積み遺構内 覆土

図版番号	器種	計測値				石質	出土地点	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第30図 4	石 皿	23.0	20.0	12.8	8350.0	砂 岩	第1号石積み遺構石組 中	Q5, 熱をうけて一部分赤味を帯びている。PL8
5	石 皿	22.9	15.4	7.0	2680.0	礫 岩	〃	Q6, 器面に小さな窪みが多数存在する。50%
6	石 臼	30.6	(21.0)	9.0	(5650.0)	安山岩	第1号石積み遺構内 石の中	Q7, 下臼片, 6分画。50% PL8

(8) 墓域

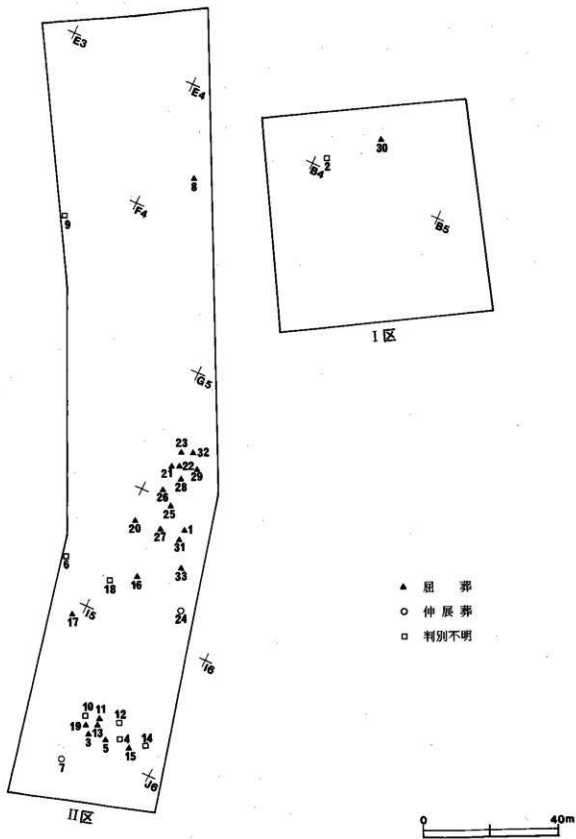
今回の調査でも人骨が検出されたが、当遺跡は砂丘に位置しているため埋葬のための掘り込み等は確認できなかった。しかし、前回の調査では天文14年(1545年)と墨書された墓石が出土していることや多数の人骨の出土から墓域があったのではないかと考え、全体がわかる人骨の確認位置を調査エリア図に落としてみるとまじりがみられた。

調査Ⅰ区では個体数が少ないがエリア境に認められ、さらにエリア外に延びると思われる。この近くに設定した第1号トレンチ(深さ約1m)から仏花器(第50図62)が出土している。調査Ⅱ区では鹹水槽などの遺構の検出が南部中心だったので、人骨の検出も南部で多く、なかでもG5区南半分からH5区北半分にかけての地域とI5区南半分地域の2か所のまじりが確認できた。海よりの調査Ⅰ区と丘よりの調査Ⅱ区とでは、丘よりのⅡ区の方が確認数が多かった。

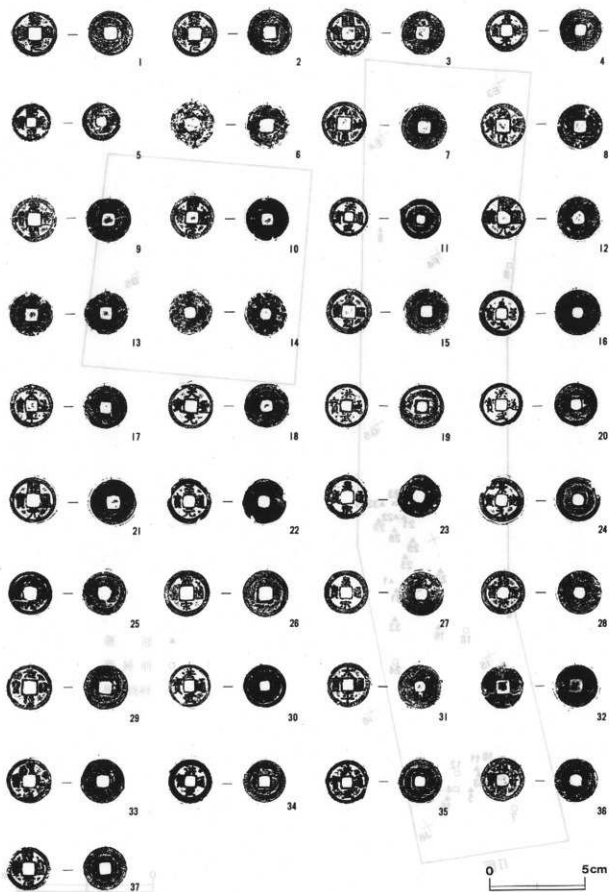
埋葬形態は伸長葬と屈葬の2種類がみられた。判別可能な27人骨中伸長葬は2人骨で、残りの25人骨が屈葬であった。元符通寶、洪武通寶、熙寧元寶、皇宋通寶等の渡来銭を伴っていた人骨があった。さらに人骨下から糸で括られた状態で検出された古銭(第41図M23~M28)もあり、六道銭と考えられる。検出された中で一番新しい時期に鋳造された六道銭は、1368年を初年とする洪武通寶(明銭)である。六道銭を伴った9人骨中5人骨に洪武通寶が入っていた。このことから5つの人骨は14世紀後半以降に埋葬されたことになる。表採された古銭(第54図M92~M115)も六道銭の可能性はある。古銭については拓影図及び観察表に掲載する。また、土師質土器(内耳土鍋)片が調査Ⅱ区のG5・H5・I5区の調査各次面で多数表採されており、これは人骨出土地点のまじりと重なる。第2次調査では2基の土坑から人骨に土師質土器(内耳土鍋)が伴って出土しているし、第5次調査では初めて墓壇が検出され、人骨に内耳土鍋片を伴っていた。以上のことから今回は検出されなかったが、土師質土器(内耳土鍋)の何点かは人骨に伴うものと考えられる。

遺構と人骨のレベル上の関係は第128号土坑(SK214)のすぐ下の人骨(No.7)が検出されるなど、遺構と人骨が相前後することが確認された。





第40图 人骨出土位置图



第41圖 墓城出土遺物拓影圖

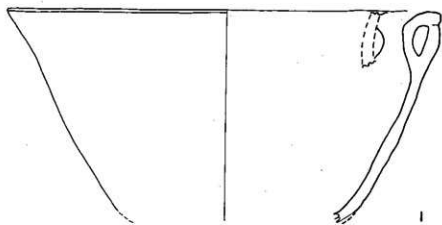
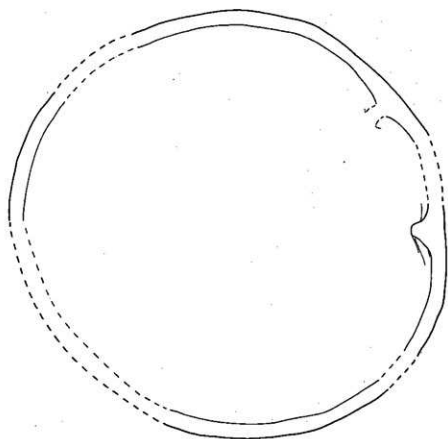
國臺台土出物人 國04第

墓域出土遺物観察表

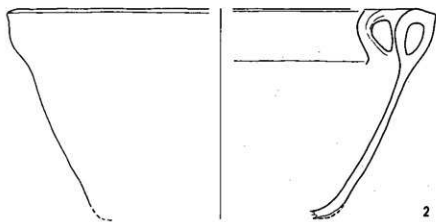
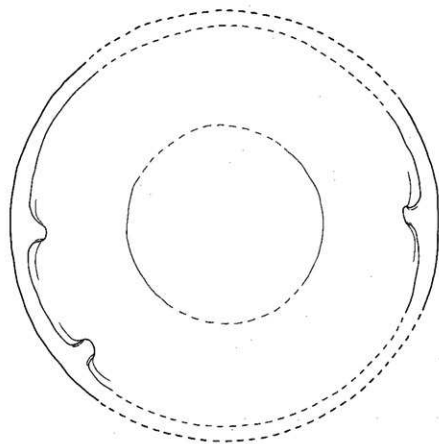
図版番号	錢種	初 鋳 年		出 土 地 点	備 考	
		時代	年号(西暦)			
第41図1	熙寧元寶	北宋	熙寧元年(1068)	I5ha区人骨(No11)の六道銭	M4	篆書 PL9
2	熙寧元寶	北宋	熙寧元年(1068)	"	M5	篆書 PL9
3	開元通寶	唐	武徳4年(621)	"	M6	真書 PL9
4	嘉祐元寶	北宋	嘉祐元年(1056)	"	M7	真書 PL9
5	〇〇〇寶	-	-	"	M8	- PL9
6	〇〇〇〇	-	-	"	M9	- PL9
7	元祐通寶	北宋	元祐元年(1086)	I5ha区人骨(No12)の六道銭	M10	行書 PL9
8	元符通寶	北宋	元符元年(1098)	"	M11	行書 PL9
9	元豊通寶	北宋	元豊元年(1078)	"	M12	篆書 PL9
10	熙寧元寶	北宋	熙寧元年(1068)	"	M13	篆書 PL9
11	洪武通寶	明	洪武元年(1368)	"	M14	真書, 無背・単点通 PL9
12	開元通寶	唐	武徳4年(621)	H5ca区人骨(No22)の六道銭	M15	真書 PL9
13	〇〇〇〇	-	-	"	M16	- PL9
14	〇〇〇〇	-	-	"	M17	- PL9
15	至和通寶	北宋	至和元年(1054)	G5gn区人骨(No23)の六道銭	M18	篆書 PL9
16	至道元寶	北宋	至道元年(995)	"	M19	草書 PL9
17	太平通寶	北宋	太平興國元年(976)	"	M20	真書 PL9
18	天聖元寶	北宋	天聖元年(1023)	"	M21	真書 PL9
19	洪武通寶	明	洪武元年(1368)	G5jn区人骨(No27)の六道銭	M22	真書, 無背・単点通 PL9
20	洪武通寶	明	洪武元年(1368)	H5ba区人骨(No24)の六道銭	M23	真書 PL9
21	開元通寶	唐	武徳4年(621)	"	M24	真書 PL9
22	至道元寶	北宋	至道元年(995)	"	M25	真書 PL9
23	皇宋通寶	北宋	皇元元年(1038)	"	M26	真書 PL9
24	景德元寶	北宋	景德元年(1004)	"	M27	真書 PL9
25	〇〇〇〇	-	-	"	M28	- PL9
26	皇宋通寶	北宋	皇元元年(1038)	H5ca区人骨(No1)の六道銭	M29	真書 PL9
27	皇宋通寶	北宋	皇元元年(1038)	"	M30	真書 PL9
28	紹聖元寶	北宋	紹聖元年(1094)	"	M31	篆書 PL9
29	元〇〇寶	-	-	"	M32	篆書 PL9
30	洪武通寶	明	洪武元年(1368)	G5jg区人骨(No26)の六道銭	M33	真書 PL9
31	太平通寶	北宋	太平興國元年(976)	"	M34	真書 PL9
32	〇〇〇〇	-	-	"	M35	- PL9
33	〇〇〇〇	-	-	"	M36	- PL9
34	洪武通寶	明	洪武元年(1368)	I5ba区人骨(No14)の六道銭	M37	真書, 無背・単点通 PL9
35	洪武通寶	明	洪武元年(1368)	"	M38	真書, 無背・単点通 PL9
36	祥符通寶	北宋	大中祥符元年(1009)	"	M39	真書 PL9
37	熙寧元寶	北宋	熙寧元年(1068)	"	M40	篆書 PL9

### 3 遺構外出土遺物

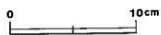
当遺跡における遺物の出土状況は、遺構に伴うものが僅かで、遺構外から多くの遺物が出土している。遺構外出土遺物を土器、陶磁器、土製品、石製品、金属製品及び古銭の順に掲載する。ところで、第50図65～69及び第51図の70・71の拓影図はハケ目を施された円筒埴輪片である。これらの埴輪片は鹹水槽等を作るための土などと一緒に運ばれたものと思われる。



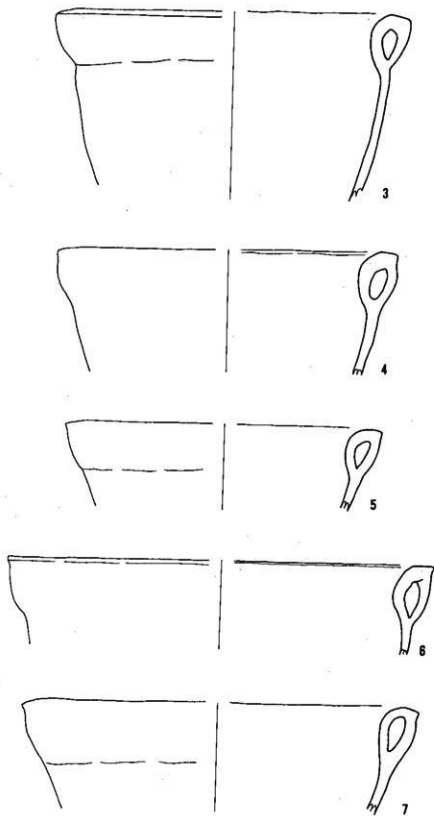
第42図 遺構外出土遺物実測図(1)



2

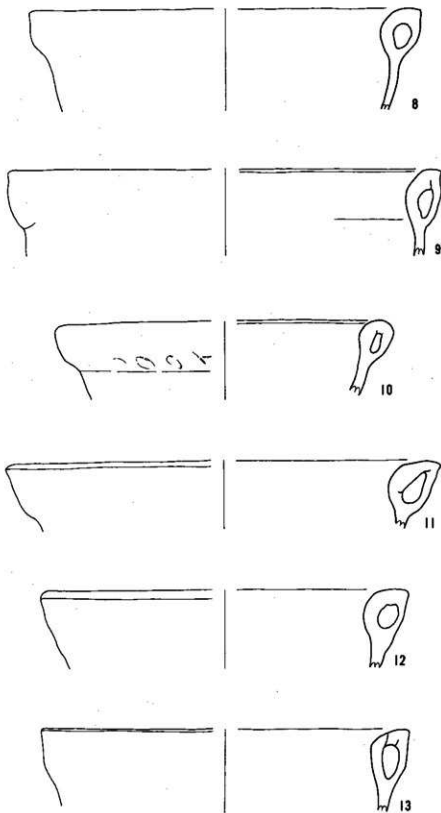


第43图 遺構外出土遺物実測图(2)

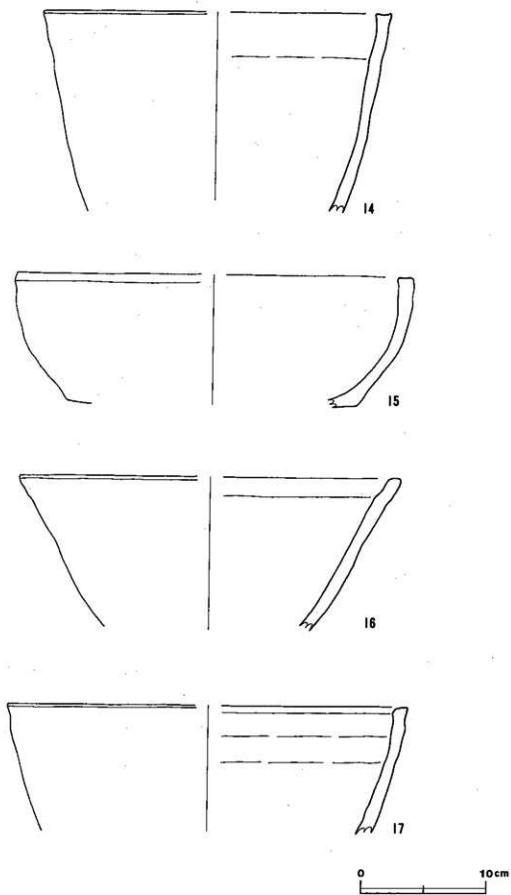


0 10cm

第44图 遺構外出土遺物実測図(3)

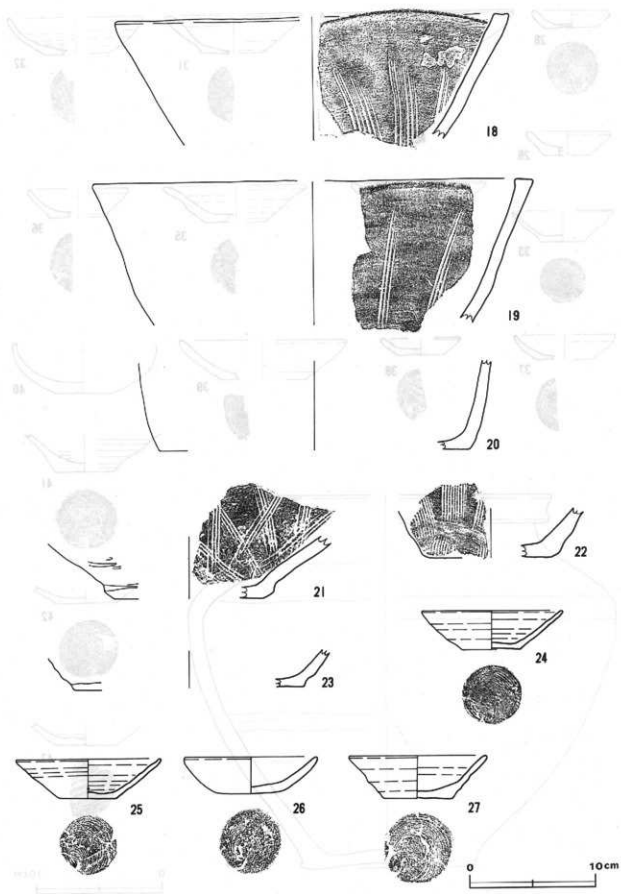


第45图 遺構外出土遺物実測図(4)



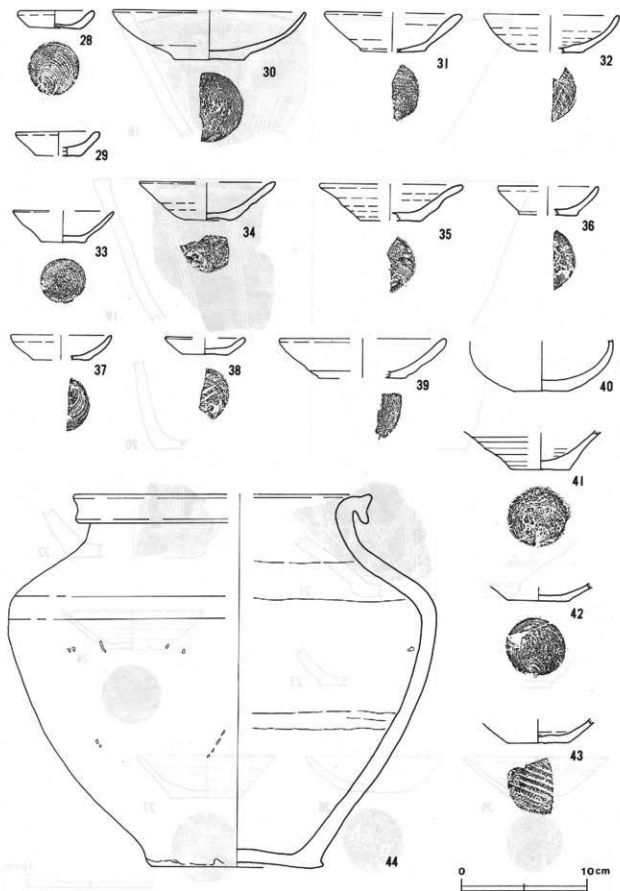
第46図 遺構外出土遺物実測図(5)





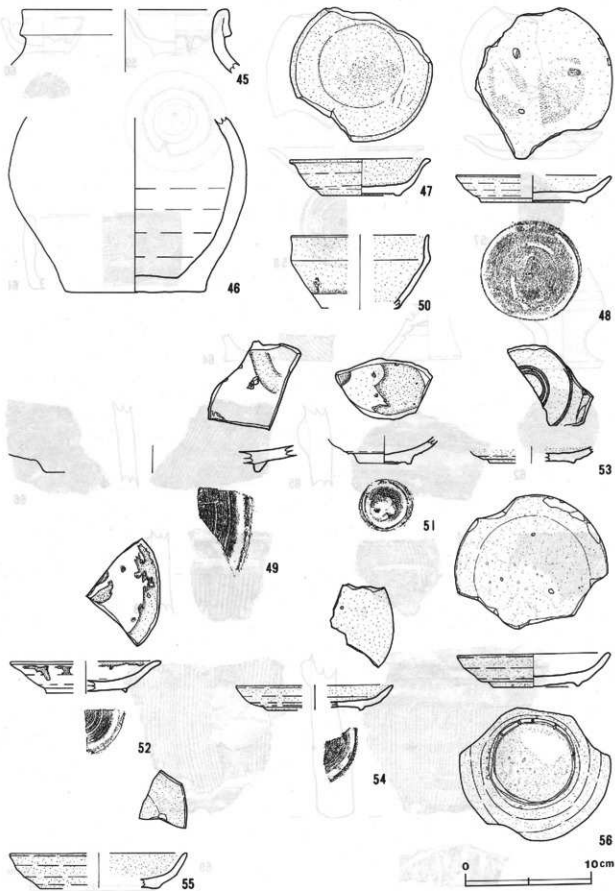
第47图 遺構外出土遺物実測图(6)

(1) 図紙実物型土出代測定 (2) 50cm



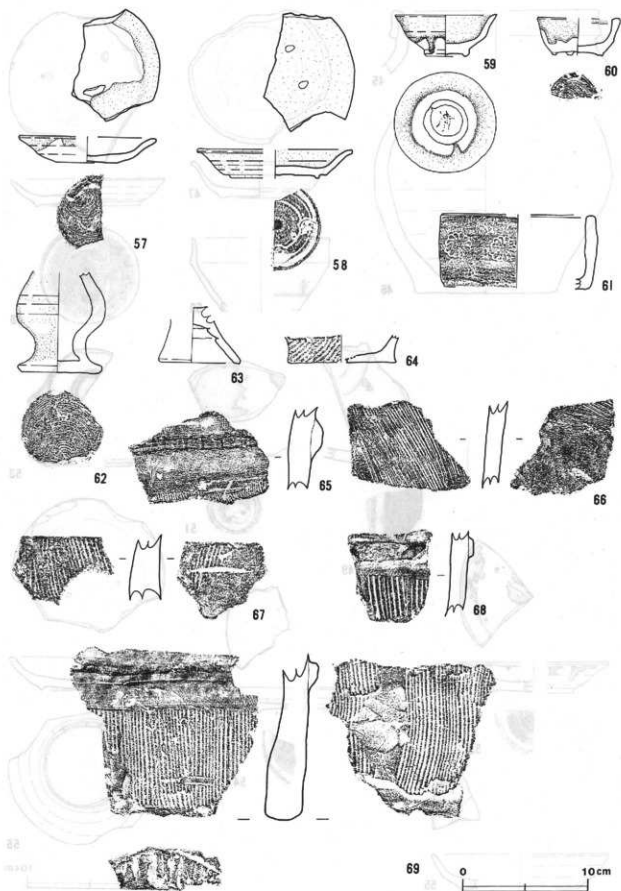
第48图 遗構外出土遺物実測図(7)

① 国史館蔵出土品実測図 ② 1/4縮



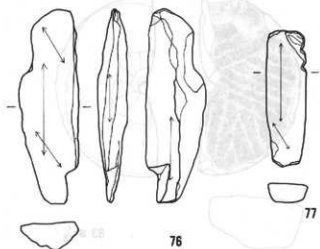
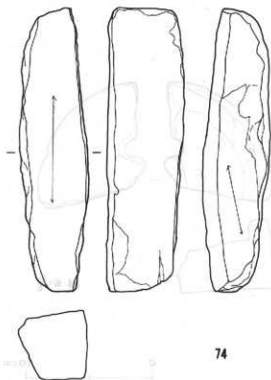
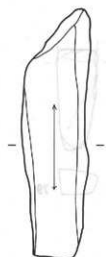
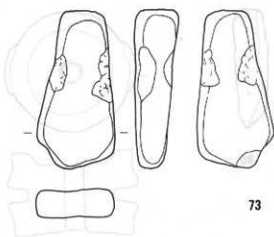
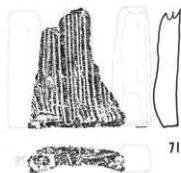
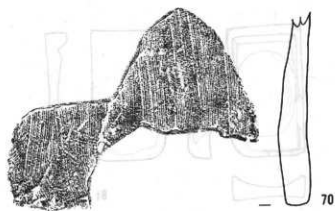
第49图 遺構外出土遺物実測图(8)

(左) 遺構外出土遺物実測图(8)



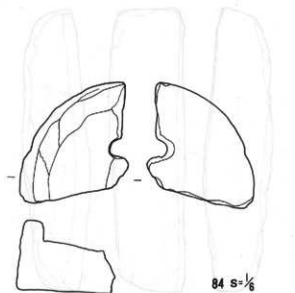
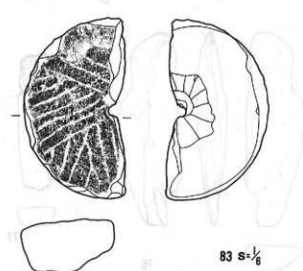
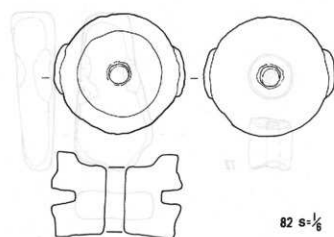
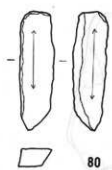
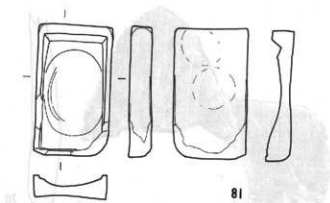
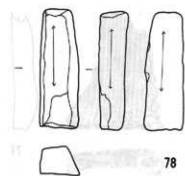
第50图 遗物出土实物图(9)

① 陶器出土实物图 ② 陶器



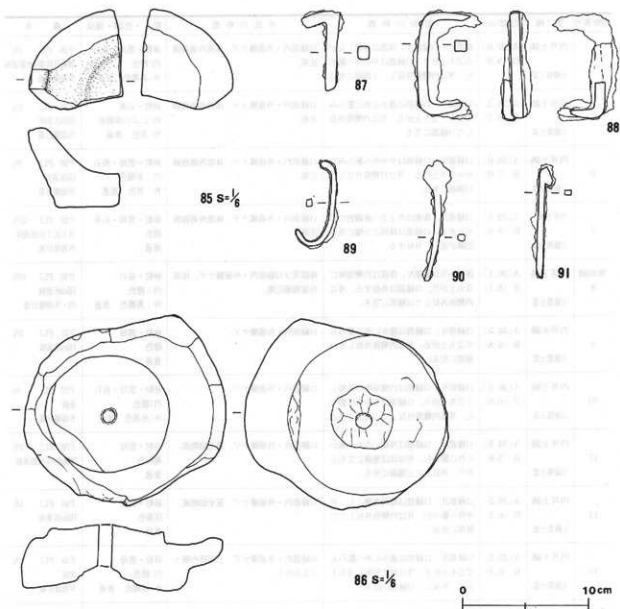
第51图 遺構外出土遺物実測図(10)

(1) 福井県東部出土の遺物 (2) 福井県



第52图 遺構外出土遺物実測図(11)

(1) 紀伊東部群島出土の遺物。2/10等



第53図 遺構外出土遺物実測図(12)

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	内耳土鍋 土器質土器	A 34.6 B (16.8)	体部から口縁部片。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反気味に外へ膨らむ。耳はほぼ垂直に立ち上がる。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 内:明赤褐色 外:黒褐色 普通	P23 PL6 40% GSE表採 外面採付着
第43図 2	内耳土鍋 土器質土器	A [34.2] B (16.7)	体部から口縁部片。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部はやや外に膨らむ。耳は内彎後外反して口縁部に至る。	体部及び口縁部内・外面横ナデ。 体部外面指面圧痕。	砂粒・雲母・長石 内:橙色、外:黒色 普通	P24AB 40% 表採 外面採付着
第44図 3	内耳土鍋 土器質土器	A (28.3) B (14.1)	体部から口縁部片。体部は内彎気味に開いて立ち上がり、口縁部はやや外に膨らむ。耳は内彎後外反する。	口縁部内・外面横ナデ。 体部外面指面圧痕。	砂粒・雲母・石英 内:黒褐色、外:黄褐色 普通	P25 PL7 10% GSE表採 外面採付着

図版番号	器種	寸法(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
4	内耳土鍋	A(27.0) B(9.8)	体部から口縁部片。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部はやや外へ膨らむ。耳は内側後外反し、上端部に平る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦頭圧痕。	砂粒・雲母・長石 内：橙色 外：赤褐色 普通	P26 PL7 5% 調査区1区4次表表層 外周埋付者
	土師瓦土器					
5	内耳土鍋	A(25.2) B(6.7)	口縁部片。口縁部は僅かに外に膨らみながら、立ち上がる。耳は内側後外反して口縁部に平る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦頭圧痕。	砂粒・石英 内：ぶい赤褐色 外：黒色 普通	P27 PL7 5% 調査区1区4次表表層 外周埋付者
	土師瓦土器					
6	内耳土鍋	A(34.0) B(7.0)	口縁部片。口縁部はやや外へ膨らみながら立ち上がる。耳は内側後外反して口縁部に平る。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦頭圧痕。	砂粒・雲母・長石 内：赤褐色 外：黒色 普通	P28 PL7 5% 調査区1区4次表表層 外周埋付者
	土師瓦土器					
7	内耳土鍋	A(32.1) B(8.6)	口縁部片。体部は外上方へ直線的に立ち上がる。口縁部は体部の境に低い凹線が走り、外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦頭圧痕。	砂粒・雲母・石英 内：赤褐色 外：黒色 普通	P29 PL7 35% 調査区1区4次表表層 外周埋付者
	土師瓦土器					
第45回 8	内耳土鍋	A(30.1) B(8.1)	体部から口縁部片。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部は外反する。耳は内側後外反して口縁部に平る。	体部及び口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦頭圧痕。	砂粒・長石 内：褐色 外：黒褐色 普通	P30 PL7 10% 調査区1区4次表表層 内・外周埋付者
	土師瓦土器					
9	内耳土鍋	A(34.5) B(6.8)	口縁部片。口縁部は僅かに外に膨らみながら立ち上がる。耳は内側後外反して口縁部に平る。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 内：褐色 外：黒色 普通	P31 PL7 5% 調査区1区4次表表層
	土師瓦土器					
10	内耳土鍋	A(26.9) B(6.9)	口縁部片。口縁部は内側気味に外傾して立ち上がり、口縁部はやや外へ膨らむ。耳は内側後外反して口縁部に平る。	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 内：褐色 外：赤褐色 普通	P32 PL7 5% 調査区1区4次表表層 外周埋付者
	土師瓦土器					
11	内耳土鍋	A(34.5) B(5.6)	口縁部片。口縁部は外傾しながら僅かに外に膨らむ。耳はほぼ垂直に立ち上がり、外反して上端部に平る。	口縁部内・外面横ナデ。還元焼成。	砂粒・雲母 褐色 普通	P33 PL7 5% 調査区1区4次表表層
	土師瓦土器					
12	内耳土鍋	A(29.3) B(6.3)	口縁部片。口縁部は帯肉を薄くし、やや外へ膨らむ。耳は内側後外反して口縁部に平る。	口縁部内・外面横ナデ。還元焼成。	砂粒・雲母 灰黄色 普通	P34 PL7 5% 調査区1区4次表表層
	土師瓦土器					
13	内耳土鍋	A(29.2) B(6.5)	口縁部片。口縁部は僅かに外へ膨らみながら立ち上がる。耳は直立気味に立ち上がり、外反して口縁部に平る。	口縁部内・外面横ナデ。上端部内側へつまみ出し。	砂粒・雲母 内：褐色 外：暗褐色 普通	P35 PL7 5% 調査区1区4次表表層 外周埋付者
	土師瓦土器					
第46回 14	内耳土鍋	A(27.6) B(16.0)	体部から口縁部片。体部、口縁部は外傾しながら立ち上がる。口縁部は僅かに外反する。	体部及び口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦頭圧痕。	砂粒・石英 内：ぶい黄褐色 外：黒色 普通	P36 PL6 20% 調査区1区4次表表層 外面埋付者
	土師瓦土器					
15	内耳土鍋	A(31.4) B(10.3) C(23.0)	底部から口縁部片。底部は丸底と思われる。体部及び体部は内側気味に立ち上がる。	体部及び口縁部内・外面横ナデ。還元焼成。	砂粒・石英 内：灰褐色 外：黒色 普通	P37 PL6 10% 調査区1区4次表表層 外周と底部内周埋付者
	土師瓦土器					
16	内耳土鍋	A(30.0) B(12.2)	体部から口縁部片。体部は直線的に外傾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦頭圧痕。	石英・長石・礫 内：黒褐色 外：黒色 普通	P38 10% 調査区1区4次表表層 外周埋付者
	土師瓦土器					
17	内耳土鍋	A(31.6) B(10.0)	体部から口縁部片。体部及び口縁部は外傾して僅かに内側しながら立ち上がる。	体部及び口縁部内・外面横ナデ。口縁部ヘラナデ。	砂粒・長石・石英 内：灰褐色 外：黒色 普通	P39 5% 調査区1区4次表表層 外面埋付者
	土師瓦土器					
第47回 18	鍔鉢	A(31.4) B(9.7)	体部から口縁部片。体部及び口縁部は直線的に外傾しながら立ち上がる。口縁部は僅かに帯肉を増す。	体部及び口縁部内・外面横ナデ。体部内面には6本1単位の轡目が施されている。	砂粒・石英 内：灰褐色 普通	P40 PL6 10% 調査区1区4次表表層 外面埋付者。基面列埋
	土師瓦土器					
19	鍔鉢	A(35.0) B(11.4)	体部から口縁部片。体部は内側気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	口縁部内・外面横ナデ。体部外面縦頭圧痕。体部内面には3本1単位の轡目が施されている。	砂粒・雲母・長石 灰褐色 普通	P41 5% 調査区1区4次表表層 内・外面横一部付者。
	土師瓦土器					



図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色・調・焼成	備 考
20	罎 鉢 土師質土器	B (7.0) C (24.6)	底部から体部片。底部は平底で、体部はやや外傾しながら立ち上がる。	底部裏面ヘラナデ。底部及び体部内・外面横ナデ。	長石・石英 黄灰色 普通	P48 PL6 5% H4C表裏 外面横ナデ
21	罎 鉢 土師質土器	B (4.4) C (11.8)	底部から体部片。底部は平底で、突出する。体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。	底部裏面ヘラナデ後、突出部ヘラ削り。体部内・外面横ナデ。梯子状に4本1単位の罎目が施されている。	砂粒・長石 黒褐色 普通	P48 PL6 5% H6C表裏
22	罎 鉢 土師質土器	B (3.6) C (10.8)	底部から体部片。底部は平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	底部及び体部内面横ナデ。体部外面指頭圧痕。体部及び底部に9本1単位の罎目が施されている。	砂粒・雲母・長石 暗灰色 普通	P44 PL6 5% B5C表裏 内・外面横ナデ
23	内耳土罎 土師質土器	B (2.7) C (18.5)	底部から体部片。底部は平底。体部は内彎気味に外傾しながら立ち上がる。	底部、体部内面横ナデ。体部外面指頭圧痕。	砂粒・長石・雲母 内：黒灰色 外：黒褐色 普通	P48 PL7 5% B4C表裏 外面横ナデ
24	皿 土師質土器	A 11.3 B 3.1 C 4.1	平底。底縁はやや突出。体部から口縁部は直線的に外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にぶい黄褐色 普通	P46 PL7 100% 表裏
25	皿 土師質土器	A 11.7 B 3.3 C 4.6	平底。底部はやや突出。体部から口縁部は直線的に外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P47 PL7 95% B5C表裏
26	皿 土師質土器	A 10.7 B 3.0 C 4.8	口縁部一部欠損。底部は平底。体部から口縁部は内彎気味に外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ヘラナデ。内面ヘラ磨き。	砂粒・雲母・礫・ 石英 にぶい褐色 普通	P48 PL7 95% B5C表裏 底部内面一部赤彩
27	皿 土師質土器	A 11.0 B 3.4 C 5.6	平底。体部下手に若干の裏出しを持ち、口縁部は外反しながら立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・礫・ 長石 褐色 普通	P49 PL7 95% A4C表裏 内・外面横ナデ
第48回 28	小 皿 土師質土器	A 6.2 B 1.5 C 4.1	平底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・石英 にぶい赤褐色 普通	P50 PL7 100% H5K表裏
29	小 皿 土師質土器	A 6.7 B 2.0 C (3.6)	底部、口縁部一部欠損。平底。体部から口縁部は内彎気味に立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ヘラナデ。	砂粒・雲母・石英 にぶい褐色 普通	P51 PL7 95% A4E表裏
30	皿 土師質土器	A (15.4) B 3.9 C 5.7	底部から口縁部片。底部は平底で、やや突出する。体部から口縁部は内彎しながら外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	砂粒 浅黄色 普通	P52 PL7 25% H5K表裏
31	皿 土師質土器	A (11.0) B 3.1 C (5.3)	底部から口縁部片。底部は平底で、やや突出する。体部及び口縁部は器肉を厚くしながら外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 内：にぶい赤褐色 外：赤灰色 普通	P53 PL7 45% B5C表裏 口縁部の一部に横ナデ
32	皿 土師質土器	A (10.7) B 3.0 C (5.2)	底部から口縁部片。底部は平底でやや突出する。体部、口縁部は内彎しながら外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ヘラナデ。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P54 PL7 45% 1次面表裏
33	小 皿 土師質土器	A (8.0) B 2.5 C 3.6	底部から口縁部片。底部は平底で、やや突出する。体部及び口縁部は内彎外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ヘラナデ。内面ヘラ磨き。	砂粒・石英・長石 内：褐色 外：黒褐色 普通	P55 PL7 45% G5K 4次面表裏 内・外面横ナデ
34	皿 土師質土器	A (10.8) B 3.1 C 4.0	底部から口縁部片。底部は平底でやや突出。体部及び口縁部は内彎気味に外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 石英 褐色 普通	P56 PL7 20% A4E 1次面表裏 内外面横ナデ
35	皿 土師質土器	A (11.4) B 3.0 C (4.6)	底部から口縁部片。底部は平底。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部でさらに外反する。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P57 PL7 20% A4E 2次面表裏

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
36	皿 土師貫土器	A (8.0) B 2.3 C (4.8)	底部から口縁部片。底部は平底で、突出する。体部及び口縁部は内彎気味に立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	砂粒 浅黄色 普通	P58 35% H56区 3次調査棟
37	皿 土師貫土器	A (8.0) B 2.0 C (4.4)	底部から口縁部片。底部は平底。体部は内彎気味に外上方立ち上がり、体部と口縁部との境にわずかな稜を持つ。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P60 PL7 40% H56区 3次調査棟
38	小皿 土師貫土器	A (6.4) B 1.3 C 3.6	底部から口縁部片。底部は平底。体部及び口縁部は直線的に外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・石英 赤褐色 普通	P60 30% 1次調査棟
39	皿 土師貫土器	A(13.2) B 3.2 C (6.9)	底部から口縁部片。底部は平底で、やや突出する。体部下端に稜を持つ。口縁部は直線的に外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P61 10% A区表棟
40	鉢 土師貫土器	B (4.0) C 4.2	底部から体部片。底部は平底。体部は内彎しながら立ち上がる。	内面ヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 石英 赤褐色 普通	P60 PL7 30% H56区 3次調査棟
41	皿 土師貫土器	B (3.0) C 4.7	底部から口縁部片。底部は平底。体部及び口縁部は外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、ヘラナデ。	石英・雲母・長石 にぶい橙色 普通	P63 PL7 40% H56区表棟 底部外面磨付着
42	皿 土師貫土器	B (1.1) C 4.7	底部から体部片。底部は平底。体部は直線的に外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り。	砂粒 浅黄褐色 普通	P64 20% H56区表棟
43	皿 土師貫土器	B (1.6) C 4.8	底部から体部片。底部は平底。体部はほぼ直線的に立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転糸切り後、よしざ状圧痕。	砂粒 浅黄褐色 普通	P65 20% 一次調査棟
44	甕 陶器	A(23.9) B 29.7 C 14.0	底部から口縁部片。底部は平底。体部は外傾しながら立ち上がり、上端で内彎して口縁部に至る。そこで最大径を持つ。口縁部は折り返され隙間を持つ。	粘土紐巻き上げ成形。内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 にぶい赤褐色 普通	P66 PL7 70% H46区表棟 常備品 14世紀後半
第49図 45	甕 陶器	A(16.2) B (4.4)	口縁部片。口縁部は折り返され隙間を持たない。	粘土紐巻き上げ成形。内・外面横ナデ。	砂粒・石英・長石 赤褐色 普通	P67 5% H56区表棟 常備品 15世紀前半
46	甕 陶器	B(14.0) C 11.1	底部から体部片。底部は平底。体部は外傾しながら内彎状に立ち上がる。	粘土紐巻き上げ成形。内・外面横ナデ。内面指痕圧痕。	礫・長石 褐色 普通	P68 PL7 60% H56区
47	丸皿 陶器	A 11.3 B 3.0 D 6.2 E 0.5	底部から口縁部片。底部は平底で輪高台が付く。体部は内彎気味に外傾しながら立ち上がり、口縁部は外反する。	ロクロ成形。貼り付け高台。胎が薄されている。	砂粒 灰オリーブ色 灰輪 良好	P69 PL7 70% H56区表棟 美濃系 16世紀後半 底面裏に輪トナシ
48	黄輪丸皿 陶器	A(12.4) B 2.2 D 8.2 E 0.4	底部から口縁部片。底部は平底で輪高台が付く。体部及び口縁部は外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。貼り付け高台。回転ヘラ切り。全面陶輪	砂粒 黄褐色 良好	P70 60% H56区表棟 瀬戸美濃系 16世紀 後半~17世紀初頭 見込み目録3
49	丸皿 陶器	B (1.5) D(17.0) E 1.0	底部から体部片。底部は平底で断面が台形の輪高台が付く。体部は外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。貼り付け高台。全面陶輪(長石輪)。	砂粒 灰黄色 普通	P71 PL8 10% H56区表棟 瀬戸美濃系 17世紀前半

図版番号	器 種	寸法(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
50	天目茶碗 陶 器	A(11.0) B (5.9)	体部から口縁部片。体部は外傾しながら直線的に立ち上がり、口縁部との境に線を付す。口縁部上端は外反する。	ロクロ成形。内・外面鉄釉。体部下端は白色を成す。	砂粒・長石 内：灰白色 外：黒褐色 良好	P72 PL8 30% G3表様 瀬戸美濃系 17世紀前半
51	天目茶碗 陶 器	B (1.9) D 4.2 E 0.7	底部から体部片。断面が台形の輪高台が付く。体部は内彎気味に外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。貼り付け高台。内面鉄釉。	砂粒・長石 灰白色 良好	P73 PL8 20% 表様 瀬戸美濃系 17世紀前半
52	鉄絵丸皿 陶 器	A(11.9) B 2.5 D (6.8) E 0.4	底部から口縁部片。断面三角形の輪高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	ロクロ成形。貼り付け高台。底部内面中央に鉄絵。折縁部に灰釉。底部から体部は長石釉。	砂粒・長石 灰白色 良好	P74 PL8 30% G3表様 志野焼部系 17世紀前半
53	鉄絵丸皿 陶 器	B (1.0) D 6.8 E 0.3	底部から体部片。断面三角形の輪高台。体部はやや内彎しながら外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。内部に鉄絵による見込み二重の円。	砂粒・長石 灰白色 普通	P75 PL8 10% E3区表様。 志野焼部系 17世紀前半 見込み目録
54	丸 皿 陶 器	A(12.4) B 2.0 D (7.6) E 0.4	底部から口縁部片。底部は平底で断面三角形の輪高台が付く。体部及び口縁部は内彎気味に外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。全面鉄釉。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	P76 PL8 15% E3区表様 志野系 17世紀前半 内面に見込み目録3
55	丸 皿 陶 器	A(14.0) B 2.8 C (9.4)	底部から口縁部片。平底で輪高台が付く。体部は外傾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。	ロクロ成形。灰釉。	砂粒・長石 灰白色 普通	P77 PL8 15% E3区表様 志野系 17世紀前半
56	丸 皿 陶 器	A(12.1) B 2.6 D 6.7 E 0.2	底部から口縁部片。底部は平底で輪高台が付く。口縁部および体部は外傾しながら立ち上がる。	ロクロ成形。底部ヘラナデ。灰釉。	砂粒・長石 灰白色 普通	P78 PL8 70% 表様 志野系 17世紀前半
第50回 57	丸 皿 陶 器	A(11.1) B 2.1 C (4.8)	底部から口縁部片。底部は平底。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は折縁となっている。	ロクロ成形。底部回転系切り。折縁部内外面に鉄釉。	砂粒・長石 黒色 普通	P79 PL8 40% 表様 重たぬきにより中央部に輪がかかっている。内・外面鉄付重
58	丸 皿 陶 器	A(12.4) B 2.3 D (7.1) E 0.3	底部から口縁部片。断面が台形の輪高台が付く。体部は内彎気味に外傾して立ち上がり、口縁部は外反する。	ロクロ成形。底部ヘラナデ。	砂粒 緑色 良好	P80 PL8 40% 表様 内・外面に見込み目録が見られる。
59	小皿(蓋) 陶 器	A 8.1 B 3.3 D 3.6 E 0.4	底部から口縁部片。高台が付く。体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は外反する。	ロクロ成形。全面鉄釉。	砂粒 白色 良好	P81 PL8 100% E3f区 底部に「清」の字
60	香 炉 陶 器	A (6.1) B 3.0 C (4.0)	底部から口縁部片。底部に脚がつく。有三足と思われる。体部下端から内彎気味に立ち上がる。	ロクロ成形。底部回転系切り。口唇部と外面の上半分に鉄釉。	砂粒 灰白色 良好	P82 PL8 30% H3K表様 瀬戸美濃系
61	香 炉 瓦質土器	A(12.3) B 5.8 C(11.4)	底部から口縁部片。底部は平底と思われる。体部、口縁部は直線的に立ち上がる。	体部及び口縁部内外面鉄ナデ。底部ヘラ削り。体部に菊の押印文。	砂粒・長石・石英 灰色 普通	P83 PL8 20% 表様

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
62	仏花器 陶器	B (7.9) C 6.2	底部から体部片。底部は平底。脚部は内傾しながら立ち上がる。体部は内傾して立ち上がり、球状を呈する。	ロクロ成形。底部回転糸切り。鉄焼。	砂粒 内：赤褐色 外：暗褐色	P84 PL8 80% 調査1区第1号トレンチ内
63	高坏 土器	D (6.5) E 4.5	頸部片。ゆるやかな傾斜を持ちながら「ハ」の字状に立ち上がる。	輪轆成形。脚部内側に輪痕が残る。	砂粒・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P85 5% A3区表採
64	広口壺 弥生土器	B (2.0) C (8.6)	底部片。底部は平底。体部は外傾しながら立ち上がる。	輪轆成形。底部に布目痕。体部に付加糸二重（付加1糸）が密着している。	砂粒・雲母・石英 灰褐色 普通	P86 5% 表採 二次焼成で赤味を帯びている。

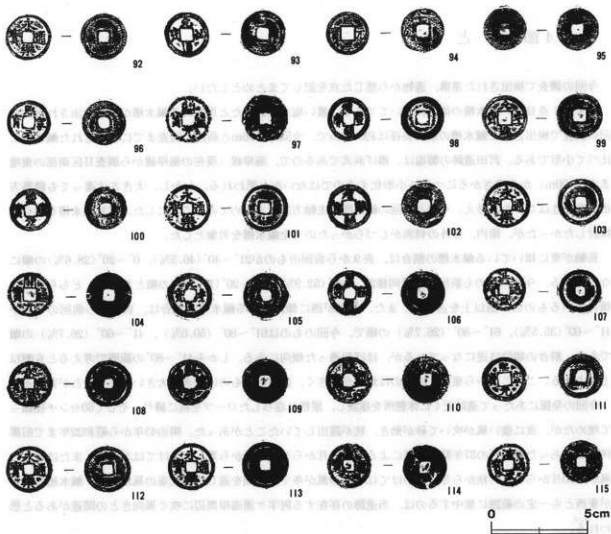
図版番号	器種	計 測 値				出 土 地 点	備 考
		最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)		
第51図72	管状土罐	(4.2)	3.5	3.5	(47.3)	調査1区1次面表採	DP1 PL8

図版番号	器種	計 測 値				石 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第51図73	石 斧	12.6	6.2	3.6	331.5	砂 岩	A区表採	石、柄部は、脚部部分の間に付着、脚部に磨痕がある。 PL8
74	砥 石	22.5	5.5	5.5	1046.4	凝 灰 岩	A3区1次面表採	石、1面磨
75	砥 石	(20.0)	5.5	5.7	(675.5)	凝 灰 岩	A3区表採	石、1面磨
76	砥 石	15.4	4.7	2.3	150.4	凝 灰 岩	B区1次面表採	石、1面磨
77	砥 石	10.8	3.1	1.5	80.7	凝 灰 岩	B区1次面表採	石、1面磨
第52図78	砥 石	9.5	3.2	2.2	103.6	凝 灰 岩	B区1次面表採	石、1面磨
79	砥 石	(8.0)	3.2	2.0	(69.0)	凝 灰 岩	1次面表採	石、1面磨
80	砥 石	9.5	2.6	1.4	56.2	凝 灰 岩	A区1次面表採	石、1面磨
81	砥 石	10.4	5.9	1.9	161.3	凝 灰 岩	B3区1次面表採	石、裏面付、磨痕あり、(A区)の付着あり、(C区)の一部分あり。 PL8
82	石 臼	19.0	20.8	13.5	6690.0	安 山 岩	調査1区1次面表採	石、上下面磨、1面磨
83	石 臼	28.7	(16.5)	8.5	(5750.0)	砂 岩	B区1次面表採	石、磨面付、磨痕あり、4面磨
84	石 臼	19.5	15.5	11.2	3010.0	安 山 岩	B区1次面表採	石、上下面磨、1面磨
第53図85	石 皿	(16.1)	(14.7)	12.7	(2350.0)	砂 岩	表採	石、外側磨、1面磨
86	石 臼	(30.5)	(32.3)	10.4	(3930.0)	砂 岩	B区1次面表採	石、裏面付、一部に1面磨、2面磨あり。 PL8

図版番号	器種	計 測 値				材 質	出 土 地 点	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第53図87	釘	(6.4)	0.9	1.0	(43.0)	鉄	G3区表採	M41 PL9
88	吊金具	8.7	0.6	1.0	(86.1)	鉄	A3区表採	M42 2本合わさっている。
89	耳金	6.8	0.4	0.6	12.8	鉄	A4区表採	M43 PL9
90	釘	9.6	0.6	0.6	18.9	鉄	表採	M44 PL9
91	釘	8.8	0.5	0.4	13.6	鉄	表採	M45

### 遺構外出土遺物観察表

図版番号	鏡 種	初 鋳 年		出 土 地 点	備 考
		時代	年 号 (西 曆)		
第54図92	永来通寶	明	永来 6 年 (1408)	表採	M46 真書 PL9
93	元祐通寶	北宋	元祐 元年 (1086)	*	M47 行書 PL9
94	成淳元寶	南宋	成淳 元年 (1265)	*	M48 真書 背○(成淳○年鋳造) PL9
95	○○○○	-	-	*	M49 - PL9
96	熙寧元寶	北宋	熙寧 元年 (1068)	H5区表採	M50 真書 PL9
97	開元通寶	唐	武德 4 年 (621)	A3区表採	M51 真書 PL9
98	元豊通寶	北宋	元豊 元年 (1078)	A4区表採	M52 真書 PL9



第54図 遺構外出土遺物拓影図

○まるノリノ/跡ノ西ノ地跡主 0(番)

○まるノリノ/跡ノ東ノ地跡主 6(番)

図版番号	銭種	初 鋳 年		出土地点	備 考	
		時代	年 号 (西 曆)			
99	元豊通寶	北宋	元豊元年 (1078)	H5区4次面表採	M53	行書 PL9
100	熙寧元寶	北宋	熙寧元年 (1068)	A1区表採	M54	篆書 M54~M58が接合状態 PL9
101	永楽通寶	明	永楽6年 (1408)	"	M55	真書 PL9
102	元符通寶	北宋	元符元年 (1098)	"	M56	篆書 PL9
103	永楽通寶	明	永楽6年 (1408)	"	M57	真書 PL9
104	開元通寶	唐	武徳4年 (621)	"	M58	真書 PL9
105	元豊通寶	北宋	元豊元年 (1078)	H5区表採	M59	行書 M59~M64が接合状態 PL9
106	皇宋通寶	北宋	寶元元年 (1038)	"	M60	篆書 PL9
107	洪武通寶	明	洪武元年 (1368)	"	M61	真書 PL9
108	永楽通寶	明	永楽6年 (1408)	"	M62	真書 PL9
109	○○○○	-	-	"	M63	- PL9
110	開元通寶	唐	武徳4年 (621)	"	M64	真書 PL9
111	熙寧元寶	北宋	熙寧元年 (1068)	B4a区2次面表採	M65	真書 PL9
112	永楽通寶	明	永楽6年 (1408)	"	M66	真書 PL9
113	永楽通寶	明	永楽6年 (1408)	"	M67	真書 PL9
114	寛永通寶	日本	寛永13年 (1636)	調査II区表採	M68	真書 PL9
115	洪武通寶	明	洪武元年 (1368)	"	M69	真書 PL9

## 第4節 まとめ

今回の調査で検出された遺構、遺物から感じた点を記してまとめとしたい。

まず第1点目は、鹹水槽の傾きについてである。濃い塩水を溜めたと思われる鹹水槽が49基検出された。前回の調査で検出された鹹水槽の最大長径は約5.61mで、今回は3.56mと前回の調査までに検出された鹹水槽に比べて小形である。沢田遺跡の製塩は、揚子浜式であるので、海岸線（現在の海岸線から調査Ⅱ区南部の東境まで約100m）から遠ざかるにつれて小形化するのではないと思われる。しかし、大きさは違っても構築方法に共通性はないかと考え、今回と前回の鹹水槽の主軸方向をまとめてみることにした。屋外鹹水槽を中心に検討したが、屋内、屋外の判別がしづらかったので全鹹水槽を対象とした。

長軸が東に傾いている鹹水槽の割合は、表9から前回のものが $21^{\circ}\sim 40^{\circ}$  (46.5%)、 $0^{\circ}\sim 20^{\circ}$  (28.6%)の順になっている。今回のものも前回の結果同様 $21^{\circ}\sim 40^{\circ}$  (52.9%)、 $0^{\circ}\sim 20^{\circ}$  (17.7%)の順となって、どちらも東に傾いているものの7割以上を占める。また、長軸が西に傾いている鹹水槽の割合は、表10から前回のものが $41^{\circ}\sim 60^{\circ}$  (35.5%)、 $61^{\circ}\sim 80^{\circ}$  (26.7%)の順で、今回のものは $61^{\circ}\sim 80^{\circ}$  (50.0%)、 $41^{\circ}\sim 60^{\circ}$  (26.7%)の順である。割合の順位は逆になっているが、ほぼ似通った傾向にある。しかも $41^{\circ}\sim 80^{\circ}$ の範囲で考えると6割以上を占める。このことから東向きものは傾きが小さく、西向きものは傾きが大きいということが言える。

今回の発掘にあたって遺跡近くに休憩所を建設し、屋根に巡らしたロープを杭に縛り、そして50センチ程掘って埋めたが、夜に強い風が吹いて砂が動き、杭が露出していたことがあった。明治43年から昭和22年まで旧那珂湊市にあった測候所の37年間の記録によると、4月から9月（春から夏）にかけては北と東、または北東の風が、10月から3月（秋から冬）にかけては北西の風が多く、年間を通しては北東の風が多い。鹹水槽の傾きが東西とも一定の範囲に集中するのは、当遺跡の存在する阿字ヶ浦海岸周辺に吹く風向きとの関連があると思われる。<sup>(1)(6)</sup>

表9 主軸が東に傾いているもの

主軸の傾き	前回の基数	割合	今回の基数	割合
$0^{\circ}\sim 20^{\circ}$	16基	28.6%	3基	17.7%
$21^{\circ}\sim 40^{\circ}$	26基	46.5%	9基	52.9%
$41^{\circ}\sim 60^{\circ}$	5基	8.9%	5基	29.4%
$61^{\circ}\sim 80^{\circ}$	5基	8.9%	0基	0%
$81^{\circ}\sim 90^{\circ}$	4基	7.1%	0基	0%
計	56基	100%	17基	100%

表10 主軸が西に傾いているもの

主軸の傾き	前回の基数	割合	今回の基数	割合
$0^{\circ}\sim 20^{\circ}$	4基	8.9%	0基	0%
$21^{\circ}\sim 40^{\circ}$	3基	6.7%	7基	23.3%
$41^{\circ}\sim 60^{\circ}$	16基	35.5%	8基	26.7%
$61^{\circ}\sim 80^{\circ}$	12基	26.7%	15基	50.0%
$81^{\circ}\sim 90^{\circ}$	10基	22.2%	0基	0%
計	45基	100%	30基	100%

次に今回と前回の調査で出土した陶磁器の中で、産地や時期の分かるものをまとめてみると、どちらも常滑系や瀬戸・美濃系といわれる陶磁器が出土している。

### 第6次調査（今回）

14世紀後半 甕（常滑系）1点  
 15世紀前半 甕（常滑系）1点  
 16世紀後半 灰釉丸皿（美濃系）1点

### 第5次調査（前回）

大甕（常滑系）2点  
 瀬戸美濃系灰釉丸皿2点、水注1点

16世紀末～17世紀初頭	黄釉丸皿（瀬戸美濃系）1点	明万曆製染付碗1点, 存地系瓦質1点
16世紀後半～17世紀前半		大甕（常滑系）2点
17世紀初頭		瀬戸美濃系白天目碗1点
17世紀前半	鉄絵皿（志野織部系）2点	瀬戸美濃系丸皿9点, 天目碗3点, 志野小鉢2点
	丸皿（志野系）1点	
	天目茶碗（瀬戸美濃系）9点	
17世紀		赤石・堺系播鉢1点
18世紀		瀬戸美濃系掛け分け茶碗1点, 鉄釉丸碗1点

このほかに土師質土器（内耳土鍋、皿）が多数出土しているが、ほとんど遺構外出土である。内耳土鍋の多くには使用の痕跡である煤が付着している。そして、15世紀に比定できる在地産のいわゆる「常陸型」の内耳土鍋もある。今回の調査では前回の調査時に出土した遺物より古い時期に作られたと思われる常滑系の壺（14世紀後半）がある。それが製作後直ちに当遺跡に持ち込まれたと考えるには無理があると思われるが、内耳土鍋から15世紀代には当遺跡で製塩が行われていたと考えたい。

3点目は、第122・123号粘土貼土坑（SK243A・B）から出土した白色塊の分析結果についてである。粘土貼土坑のところで若干触れたが、白色塊が塩作りの過程で出る「苦汁」ではないかと考えた。そして、もし「苦汁」ならば小形の粘土貼土坑の使い方の手掛かりになると考え、分析を依頼した。その分析結果によると、方解石がほとんどを占め、ほかに若干の淡水性の珪藻化石であり、「苦汁」ではなかった。方解石は炭酸岩塩中に多く存在し、炭酸岩塩の代表的なものは石灰岩で、その石灰岩中には50%以上の方解石とアラレ石（CaCO<sub>3</sub>）が存在する。そして、ハマグリ、アサリ、アカガイなどの二枚貝の貝殻の主成分も炭酸カルシウム（CaCO<sub>3</sub>）であるので、白色塊の物質の原形は石灰岩か貝殻であるという結果である。現在この貝殻を利用した用途として、左官用の塗材、セメント原料（日本にはなく外国の例）、飼料、美術工芸品材料などがある。以上のことを踏まえて、この物質が何の目的で作られたかを考えてみたい。鹹水槽や粘土貼土坑を分割してみると、粘土を貼った下に黒色土砂があり、その中に破砕貝（貝を砕いたようなもの）が混じっている。また、第4号不明遺構である砂に貼られた黒色土の中にも破砕貝がみられた。白色塊の利用状況の中に塗材があるが、竈、鹹水槽、粘土貼土坑を構築する時に、この白色物質が使われた可能性が高いと思われる。過去の調査で検出された竈状遺構の構築材である土壌の科学分析を行った折りにも、貝殻小片の影響と考えられCa<sup>++</sup>等が検出されている。現在でもカキの貝殻を使って、胡粉と呼ばれる水性系の人形用顔料が作られている。作り方は5～6年野積みして有機物の分解を待ち、次に貝殻を洗浄したのちハンマー等で砕き、それを溝のない石臼で粉にするとのことである。今回の調査でも溝なしの石臼、播鉢、石皿が出土したり、遺構中から貝殻が確認されたりしていることから、これらの遺物や小形の粘土貼土坑が白色の塊を作るのに使われた可能性があると考えられる。

第4点目は、しっかりと石を組んである井戸状の遺構についてである。底からしみ出た水が保健所の水質検査の結果、飲料に適するということは一時的にでも当遺跡で生活ができるという一つの証しと考えられる。

第5点目は、石積みされた第1・2号不明遺構についてである。この遺構の特徴として、①入口と思われる部分が海方向を向いていること、②底面に火を焚いた痕跡がみられたこと、③積み重ねられた壁石の一部が火熱を受けて赤化していたことこの3点があげられる。また、千葉県の御宿海岸には小屋（古くは壁の半分ほどが石積みされていたが現在は壁石の部分がブロック等に変っている）が存在し、海女が暖とる休憩所等として利用されている。石で壁を造ると石が熱を持って暖かさが増すという知恵が働いていたようである。遺構の検

出状況やかつて阿字ヶ浦海岸にも海女が存在したという話及び他地域の同じような遺構の存在と利用状況から本跡もそれに類似する小屋ではないかと判断した。

今までの調査から当遺跡は塩作り、墓、漁等に使用されてきたことが言える。

参考・引用文献

- (1) 茨城県教育財団 「一般県道水戸那珂湊線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 沢田遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第95集』 1995年3月
- (2) 浅野晴樹 「東国における中世在地系土器について—主に関東を中心にして—」 『国立歴史民族博物館研究報告第31集』 国立歴史民族博物館 1991年3月
- (3) 三輪茂雄 増補 「石臼の謎」 クリオ 1996年9月
- (4) 中・近世研究班 「沢田遺跡における遺構形態について—考察」 『研究ノート第3号』 茨城県教育財団 1996年6月
- (5) 茨城県教育財団 「常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書1 沢田遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第52集』 1988年3月
- (6) 茨城県教育財団 「常陸那珂港関係埋蔵文化財調査報告書2 沢田遺跡」 『茨城県教育財団文化財調査報告第77集』 1992年3月



# 付 章

## 沢田遺跡から出土した白色物質の分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

### はじめに

沢田遺跡からは17世紀頃の鹹水槽が検出され、遺構内から白色塊物質が出土した。この白色塊物質は、肉眼観察においてもかなり結晶度の良い物質であることが予想された。また、遺構の性格から考えて、この白色塊物質は「舌汁」の可能性が指摘されているが、その詳細は不明である。今回の分析調査は、この白色物質の由来を明らかにすることを目的とする。

今回の試料のように結晶性物質であることが予想できる場合には、即知物質のX線回折図との比較により、容易に未知物質を同定できる。また、化学分析のように試料の前処理に薬品を使用することがなく、物質の結晶度が良い場合は極少量試料でも同定が充分可能である。今回の試料は量も多いことから、アルミ板試料法によるX線回折分析を実施する。また、試料がどのような環境下で生成されたのかを検討するために珪藻分析もあわせて行う。

### 1. 試料

17世紀頃と推測されている鹹水槽 (SN-243) から検出された白色塊物質1点である。鹹水槽のそこには粘土が敷かれその上位に今回試料とされた白色物質が検出された。

### 2. X線回折

#### (1) 方法

白色部2g程度を小型葉さじ (スパーテル) で採取し、メノウ乳鉢で微粉砕した。この微粉砕試料をX線回折測定用のアルミ板に装着し、次の条件でX線回折分析を行った (足立, 1980; 日本粘土学会, 1987)。同定は測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または好物をX線粉末回折線総合解析プログラム (五十嵐, 未公表) により検索した。

装 置 : 島津制作所製XD-3A

Target : Cu ( $K\alpha$ )                      Scanning Speed : 2°/min

Filter : Ni                                      Chart Speed : 2cm/min

Voltage : 30KVp                              Divergency : 1°

Current : 30mA                                Receiving Slit : 0.3mm

Count Full Scale : 10,000C/S              Scanning Range : 7~60°

Time Constant : 2.0sec

## (2) 結果

X線粉末回折線総合解析プログラムによる本試料のX線回折図とその回折線と適合する即知物質のX線回折図を図1に示す。また、末巻には島津制作所製XD-3Aより測定されたX線回折チャートと検出鉱物略号を添付する。

粉末X線回折法(アルミ板試料)により、 $2\theta=29.4^\circ$ (最強)、 $48.5^\circ$ (強)、 $47.6^\circ$ (強)、 $39.4^\circ$ (強)の主要回折線が認められ、この回折線に該当する鉱物は方解石(calcite,  $\text{CaCO}_3$ )である。また、方解石以外にも $2\theta=9.1^\circ$ 、 $15.8^\circ$ に弱い回折線が認められるが、この回折線に該当する鉱物はエトリンジャイト(ettringite,  $\text{Ca}_6\text{Al}_2(\text{SO}_4)_3(\text{OH})_{11}\cdot 26\text{H}_2\text{O}$ )と同定される。

## 3. 珪藻分析

### (1) 方法

試料を鉄乳鉢で粉砕する。この中から乾重で約10g秤量し、塩酸、過酸化水素水の順に化学処理し、試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。自然沈降法で粘土分、傾斜法で砂分を除去した後、適量計り取りカバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュワックスで封入する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージで任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する(珪藻化石の少ない試料はこの限りではない)。種の同定は、K.Krammer and Lange-Bertalot (1986-1988-1991a-1991b)、K.Krammer (1992)などを用いる。

### (2) 結果

試料からは、淡水生の珪藻化石が3個体(*Achnanthes exigua* Grunow, *Cymbella minuta* Hilseex Rabh, *Pinnularia borealis* var. *rectangularis* Carlson) 産出しただけであった。また、産出した珪藻化石は全て壊れていた。

## 4. 考察

X線回折の結果から、白色塊物質は方解石が主体で、そこに極微量なエトリンジャイトが混在するものと判断される。方解石は、一般には炭酸塩岩中に多く存在し、特に炭酸塩岩の代表な石灰岩中には50%以上の方解石またはアラレ石(aragonite,  $\text{CaCO}_3$ )が存在する。また、ハマグリ、アサリ、アカガイなどの二枚貝の貝殻の主成分は炭酸カルシウム( $\text{CaCO}_3$ )であり、95~98%を含有する。貝殻の炭酸カルシウムは結晶学的分類では、新しい貝殻の場合に本質はアラレ石であるが、方解石とアラレ石の混在型、ある種の貝殻では方解石型のものも存在する。この貝殻を利用した現在の用途として左官用の塗料材、セメント原料(日本にはないが、外国に例がある。)、飼料、美術工芸品材料などがある(石膏石灰学会, 1980)。したがって、白色物質の原形はおそらく、石灰岩、あるいは貝殻であったと考えられ、指摘された「苦汁」の可能性は低い。

なお、エトリンジャイトは膨張セメントや高硫酸塩スラグセメントの主要生成物であり(日本粘土学会, 1987)、いわゆるセメントがつくられるときの人工生成鉱物である。自然界では極稀に存在する。今回の白色物質にはその存在は極微量と思われるがエトリンジャイトが当時生成された鉱物であるか否かはわからない。

一方珪藻分析では、淡水生の珪藻化石が僅かに産出することから、淡水の環境下で生成された可能性があるが、産出個数が少ないため断定には至らない。

<検出鉱物の説明>

・方解石 (calcite)

化学式は $\text{CaCO}_3$ 。三方晶系。板状・菱面体・偏三角面体結晶、団塊状・鐘乳状・さんご状・纖維状。断口貝殻状。ぜい弱、硬度3、比重2.710。ガラス光沢、劈開面で真珠光沢、純粋なものは無色～白色、不純物により赤・褐・黒・青・緑色。多くは、紫外線・X線・電子線・太陽光によって蛍光やリン光を発し、しばしば熱により、ときによって磨砕によって発光。薄片中無色。希酸に可溶、 $\text{CO}_2$ を発生。方解石は $\text{CaCO}_3$ のうちで熱力学的に安定型。準安定な多形にアラレ石とファータライトがあり、これらは加熱により非可逆的に方解石に転移。また、高温で安定の $\alpha$ - $\text{CaCO}_3$ や、そのほか $\mu$ - $\text{CaCO}_3$ などが知られている(地団研, 1981)。

・エトリンジャイト (ettringite)

化学式は $\text{Ca}_4\text{Al}_2(\text{SO}_4)_3(\text{OH})_{12}\cdot 26\text{H}_2\text{O}$ 。六方晶系。晶癖柱状。硬度2~2.5、比重1.77。無色透明。部分脱水により白色不透明となる。透過光で無色、結晶水の75%は、 $110^\circ\text{C}$ で失われ、赤熱により完全に脱水する。希酸に容易に溶ける。ドイツ、ライン地方Ettringen付近の白り $\rightarrow$ 石カスミ石テフライト中の変成石灰岩質含有物の空隙中に産出したので、その地名にちなんで命名された。

<引用文献>

足立吟也(1980)粉末X線回折法。「機器分析のてびき3」. p.64-76, 化学同人.

地学団体研究会・地学事典編集委員会(1981)増補改訂 地学事典. 1612p., 平凡社.

Krammer, K.(1992) PINNULARIA, eine Monographic der europaischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. p.1-353., BERLIN-STUTTGART.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1986) Bacillariophyceae, Teil 1, Naviculaceae. Band 2/1 von: Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 876p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1988) Bacillariophyceae, Teil 2, Epithemiaceae, Bacillariaceae, surirellaceae. Band 2/2 von: Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 536p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991a) Bacillariophyceae, Teil 3, Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band 2/3 von: Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 230p., Gustav Fischer Verlag.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H. (1991b) Bacillariophyceae, Teil 4, Achnathaceae, Kritische Ergänzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. Band 2/4 von: Die Süsswasserflora von Mitteleuropa, 248p., Gustav Fischer Verlag.

日本粘土学会編(1987)粘土ハンドブック第二版. 1289p., 技報堂出版.

石膏石灰学会(1980)石膏石灰ハンドブック. 826p., 技報堂出版.

写 真 图 版



調査前風景



第10号製塩跡屋外鹹水槽



H4・5区完掘全景



第17号トレンチ試掘(北から)



第10号トレンチ試掘(西から)



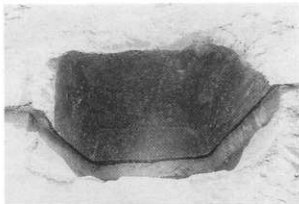
第105号鹹水槽



第118号鹹水槽



第116号鹹水槽土層断面



第106号鹹水槽断面割狀況



第130号粘土貼土坑



第131号粘土貼土坑断面割狀況



第133号粘土貼土坑遺物出土狀況



第122・123号粘土貼土坑白色塊出土狀況



第157号粘土貼土坑遺物出土狀況



第182号土坑土層断面

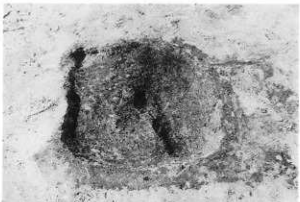
PL 4



第155号土坑



第209・210号土坑



第71号炉跡



H5f区遺物出土状況



第1号トレンチ内遺物出土状況



人骨出土状況(伸展葬)



人骨出土状況(屈葬)



獣骨(馬)出土状況





井戸状遺構確認状況



井戸状遺構



貝集積地確認状況



第1号不明遺構(第1号石積み遺構)確認状況



第1号不明遺構(第1号石積み遺構)



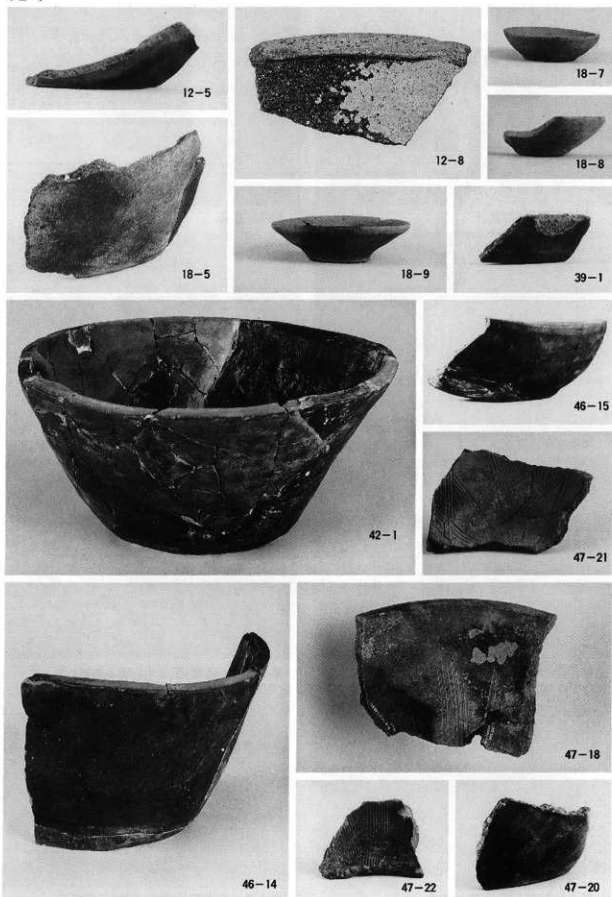
第2号不明遺構(第2号石積み遺構)



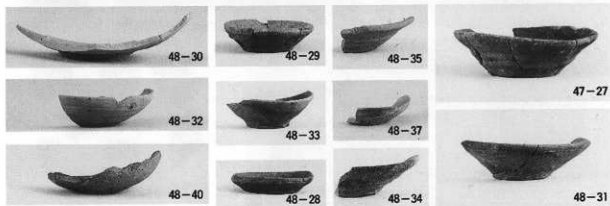
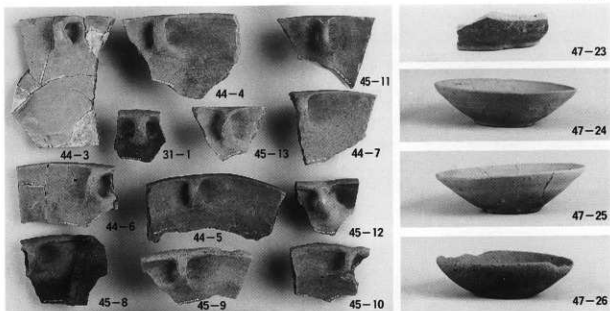
第4号不明遺構(版築状遺構)



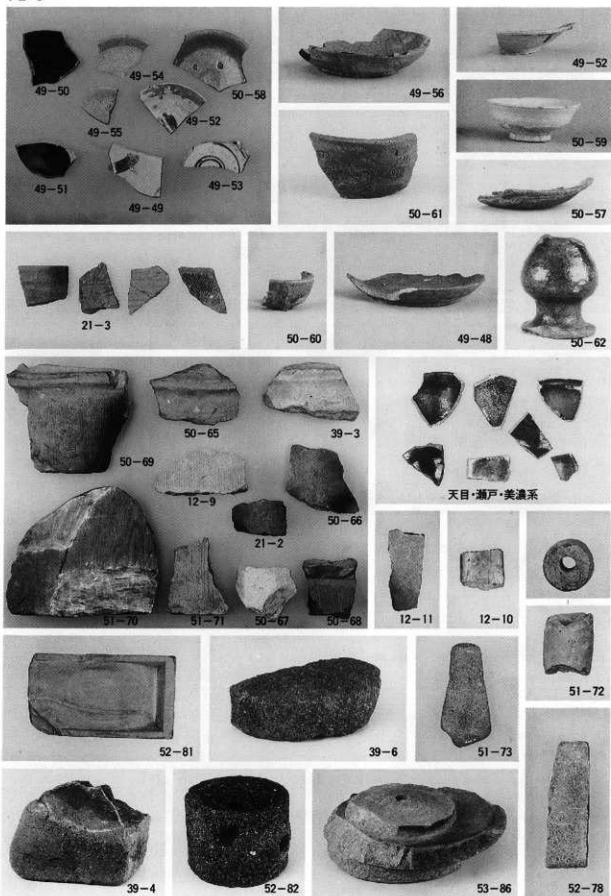
第4号不明遺構(版築状遺構)土層断面



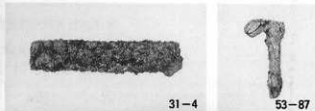
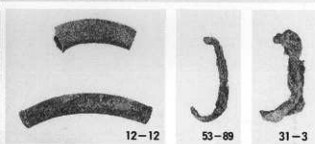
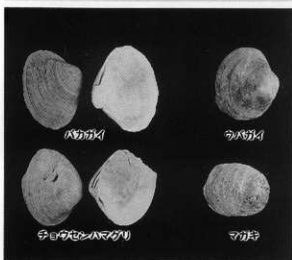
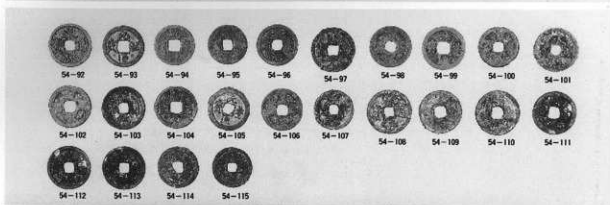
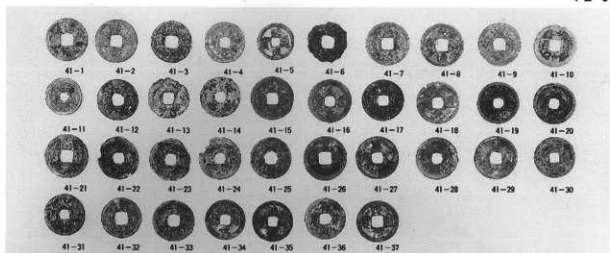
鹹水槽・粘土貼土坑・第2号不明遺構（第2号石積み遺構）・遺構外出土遺物



土坑・遺構外出土遺物



鹹水槽・伊跡・第1号不明遺構（第1号石積み遺構）・遺構外出土遺物



鹹水槽・土坑・貝集積地・墓域・遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第115集  
国営常陸海浜公園整備事業に伴う  
埋蔵文化財調査報告書  
沢 田 遺 跡

平成8(1996)年9月25日 印刷  
平成8(1996)年9月30日 発行

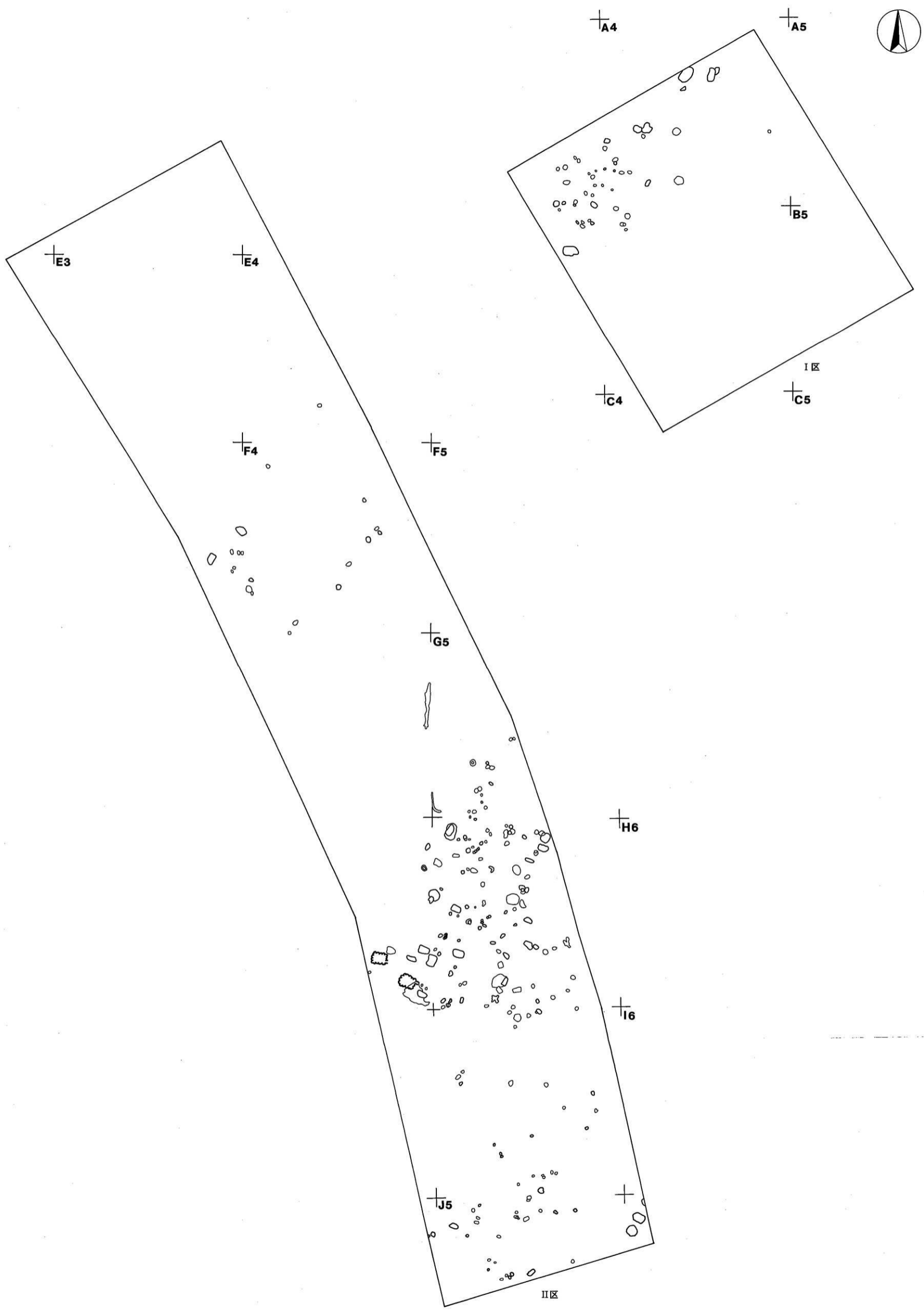
発行 財団法人 茨城県教育財団  
〒310 水戸市見和1丁目356番地の2  
TEL 029(225)6587

印刷 (有) ミツギ印刷社  
〒311-41 水戸市河和田町4433-33  
TEL 029-252-8481

付 図

茨城県教育財団文化財調査報告第115集

沢田遺跡



沢田遺跡遺構配置図

